

Ⅲ 学校評価自己評価

1. 学園保幼小中一貫教育報告一覧

学 園 名	「目指す子ども像」、教 育 目 標
1 峰山学園	【目指す子ども像】 「意欲を持って自ら学ぶ子ども（知）」 「思いやりのある子ども（徳）」 「進んで心と体を鍛える子ども（体）」 【教育目標】 「自己肯定感を持ち、自分の将来を展望し、共に学ぶ子の育成」
2 大宮学園	(1) 教育目標 自他を尊重し、自ら学ぶ 子どもの育成 (2) 目指す子ども像 ○ 意欲的に学び、チャレンジする子ども（知） ○ 自他を大切にし、思いやりのある子ども（徳） ○ 心身を鍛え、活動的な子ども（体）
3 網野学園	【目指す子ども像】 あ：明るく元気に進んで学ぶ子 【知】 意欲的に学習に取り組む子ども み：みんななかよく支え合う子 【徳】 規範意識をもち、仲間と支え合う子ども の：のびのび生き生きやりぬく子 【体】 粘り強く心身を鍛え、やり抜く子ども 【教育目標】 将来に夢と希望をもち、郷土を愛し、知・徳・体の能力を伸ばす子どもの育成を図る教育の推進
4 丹後学園	「目指す子ども像」 ①ことばで伝え合い、主体的に学ぶ子 【知】 ②自分を大切にし、人を思いやれる子 【徳】 ③ねばり強く身体をきたえる子 【体】 教育目標 「夢と希望と創造性あふれる豊かな心を持ち、未来に向けて主体的に生きる子どもの育成」
5 弥栄学園	教育目標 「ふるさとを愛し、主体的に学び、心豊かで、たくましく生き抜く子どもの育成」 目指す子ども像 (知) 知識と技を磨き、活用する子 *自ら課題に取り組む（自主的な姿勢） (徳) 自他の良さを知り、共に伸びる子 *仲間と知恵を絞る（対話的な学び） (体) 心身を鍛え、何事もやりぬく子 *解決策を探り、自信をつける（深い学び）
6 久美浜学園	[教育目標] 「ふるさとを愛し、意欲的に学び、やさしい心を持ち、根気強く努力する子どもの育成」 [目指す子ども像] (知) 意欲的に質の高い学力を身につけようとする子ども (徳) 自ら正しく判断、行動し、豊かな心をもつ子ども (体) 心身を鍛え、粘り強く最後まで、協力して取り組む子ども

2. 京丹後市立こども園、学校評価自己評価報告一覧

学 校 名	学 校 ・ 園 教 育 目 標
1 峰山こども園	“元気いっぱい 笑顔いっぱい こども園 だ〜い好き！” 〜いっぱい遊ぼう 夢中になって〜 1 生活に必要な習慣・態度を身に付け、健康な心と体で生きる力を育てる。 2 主体的に活動し、言葉を介してコミュニケーション力を育てる。 3 身近な人や地域とのかかわりをもつ力を育てる。 4 友達と関わりながら、夢中になって遊び込める環境を整えながら、持続力や協同力を育てる。
2 大宮こども園	人との関わりや体験を通して、心豊かでたくましく、生き生きと遊ぶ子どもの育成 ・心も体も元気な子どもの育成 ・のびのびと遊び、感性豊かな子どもの育成 ・人の話を聞き、自分の思いや考えを言える子どもの育成 ・自分も友達も大好きで、思いやりのある子どもの育成
3 網野こども園	『園児自らが主体的に環境に関わり、心豊かでたくましく生きる力を育てる。』 (あ)明るく元気で主体的に活動する子どもの育成 (み)みんななかよく思いやりのある子どもの育成 (の)伸び伸び生き生きやりぬく子どもの育成 <テーマ> 『どきどき わくわく きらっ！ ひとりひとりがかがやいて』
4 丹後こども園	・生活や遊びの中で様々なことに心を動かし、豊かな園児を育む。 ・地域に愛され、保護者に信頼される園づくりを進める。 ・資質向上を目指し、職員同士が互いに学び合える組織づくりを進める。
5 弥栄こども園	1 生活に必要な習慣・態度を身に付け、健康な心と体を育てる。 2 自ら様々な環境に関わり意欲的に遊ぶ中で豊かな心を育てる。 3 身近な人や地域と関わり、思いやりの心や人権意識、規範意識の芽生えを育む。

学 園 名	「目指す子ども像」、教 育 目 標
6 かぶと山こども園	こども園教育目標 「元気な体と豊かな心、生きる力を持った たくましい子ども」 《元気 勇気 笑顔 つながれ仲間》 ～のびのび いきいき 仲間と共に輝いて～～ 1 園児自らが興味関心をもって環境に関わり、心豊かでたくましく、生きる力を育てる。 2 人との関わりの中で、人に対する愛情と信頼感、人権を大切にする心を育てる。 3 相手の思いを受け止めながら、自分の思いや考えを表現する力を育てる。

学 校 名	学 校 ・ 園 教 育 目 標
7 峰山小学校	多様な人々と協働し、個性や能力を発揮して主体的・自律的に生きる力を育てる。 1 自ら学び、学んだことを伝え合う子どもを育てる。 2 生き方・在り方を深く考え、自律して行動する子どもを育てる。 3 よりよい社会をつくろうと力を合わせる子どもを育てる。
8 いさなご小学校	教育目標 「自己肯定感を持ち、自分の将来を展望し、共に学ぶ子の育成」 目指す子ども像 1 意欲を持って自ら学ぶ子ども 2 思いやりのある子ども 3 進んで心と体を鍛える子ども
9 しんざん小学校	1 一人一人が自己肯定感を持ち、いきいき活動する学園 2 「中学校卒業時の子どもの姿」に全教職員が責任を持つ学園 3 保護者・地域に信頼される学園
10 長岡小学校	「峰山学園」の経営方針を踏まえ、教育活動全体を通して学園教育目標「自己肯定感を持ち、自分の将来を展望し、共に学ぶ子の育成」に迫る。 〈峰山学園 めざす子ども像〉 ・意欲を持って自ら学ぶ子ども（知） ・思いやりのある子ども（徳） ・進んで心と体を鍛える子ども（体）
11 大宮第一小学校	「学校教育目標」（長期目標） ◆自他を尊重し、自ら学ぶ こどもの育成 「目指す学校像」 ◇一人一人が輝き、生き生き活動する学校【児童】 ◇やりがいを持って自分の力を発揮する学校【教職員】 ◇安心して子どもを任せられる学校【保護者】 ◇他の地域に誇れる地域とともにある学校【地域の方】
12 大宮南小学校	「自他を尊重し、自ら学ぶ 子どもの育成」 ・意欲的に学び、チャレンジする子ども ・自他を大切にし、思いやりのある子ども ・心身を鍛え、活動的な子ども 大宮学園「教育目標・目指す子ども像」の実現を目指し、学園の園所や小中学校の保育・教育から謙虚に学び、常に自校教育の改善に努める。
13 網野北小学校	1 落ち着いた学校、落ち着いた授業により学力を付ける。 2 規範意識を醸成し、思いやりをもち仲間と共に生きる、豊かな人間関係を築く力を育てる。 3 すべての子どもに、未来を展望し、自ら将来を切り拓く力を付ける。 4 自然・人・社会とのつながり、郷土を愛する心を育てる。
14 網野南小学校	網野学園基本方針より 1 落ち着いた学校、落ち着いた授業により学力を付ける。 2 規範意識を醸成し、思いやりをもち仲間と共に生きる豊かな人間関係を築く力を育てる。 3 すべての子どもに、未来を展望し、自ら将来を切り拓く力を付ける。 4 自然・人・社会とつながり、郷土を愛する心を育てる。
15 島津小学校	1 落ち着いた学校、学び合いのある授業により学力を付ける。 2 規範意識を醸成し、思いやりをもち仲間と共に生きる、豊かな人間関係を築く力を育てる。 3 すべての子どもに、未来を展望し、自ら将来を切り拓く力を付ける。 4 自然・人・社会とのつながり、郷土を愛する心を育てる。
16 橘小学校	【教育目標】 「将来に夢と希望をもち、郷土を愛し、知・徳・体の能力を伸ばす児童・生徒の育成を図る教育の推進」 【目指す子ども像】 あ：明るく元気に進んで学ぶ子 【知】意欲的に学習に取り組む子ども み：みんななかよく支え合う子 【徳】規範意識を持ち、仲間と支え合う子ども の：のびのび生き生きやりぬく子 【体】粘り強く心身を鍛え、やりぬく子ども
17 丹後小学校	教育目標（丹後学園共通） 「夢と希望と創造性あふれる豊かな心を持ち、未来に向けて主体的に生きる子どもの育成」 ＜目指す学校像＞ 1 よく考え学ぶ学校 2 友だちと仲良くする学校 3 最後まで粘り強く努力する学校 4 家庭・地域のつながりを生かした学校
18 宇川小学校	夢と希望と創造性あふれる豊かな心を持ち、未来に向けて主体的に生きる子どもの育成 ○目指す子ども像 (1)言葉で伝え合い、主体的に学ぶ子(知) (2)自分を大切にし、人を思いやれる子(徳) (3)ねばり強く身体を鍛える子(体)
19 吉野小学校	1 生徒指導の実践上の視点を生かした授業づくりを推進し、生きる力の確実な習得と、言語能力を高め、課題解決に向けて思考力を育む教育の推進 2 主体的に行動できる力と豊かな人間性を育み、個々が大切にされる心の教育を推進する。 3 学園の保幼小中一貫教育を、校種間における様々な取組等を充実させながら推進する。 4 家庭、地域とつながり、信頼される学校、特色のある学校づくりを推進する。
20 弥栄小学校	「ふるさとを愛し、主体的に学び、心豊かで、たくましく生き抜く子どもの育成」 ・知識と技を磨き、活用する子 ・自他の良さを知り、共に伸びる子 ・心身をきたえ、何事もやりぬく子

学 校 名	学 校 ・ 園 教 育 目 標
21 久美浜小学校	教育目標【久美浜学園全体】 「ふるさとを愛し 意欲的に学び やさしい心を持ち 根気強く努力する子どもの育成」 目指す子ども像【久美浜学園全体】 （１）意欲的に質の高い学力を身に付けようとする子ども（知） （２）自ら正しく判断、行動し、豊かな心を持つ子ども（徳） （３）心身を鍛え、粘り強く最後まで、協力して取り組む子ども（体） 重点目標【久美浜学園全体】 「意欲的に生活・学習に取り組む子どもの育成」 ～ 子どもの実態や系統性を踏まえた指導 ～ 指導の重点『学力の向上』 ①基礎・基本の徹底 ②主体的に学ぶ力の伸長 ③家庭学習時間の確保 校訓「一生懸命」を意識した教育活動の推進 指導キーワード「ポストコロナを受け【創造と協働】」的な業務推進
22 高龍小学校	学習・生活に生き生き取り組むたくましい子どもの育成 ― アセスメントを踏まえた系統的な指導 ― １ 主体的に学ぶ力の伸長（授業づくり） ２ 集団での学びの質の向上（学級づくり） ３ 家庭学習習慣の定着
23 かぶと山小学校	１ 久美浜学園教育目標 「ふるさとを愛し、意欲的に学び、やさしい心を持ち、根気強く努力する子どもの育成」 ２ めざす児童像 （１）意欲的に質の高い学力を身につけようとする子 （２）自ら正しく判断、行動し、豊かな心をもつ子 （３）心身を鍛え、粘り強く最後まで協力して取り組む子
24 峰山中学校	【教育目標】 自己肯定感を持ち、自分の将来を展望し、共に学ぶ生徒の育成 【めざす生徒像】 ・意欲を持って自ら学ぶ生徒 ・思いやりのある生徒 ・進んで心と体を鍛える生徒 【重点課題】（社会的自立につなぐ教育） ・「個別最適な学び」と「協働的な学び」の充実を図り、「主体的・対話的で深い学びの実現」に向けた授業改善の推進と学力の向上 ・「探究的な学び」を通じて課題解決能力をはぐくむ教育を推進 ・つながる力を生かした豊かな人間性の育成と不登校の解消・未然防止
25 大宮中学校	大宮学園教育目標 「自他を尊重し、自ら学ぶ子どもの育成」 大宮中学校重点目標 「ふるさとを愛し、夢や希望をもって未来を切り拓く、心豊かでたくましい生徒の育成」 ～子どもたちの「がんばろう」という気持ちを引き出し高める指導を目指す～ １ 夢や希望を持って未来を切り拓く能力と実行力の育成 ２ 学習意欲を高める授業改善と家庭学習の定着 ３ 健康な体と豊かな心の教育の充実 ４ 信頼され、開かれた学校づくり ５ 教職員の資質能力の向上 ６ 大宮学園保幼小中一貫教育の推進
26 網野中学校	将来に夢と希望をもち、郷土を愛し、知・徳・体の能力を伸ばす生徒の育成を図る教育の推進 １ 規範意識を醸成し、落ち着いた学校、落ち着いた授業により学力を付ける。 ２ 未来を展望し、自ら未来を切り拓く力を付ける。 ３ 思いやりをもち仲間とともに生きる、豊かな人間関係を築く力を育てる。 ４ 自然・人・社会とつながり、郷土を愛する心を育てる。
27 丹後中学校	○確かな学力の育成とわかる授業づくりのための不断の工夫改善 ○豊かな心と健康な体をはぐくむ教育の充実 ○進路指導の充実 ○信頼される学校づくり ○保幼小中一貫教育の充実の推進による教育活動の充実
28 弥栄中学校	１ 全教職員で、生徒・保護者との信頼関係を築くとともに、生徒・地域の実態をよくつかみ、学校の活性化に全力を注ぐ。 ２ 主体的に学び、たくましく心身を鍛え、人権尊重を基に人間性豊かな生徒を育む教育課程の編成と実施に努める。 ３ 基礎的・基本的内容の指導の徹底と定着を図る授業づくりを進める。 ４ 知識技能を活用し、自ら考え、判断し、表現する力を育てていく。 ５ 未来を拓くために主体的に進路選択ができる能力を育てる。
29 久美浜中学校	＜久美浜学園＞ 指導の重点：学力向上 （１）基礎・基本の徹底 （２）主体的に学ぶ力の伸長（授業づくり） （３）家庭学習時間の確保 ◇規範意識の醸成を基盤とし、当たり前のことが当たり前のできる学校、「命」「今」「仲間」を大切にする学校を目指す。 ◇久美浜学園保幼小中一貫教育の一層の推進により、指導観について共通理解を図り、系統的、組織的な教育実践を推進する。 １ 非認知能力の伸長と、「主体的・対話的で深い学び」を追求した授業の充実による学力の向上 ２ 好ましい人間関係の構築と自己肯定感・自己有用感の向上 ３ 不登校の未然防止と不登校（傾向）生徒の改善 ４ 「久美浜学園学校運営協議会」を核とする地域力と学校力を統合した、地域ぐるみの子育て支援体制の確立 ５ アフターコロナにおける「新しい教育の創造」

令和5年度 峰山学園保幼小中一貫教育報告書

1 「目指す子ども像」、教育目標

【目指す子ども像】
「意欲を持って自ら学ぶ子ども（知）」
「思いやりのある子ども（徳）」
「進んで心と体を鍛える子ども（体）」
【教育目標】
「自己肯定感を持ち、自分の将来を展望し、共に学ぶ子の育成」

2 保幼小中一貫教育として解決を目指す重点課題、取組の柱とする内容

指導の重点「確かな学力の育成（授業研究）」「コミュニケーション能力の育成」「評価を見通した取組の充実」を各こども園・小・中学校の教育活動や校内研究・研修に位置付ける。

(1) 確かな学力の育成

他者と関わりながら深く学び、社会的に自立して主体的に生き抜くための学力を育てる。

そのために、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を踏まえた教育を土台にして、幼児期から中学校まで一貫した教育を進める。（遊びや授業の研究）

ア 「主体的・対話的で深い学び」を実現する学習や遊びを進める。

①学習や活動に関心を持ち、粘り強く取り組み、次につなげようとする主体的な学び・遊び

②他者との対話やかかわりをもとに考え、自分の考えを広げ深めようとする対話的な学び・遊び

③見方・考え方を働かせながら、関連付けたり情報を整理したり探究したりして問題を解決しようとする深い学び

イ（小・中学校）タブレット等のICT器機を効果的に活用する。

ウ（小・中学校）目標から遡って、評価方法を先に設計し、それを踏まえた指導計画と授業設計に努める。

(2) コミュニケーション能力の育成

遊びや学習を通して、ことばによる伝え合いを軸とした学びや、他者との共感的人間関係を育成することなど、自立に向けて幼児期から中学校までの一貫した実践を進める。

ア 幼児児童生徒が安心できる「居場所づくり」（存在感・充実感）を進める。

イ お互いを認め合う心の醸成を図る。

ウ 人とつながる楽しさを味わわせ、ことばで伝え合う力を育む。

(3) 評価を見通した取組の充実

ア 学園評価・学校評価の結果に基づく学園経営の充実

イ 教育評価・指導評価の結果に基づく教育実践の改善

3 保幼小中一貫教育の具体的な内容と評価

項目	内容	評価 (実践の過程・幼児児童生徒の姿・教職員の見方等)
幼児児童生徒の実態や課題、目指す子ども像や目標、方針等の共有方策	(1) 学園内の全ての園・学校が、目指す子ども像・教育目標を共通化 (2) 学園内の全ての園・学校が、学園経営方針を各学校の経営方針へ位置付け	(1) 幼児児童生徒の実態や課題などや目指す子ども像、目標方針の共有について ○年度当初の研修会を集合型で実施し、峰山学園の幼児・児童・生徒実態から明らかにした経営方針を全教職員で確認し、運営できた。 ○児童・生徒の状況については、各会、部会で共通理解を図り、取組に生かしている。担任会でも、児童の状況について交流し、指導方法を学び合うことができた。 (2) 学校運営及び進行管理 ○経営会議を定期的開催し、学園内の教育課題の把握・整理を行いながら、教育目標・目指す子ども像の実現を目指して経営を行うことができた。

	(3) 学園内の全ての園・学校が、学園経営の課題・重点について各学校の経営方針へ位置付け	○経営会議で、運営会議、教育課程会議、生徒指導部会、学習指導部会の取組等を把握するとともに方向性を確認することができた。 ○今年度も共同学校事務室室長も経営会議に参加して学園の重点や取組を把握し、児童生徒の学習環境や学園予算の検討など、共同学校事務室の運営に活かすことができた。 ○学園児童・生徒アンケート、教職員アンケートの結果について、運営会議で丁寧に分析し、成果と課題を踏まえた次年度の方向性を考えることができた。経営会議、事務局会議でさらに具現化を図るために改善策を考えていく。 ●運営会議で計画はするが、教頭が行事へ参加できていない状況であるため、教頭が参加できるよう校内で調整する。
就学前から中学校卒業までを見通して一貫した指導、教育課程	(1) 峰山学園の目指す子ども像を見通した指導と教育課程の作成 ア 自己肯定感を育てる授業づくり・生活づくり ・学習指導要領の趣旨を踏まえ、確かな学力の充実・向上のために、「主体的・対話的で深い学び」の実現による授業改善 ・GIGA スクール構想に基づき、授業展開の一部分としてICT利活用の推進及び学園内でのオンライン合同学習の可能性探究 イ 0期～Ⅰ期、Ⅰ期・Ⅱ期(汽水域を含む)・Ⅲ期の指導目標を踏まえた一貫した指導 < (0) Ⅰ～Ⅲ期における『目指す姿』一覧 > ・小6児童の不安感や中1生徒の困り感の再検証…中1ギャップの捉え直し ・目標から遡り、授業を逆向きに設計した単元構想による授業研究 ・京丹後市保幼小中一貫教育モデルカリキュラムの積極的な活用 ・学力充実期間等 ・指導体制の工夫 ・小学校高学年での一部教科担任制 ・中1ふりスタ(正式名称 中学校1年生集中振り返	「(0) Ⅰ～Ⅲ期における『目指す姿』一覧」を踏まえ、担任会で峰山学園の児童生徒に付ける力の検討を行ってきた。児童生徒の実態や課題、目指す子ども像の共有を図った。 (1) 0期、Ⅰ期～Ⅲ期をより意識した指導 ○経営会議で決定したことを各校へ持ち帰り、全教職員に周知することにより、目指す子ども像の実現に向けて実践を積み上げることができた。 (2) 就学前から中学卒業までを見通して一貫した指導の充実、教育課程編成 ○年間10回の経営会議を実施し、10年間を見通した指導について取組を進め、保幼小中一貫教育を推進することができた。また、教育支援部会、こども園参加の1年担任会・教育課程会議の取組で、園児・児童が付けた力を踏まえ各期の「接続」を意識した支援を行うことができた。 ○年4回の全教職員の研修会を研究の節目として位置付け、「一貫した指導」について共有し、実践の成果を明らかにしてきた。学園の教職員が一堂に会して学ぶことで方向性を再確認し、指導にあたることができた。 ○指導の重点である確かな学力の育成を目指し、今年度から重点目標を変更し、「主体的・対話的で深い学び」を視点①②③と具体的に示し、児童生徒が主体的に学びに向かう授業改善の視点を明確にして実践できた。 ○秋季研修会はしんざん小学校1校で開催し、3学級の授業公開、事後研究会を実施した。子どもが主語になる視点を持つ授業を学ぶことができた。事後研究会では、小学校・中学校の教員が交流し、授業観やICTの活用について深められた。 1校の研究を全員で参観・共有できる良さがあるため、次年度以降も1校開催とする。 R6:長岡小 R7: 峰山小 R8: いさなご小 R9: しんざん小 ○●担任会の協議内容として、教科や単元を決めて教材研究ができた。しかし、つけたい力を明確にし、目標からさかのぼって授業設計する必要性の提起が弱かった。指導の重点(1)ア③にあるように「見方・考え方」を働かせながら問題を解決する深い学びのための教材研究としたい。5・6年担任会には中学校教員も参加しているので、Ⅱ期の修了を見通し「中1ギャップ」についてさらに研究していく。 ○家庭学習については「学びに向かう姿勢」「自ら

	り学習) ・小学校4年生ふりスタ ・中学校体験授業(年1回) ・「5年生・6年生の心構え」 ・夢・未来式(小学校4年生)、立志式(中学校2年生) ウ 園小の接続を中心とし教育課程の編成と一貫した指導 ・アプローチカリキュラム、スタートカリキュラムの実践と検証 (今年度は「幼保小架け橋プログラム」の内容を反映したスタートカリキュラム、アプローチカリキュラムになるよう見直す。) (2)不登校・いじめの解消 ア 「5・6年生の心構え」と各校の実態を踏まえて、積極的な生徒指導を行うとともに、生徒指導の4つの視点を生かした学級づくり・授業づくりについて研究 イ 不登校の未然防止に向けて組織的な取組を進める。 ・学園内で気になる子どもの実態交流を行い、幼児期・学童期・思春期の変化とその時期に大切な支援や指導について研究 ・各期で移行支援シートを丁寧に作成・引き継ぐ (移行支援シートは活用できるように毎年見直す。) ・教育支援部会で具体的な事例研究(SC・SSWの専門的な見立てからの学び)	計画的に学ぶ具体的な方法を身に付ける」等の視点を持ち、各校で実践した。系統表・取組方法など、教育課程会議で研究を進められた。 ○教育課程会議で「家庭学習において目指す姿」の系統表が作成され、つけたい力が明確になった。今後、各校で共通理解を図り浸透させていく。 ○「夢・未来式」「立志式」に取り組み、自分の夢や将来について意識向上につながった。第4学年をI期の修了学年ととらえ、自分の成長・将来への展望について各校で取組を進めることができた。その方向性については、年度ごとに経営会議で確認し、各校の実情を踏まえ、学園としてのねらいや趣旨を共通化して、育成すべき力の実現を目指す。 ○1年担任会では、こども園の園長・担任がすべて参加し園小連携を行った。こども園・小学校での指導を交流・理解し、それぞれの指導に活かすことができた。 ○こども園から小学校へ、小学校から中学校への子どもに関わる情報の引継ぎについては、個人情報であることを踏まえ、対応と内容については、毎年確認をして連携する。 アプローチカリキュラム・スタートカリキュラムを見直し、園で育んだ力(10の姿)を小学校の指導に生かせるように研究・実践した。文科省「幼保小架け橋プログラム」に照らし合わせての研究としては弱かったが、1年担任会、教育課程会議で幼小連携について研究し、各校の実践につなげることができた。 ○こども園の参観は2つの園・時間を区切って参観者を調整して実施した。短時間ではあったが、10年間のスタートである0期の実践を参観して、自分から人と関わるための環境設定や、思いや行動を引き出すために、どのようにことば掛けを行っているかを学んだ。参観後の交流は取れないが、感想は紙面でこども園に提供できた。次年度も、夏季研修会の午前中に参観し、午後の全体研修では幼児期の指導について基調提案を行う。 ○各校で積極的な生徒指導の取組として児童会・生徒会活動等だけでなく、日々、肯定的な評価や違いを認める指導を行っており、おおむね落ち着いた状況で生活できている。 ○SNS アンケート実施・結果分析・活用、篠原講師によるSNS講演会等の取組を通して、SNSに係る指導を小・中学校で進めることができた。今年度は、7月に講習会を実施でき、夏休み前の指導に活用できた。 ●SNSにかかる指導については、メディアコントロールが弱い実態を踏まえ、峰山学園PTAとの連携が必要である。 ●「5・6年生の心構え」は、令和3年度に変更して現在の内容になっている。内容を変更した趣旨を共有し、全員で確認をしながら指導を進めていく必要がある。
幼児児童生徒、教職員の交流と協働	(1)「目指す子ども像」の実現 ⇒教職員の協働及び教職員の交流 ア 教職員の合同研修会・実践交流の実施 イ 授業づくりを通じた研修会	○「主体的・対話的で深い学び」を推進するために、学習指導部が作成した「主体的・対話的で深い学び」の実現に向け、こども園、小・中学校で大切にしている視点に沿って各小中学校とともに授業研究に取り組むことができた。 ○全教職員の研修会・各部会を通して、教職員の交流を図ることができた。夏季研修会については、関西国際大学 中尾教授に特別支援につい

	ウ 担任会を通した研修 (2)「集団の中で豊かに人とかわる力」や「コミュニケーション能力」を高めることを目的とした子どもの交流を図る行事等の計画・実施 ア 峰山中学校合唱祭(今年度は6年生の参観なし。取組紹介) イ 部活動体験 ウ 合同授業・学びの交流等 エ 体育祭等(今年度は6年生の参観なし。取組紹介) オ 「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業実践 カ クリーンキャンペーン キ SNS 講演会	ての講演をしていただき、発達障害について、児童生徒の見方や支援の仕方について学んだことから、指導の一貫性につながった。 ○特別支援学級「ふれあい交流会」では、小学校1年生から中学生までが楽しめる内容が工夫され、中学生が中心となって進め交流できた。中学生が良きリーダーとして活躍できた。 ○部活動体験・体験授業・ふれあい交流会等、児童生徒が交流を通して中学校への不安を軽減することができた。部活動体験は次年度も2回計画する。(1回目は全員参加で2回目は自由参加)部活動体験では、相手のことを考えて行動する中学生の姿から「あこがれ」を感じることもできた。 体験授業については、児童は中学校のイメージが身近なものになったり、他校の児童と交流できたりしたことが感想からわかる。児童の主体性を重視し、希望する教科学習に意義を見出せるようにし1回の実施とする。 クリーンキャンペーンは天候により中止としたので、今年度の内容で次年度実施し検証していく。 ●部活動体験、体験授業は8月以降の取組である。1学期から中学校への見通しを持たせるために、1学期に合唱祭の取組の参観等を計画していく。
家庭、地域との連携、情報発信	(1)中学校区の家庭教育の課題(基本的な生活習慣や家庭学習習慣の確立、ほめて育てる家庭教育等)を踏まえた「峰山学園」PTA統一目標の設定 (2)「峰山学園」PTA統一目標に沿った校区全体及び各学校での具体的取組の計画・実施 (3)「峰山学園」学校評価に基づく学校関係者評価委員による評価の実施と学園の目標、教育活動の保護者・地域住民への積極的な情報発信 (4)峰山町民が学園の教育活動に積極的に参加し、支援できる仕組み(学校支援ボランティア 峰山学園学校運営協議会等)の機能化と充実	○学園の課題(基本的な生活習慣や家庭学習習慣の確立、ほめて育てる家庭教育等)と連携した峰山学園PTA統一目標を策定し、具体的に「峰山学園PTAみんなでおはよう運動及び交通安全指導」を実施できた。今年度から、こども園でもおはよう運動の取組に参加してもらう等、新しい動きが出てきた。 ●小中一貫校PTAとの連携も強化し、家庭学習の習慣化、主体的に取り組む力の育成を図る。 ○保幼小中一貫教育学園コーディネーターの役割を明確にし、学園だより・ホームページ・リーフレット等での発信が定着しており、学園の教育活動を保護者・地域に丁寧に広報することができた。 ○峰山学園地域コーディネーターを窓口とし、学校支援ボランティア等を活用し、話を聞いたり体験したりする機会を設けて学べた。地域の方が学校教育活動に積極的に参加できる取組を進められた。 ○学校運営協議会での話し合いが「地域とともにある学校」をめざしていく上で、新たな気づきや視点を得られる場となっている。

4 今年度の成果と課題 改善方策

成果と課題	改善方策
《成果》 1 児童生徒、教職員アンケート結果より ・峰山学園の保幼小中一貫教育の成果を積み重ね児童生徒の課題解消や軽減等が進んでいる。 2 峰山学園の教職員のアンケートから、確実に保幼小中一貫教育で目指している一貫した指導が浸透してきていることが窺える。今年度の重点の「確かな学力」の「主体的・対話的で深	○担任会の取組の継続・発展 担任会…今年度の体制を維持し次の内容に取り組む。 ①学年の学習内容の復習のための課題づくり ②算数の単元総括テストに特化することを改善し、教材研究を他教科にも広げ指導力の向上を図る。 ③0期～Ⅲ期の指導目標を踏まえた指導の充実

い学び」で目指す姿を示して実践できた。 3 学園経営及び進行管理について ・経営会議が運営会議、教育課程会議及び生徒指導部、学習指導部などを統括しながら進められた。 ・経営会議、運営会議、教育課程会議、学習指導部会、すべての会議において「何のための取組か」「子どもにどんな力を育むのか」を問い直し、行事や取組を見つめ直してきた。同じ取組でも、その視点で成果課題をとらえてきた。この歩みが、10年の節目を迎え、次年度の方向性を検討する際に活かされている。 ・担任会が授業づくりの実践推進を担うよう学習指導部と連携するとともに、中学校教員・こども園教員も参加し、機能的な組織体制にした。その結果、授業改善や学力向上に繋がる実践を取り組むことが出来た。 4 10年間を見通した一貫した取組について ・「目標と指導と評価の一体化」を具体化するための実践を担任会に位置付け、昨年までの算数科単元総括テストの作成の手法を活かし、他教科の教材研究に波及することができた。 ・「主体的・対話的で深い学び」を実現するために大切にしている視点に沿って、授業研究会等での実践交流を通して、授業改善を図ることができた。 ・家庭学習については、指導の系統、目標の検証を行い、家庭学習の目的、内容や方法、授業とのつながりを検討し、目指す姿を示した。 ・児童生徒に基礎基本の力を身に付けさせるため、小4ふりスタ・6年生春季宿題の共通化・中1ふりスタ等の取組を継続・充実させることができた。 ・各校で積極的な生徒指導の取組として児童会・生徒会活動等だけでなく、幼児児童生徒が安心できる「居場所」づくりを進め、お互いを認める心の醸成を図った。また、「夢・未来式」「立志式」にも取り組み、成長を実感し自分の将来を展望する意識を向上させることができた。 ・「主体的・対話的で深い学び」を実現するためにこども園・小学校・中学校で大切にしている視点を見直し、各校で実態に応じた授業づくりに関わる研究を進めた。秋季研修会で小学校1校の授業研究会を行った。具体的な児童生徒の姿から、児童が主体となる授業の在り方やICT活用について学び合うことができた。協議を通して目指したい児童生徒の姿や授業づくりで大切にしたい視点を明確化したり共有化させたりすることができた。 ・年度末研修会において、中学校の授業研究会を行い、事後研の中で授業について、ケーススタディで学ぶとともに、今後10年を見通し、どんな力を育むか意見を出し合った。それぞれの学園に対しての参画意識が高められた。 ・アプローチカリキュラム・スタートカリキュラムを見直し、特にスタートカリキュラムは時間をかけて小学校の学習・生活に適応できるよう修正した。 ・学園評価アンケートの分析は、運営会議が中心となって担うことで、自校・学園の課題把握ができ、教頭として改善方策を検討する等、広い視野につながった。 ・保幼小中一貫教育コーディネーターの役割を明確にし、学園だより・ホームページ・リー	を図る。 ④5・6年生の担任会には中学校も参加しているため、中学校の実態から「中1ギャップ」解消に向けた指導を検討する。 ○小4（Ⅰ期とⅡ期の節目）に焦点化して研究推進してきたが、今後それぞれの節をより確かなものにするために研究・実践の幅を広げていく。6・3制のもとで定着している教育課程の意識や行事・取組等を検討し小中一貫した教育課程の無理のない移行を図る。 ○こども園から小学校への連続性、効果的な接続の在り方について、より一層重点的に取り組むため、「幼保小架け橋プログラム」を反映したアプローチカリキュラム、スタートカリキュラムとなるように見直す。 ○教員の研修会 授業づくりを中心とした協議を行い、小中学校で指導力の向上を図る。こども園の参観を行い、0期のスタートにおいて大切にしていることを理解し、一貫性についての理解をさらに進める。 ○令和5年度の目指す子ども像・教育目標・目指す教師像について、保幼小中一貫教育推進の手引きをもとに検討を行う。 ○ 保幼小中一貫教育の具体的な内容 1 児童生徒の実態や課題、目指す子ども像や目標方針の共有に向けて (1) 学園内の全ての学校が、目指す子ども像・教育目標を共通化 (2) 学園内の全ての学校が、学園経営方針を各学校の経営方針へ位置付け (3) 学園内の全ての学校が、学園経営の課題・重点について各学校の経営方針へ位置付け 2 就学前から中学校卒業までを見通して一貫した指導、教育課程 (1) 峰山学園の目指す子ども像を見通した指導と教育課程の作成 - ア 自分の居場所を感じる授業づくり・生活づくり 不登校児童生徒が増加している実態を踏まえ、心理的安全性を高める学級づくりをめざす。 - イ 汽水域を中心とした教育課程の編成と、一貫した指導 ・小6児童の不安感や中1生徒の困り感の再検証 峰中（中1）ギャップの捉え直し ・京丹後市保幼小中一貫教育モデルカリキュラムの積極的な活用 ・家庭学習と授業づくりの関連 家庭学習は授業で習得した学びを自分で実践する場と捉え、日常の主体的・対話的で深い学びをめざした授業づくりを深める。 ・小学校高学年での一部教科担任制(外国語科) ・中1生集中振り返り学習 ・中学校体験授業（年1回） ・「夢・未来式」（小4）、立志式（中2） - ウ 0期Ⅰ期～Ⅲ期の目指す姿を達成できる指導について協議、実践していく。
--	--

フレットの作成を行い、学園の教育活動を保護者・地域に丁寧に広報することができた。 ・不登校の未然防止に向けて、学園内で気になる子どもの情報交流をすることで、幼児期・学童期の過去の様子や家庭の情報などを得ることができ支援や指導に繋がった。 《課題》 1 令和6年度学園経営に向けて (1) 組織体制及び運営上の改善 ・10年間を見通した連携・一貫した指導となるよう分掌や分掌の任務の改善を進める。特に、0期～Ⅲ期に目指す児童生徒像を目指した指導をさらに進める。 (2) 令和6年度に向けての重点的な課題・取組の方向 【教育目標・目指す子ども像・学園経営方針】 ・令和5年度までの10年間の成果を大切にしつつ、課題を焦点化して改善を進める。今後10年を見据え、新しい教育目標を設定し、PDCAサイクルで、学園経営を行っていく。 【学園指導の重点】 ・授業研究については、学習指導部会が中心となって「主体的・対話的で深い学び」を実現するために大切にしている視点を基に行う。小中全教職員が授業研究に関わるためにも、各校で視点を明確にした実践を積み上げる。こども園においても、遊びの中で育てていく。 ・夏季研修については、教職員の指導力量を高めていく取組の大きな節としていく。特に、保幼小中連携に焦点を当てた取組とするため、こども園の参観・幼児教育についての基調提案を行う。 ・タブレットの活用が幅広く図られ「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指して授業改善が行われた。今後はさらなる効果的な活用を推進する。 ・「確かな学力の育成」「コミュニケーション能力の育成」では、人とつながる楽しさを味わわせ、ことばで伝え合う力を育む実践を進める。 ・不登校の解消に向けて、今年度の取組を継続するとともに、関係機関との連携を更に深め、個に応じた対応から社会的自立につながる指導を展開する。 ・生徒指導部会では、各校で取り組まれている積極的な生徒指導の取組を交流し、コミュニケーション能力を育成し、豊かな人間関係の構築を目指す。同時に、指導者として各学年・発達段階に応じてそのためにどのような手立てが必要か検討していく。 ・支援を要する児童生徒に対して、指導や支援の方法をより一層工夫・連携していく必要がある。 ・学園評価について、方針に基づいて早い段階から、評価の計画・見直しを持ち、学園学校運営協議会での評価により指導の改善を図る。 ・担任会においては、算数の単元総括テストに特化することを改善し、教材研究と交流を行う。特に5・6年担任会には中学校からも参加しているため「中1ギャップ」について実態交流し、解消できるよう検討していく。 【保幼小中一貫教育の具体的な内容】 ・0期・Ⅰ期～Ⅲ期の実践を明確にし、小中一貫教育の姿を確認する。	・「小中学校で共通確認する指導の視点」について見直しを行う。 ・「5・6年生の心構え」については、児童生徒の実態を踏まえ、検討を継続していく。 エ 園小接続を中心とした教育課程の編成と一貫した指導 ・アプローチカリキュラム・スタートカリキュラムの実践と検証 ・こども園で身につけた力を発揮する接続 オ 府「学びのパスポート」の質問項目と学園評価アンケートの活用 ・「学びのパスポート」は5月実施、学園のアンケートは12月実施であることから、学園のアンケートの項目を再考し、活用方法についても検討する。 3 子ども、教職員の交流と協働 (1) 「目指す子ども像」の実現・「目指す教師像」の意識化⇒教職員の協働及び教職員の交流 ア 教職員の合同研修会・実践交流の実施 イ 授業を通じた研修会 ウ 担任会を通じた研修 (2) 「集団の中で豊かに人と関わる力」や「コミュニケーション能力」を高めることを目的とした子どもの交流を図る行事等の計画・実施 ア 峰山中学校合唱祭練習参観 イ 部活動体験（2回） ウ 「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業実践 エ 学校や地域の一員として主体的に参加する取組 オ クリーンキャンペーン カ SNS講演会（峰山学園主催、運営：運営会議・生徒指導部） 4 家庭、地域社会への積極的な情報発信 (1) 峰山学園学校運営協議会による評価の実施と学園の目標、教育活動の保護者・地域住民への積極的な情報発信 (2) 中学校区家庭教育の課題（基本的な生活習慣や家庭学習習慣の確立、ほめて育てる家庭教育等）を踏まえた「峰山学園」PTA統一目標の設定 (3) 「峰山学園」PTA統一目標に沿った校区全体及び各学校での具体的取組の計画・実施 (4) 学園の教育活動への支援体制（学校支援ボランティア等）の機能化と充実 (5) SNS講演会（保護者向け）については、小中一貫校PTAの取組として位置付け、各校PTAの計画等にも組み入れる。地域にも発信し地域と連携した取組に広げていく。
--	---

令和5年度 大宮学園保幼小中一貫教育報告書

1 「目指す子ども像」、教育目標

- | | |
|-------------|--|
| (1) 教育目標 | 自他を尊重し、自ら学ぶ 子どもの育成 |
| (2) 目指す子ども像 | ○意欲的に学び、チャレンジする子ども（知）
○自他を大切にし、思いやりのある子ども（徳）
○心身を鍛え、活動的な子ども（体） |

2 保幼小中一貫教育として解決を目指す重点課題、取組の柱とする内容

- ※大宮学園を支えるのは「人権教育」そして「ことばの力」の育成
- (1) 確かな学力の育成：「授業づくりの視点9」「言語活用カリキュラム」の活用
 - ①基礎学力の向上を目指した授業改善（授業づくり）
 - ②小中で連携した「主体的・対話的で深い学び」の実現による授業改善（授業づくり）
 - ・「主体的・対話的で深い学び」を通して、「ことばの力」「思いやる心」「つながる力」を育成する授業研究を充実させる。
 - ・授業研究会・保幼参観の開催 6月：(大宮第一小) 8月：(大宮こども園) 11月：(大宮中)
 - ③「ことばの力」の育成（言語活動の充実）を目指した授業改善（授業づくり）
 - ・言語活用カリキュラムの積極的な活用を年間通じて進める。（学力充実部会、担任会）
 - ④保幼小の接続のためのアプローチプログラム・小1スタートカリキュラムの自学園化
 - (2) 人権意識の育成：「人権教育カリキュラム」の活用
 - ①人権教育の理念に基づく「自他を大切にする心」を育成するための教育活動の充実
 - ・全ての教育活動で「ことばの力」「思いやる心」「つながる力」の育成し、そのための授業づくりの推進（各教科指導で3つの力を育成する指導を充実させる。）
 - ・特に、授業や特別活動等を通じて、「話し合い活動」の充実を図る。
 - ②人権意識を育成するための人権学習の充実
 - (3) ICTの積極的活用も含めた連携・体験活動の充実
 - ①ICTを活用した効率的・効果的な連携教育活動・体験活動の充実
 - ②体験活動を通して「ことばの力」「思いやる心」「つながる力」の育成
 - ③効率的・効果的な共通した学校のきまり（学習・生徒指導・家庭連携）
 - ④丹後学・キャリア教育の視点を踏まえた夢・未来式（小4・中3）の実施
 - (4) 目指す子ども像の実現を見通した教職員の交流と協働
 - ①学園の教職員が確実に出会い、話し合う機会の確保
 - ②担任会の充実
 - (5) 家庭、地域社会への啓発、情報発信
 - ①ホームページ、たより等を活用した情報発信
 - ②大宮学園の家庭教育の課題を踏まえた「大宮学園」PTA・保護者会の協働
 - ③家庭教育委員会による「家庭のやくそく」の継続と啓発、親のための応援塾の継続
 - ④大宮学園学校運営協議会での学園教育環境づくりの推進
 - ⑤「大宮学園」学校評価の実施と保護者・地域住民への啓発

3 保幼小中一貫教育の具体的な内容と評価

項目	内容	評価 (実践の過程・幼児児童生徒の姿・教職員の見方等)
幼児児童生徒の実態や課題、目指す子ども像や目標、方針等の共有方策	(1) 学園内の全ての学校園所が、教育目標、目指す子ども像を共通化する。 (2) 学園内の全ての学校園所が、学園経営計画を各校の経営計画へ位置づける。 (3) 学園内の全ての学校園所が、学園	(1) 学園教育目標及び目指す子ども像に向けて、学園内の2園所、3校での共通化に取り組んだ。 (2) 学園経営計画を各園所、学校の経営計画に位置づけ、経営の充実に取り組んだ。 (3) 学園教育課題、各会議・部会の推進状況を把握し、学園経営を統括し、一貫した教育指導・活動の充実に努めた。 (4) 最大の課題となる不登校について、共通認識と

	の子どもの実態・課題、学園重点方針等を各校の経営計画へ位置づける。 (4) 学園保幼小中一貫教育推進部会による実践研究成果を各校に波及させる。	連携の在り方について協議を重ね、指導支援に生かした。特に、教育支援部会で事例研究を通して不登校への理解と支援の在り方について研修を積み重ねることができた。 (5) 保幼小中移行支援シートを活用した児童生徒の支援の引き継ぎを丁寧に行うとともに、SCやSSWの活用を進めた。
就学前から中学校卒業までを見通して一貫した指導、教育課程	(1) 大宮学園教育課程の編成 ①汽水域指導プログラムの推進等 ・小中学校での乗り入れ授業の計画・実施（加配の活用） ・小学校5・6年での一部教科担任制 ・中学校授業体験（年2回予定～実技教科と五教科） ②Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ期の学習への円滑な接続 ・アプローチプログラム、小1スタートカリキュラム（5歳児担任・小1年担任） ・夢・未来式の実施（小4・中3） ・小4・中1ふりスタ ・中学校定期テスト模擬体験 ・春季休業中の共通課題（小6） ③家庭学習の充実 ・家庭学習の手引き ・家庭学習がんばり週（旬）間 (2) 学力充実向上に関する取組の進行管理 ①学力調査と分析 ②学力向上のための授業充実・授業力向上 (3) 生徒指導・教育相談に係る情報の共有と連携 ①小学校5・6年の心得、共通の生活の決まり ②情報モラル教室 ③保幼小中移行支援シート (4) モデルカリキュラムに係る推進 ①モデルカリキュラムの研修 ②モデルカリキュラムの年間指導計画への位置づけ	(1) 大宮学園教育課程の編成について ①汽水域指導プログラムの推進等について ・小中連携加配の乗り入れ授業（理科）と英語専科教員による外国語の授業を実施し、児童の実態把握や指導に効果があった。 ・人権教育加配が小学校での学習補助にあたることで、児童支援や児童の状況把握に効果があった。 ・体験入学や授業体験の実施により、入学への楽しみや期待につなげることができた。 ②Ⅰ期、Ⅱ期、Ⅲ期の学習への円滑な接続について ・保育園と小学校との連携のもと、小1プロブレムの解消に向けての取組を行うことができた。今後も保幼小接続のためのアプローチプログラムと小1スタートカリキュラムの確実な実施に向けた取組を意識する。 ・小4と中3で、夢・未来式に取り組んだ。 ・小6対象中学校定期テスト模擬体験を実施し、中学入学後のテストに係る不安解消に向けて取り組んだ。 ③家庭学習の充実について ・家庭学習の手引き、家庭学習がんばり週（旬）間により、家庭学習習慣の向上に取り組んだ。 ④人権意識の育成、「人権教育カリキュラム」活用について ・人権・生指・特活部会の提起により、大宮学園独自の「人権教育カリキュラム」の整理や周知を図るとともに、各校で進められている「人権月間」等とカリキュラムを連動させ、人権学習をはじめ様々な取組を進めることができた。 ・学びの基盤である学級の心理的安全性を高める上でも、人権教育の視点や「話し合い活動」を今後も大切にする。 (2) 学力向上に関する取組の進行管理について ①学力充実部で学力分析を行うとともに、視点を明らかにした大宮学園授業研究会を行い、授業づくりについての提起等、さらに具体化することができた。 ②教科指導の連携・接続を目指し、担任会、小中連携による指導研究に取り組んだ。担任会を通じて、「言語活用カリキュラム」を周知し「ことばの力」育成の重要性を確認できた。今後も普段の授業に位置づけ継続して指導する。 ③学園教育課程会議・学力充実部が中心となり、「主体的・対話的で深い学び」の実現による授業改善（授業づくり）、中でも、「聞くこと」「話し合うこと」等、小中学校の教員で交流した。本年度は大宮第一小学校、大宮中学校と年2回の授業研究会を実施し、「授業づくりの視点9」

		に基づく教員の活発な協議・協働が進められた。学園教育課程会議・学力充実部の丁寧な計画・運営が授業研究会の充実につながった。 ④生徒指導提要改訂に基づき、「授業づくりの視点8」に「安心安全な居場所づくり」の視点を加え「授業づくりの視点9」に改編しより求められる授業像を共有することができた。 (3) 生徒指導・教育相談の一貫・接続 ①学園として小中各校、一貫校PTAで情報モラル学習を実施し、SNSの安全な利用について学ぶことができた。 ②事例研究、保幼小中移行支援シート等の充実に取り組めた。 (4) モデルカリキュラムに係る推進について ①学園としてモデルカリキュラムをもとにした授業の実施を行った。 ②今後もモデルカリキュラムに係る研究を推進していく必要がある。
幼児児童生徒、教職員の交流と協働	(1) 連携・体験活動 ①人権意見発表会（学校毎） ②合唱祭・にこにこ合唱団の取組 ③体育祭（招待状） ④部活動体験（11月予定） ⑤体験授業（年2回〈6・11月〉予定） ⑥花いっぱい運動（学校毎） (2) 幼児・児童・生徒交流活動 ①児童会・生徒会交流活動 ②挨拶運動「ハイタッチモーニング」・ニコニコの日の取組 ③生徒会アドバイス ④合同避難訓練（大宮こども園・大宮中） (3) 教職員の交流と協働 ①担任会（小小担任会、小1担任と5歳児担任、小6担任と中1担任） ②授業研究に向けた取組の推進 ③合同研修会・実践交流会の実施	(1) 連携、体験活動、幼児・児童・生徒交流について ①園所、保幼小、小小、小中、園所中それぞれの連携事業が計画に沿って進められた。この間、コロナ感染防止による連携・体験活動の精選や変更を行わざるをえなかったが、体育祭活動での交流は園所と中学校で交流や挨拶運動（ハイタッチモーニング）、部活動体験等、実施できた。今後制限のない教職員・幼児児童生徒の連携事業を進められるからこそ、効果的で必然性のある連携・交流に整理し、より学園としての一体感や将来の自立につながる事業の推進を図る。 ②各小中学校でICT活用が進められている。小中学校それぞれでの活用について今後も交流し、年々変化する情報モラル教育の充実とともに児童生徒がスムーズにスキルアップできるようにしていく必要がある。 ③オンラインによる会議や活動についても環境を整え、効果的な活用を図る。 (2) 教職員の交流と協働について ①学園の教職員が確実に出会い、話し合う機会の確保を大切に、年3回の担任会をはじめ、本年度は互助組合事業や懇親会等教職員の交流と協働が進んだ。各会議や担任会のほか、大宮子ども園での保育参観、大宮第一小学校、大宮中学校での授業研究会とその後の分散会、さらに、夏季全体研修会では大宮子ども園の参観と園長による講義により、園児の姿をとおして「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」等について学び合うことができた。 ②教職員アンケートから大宮学園の教職員の信頼・協働について肯定的な評価が高く、今後も効果的計画的な研修・取組を工夫・継続する。 ③3部会での現状分析、実践交流に取り組んだ。 ④事務部会では共同学校事務室として協働が進められ、大きな成果があった。 ④担任会を年間3回計画し、ミッションをもって取り組んだ。次年度以降も実のある取組にすることが必要である。 ⑤保幼小中教員の交流は一定進んだが、勤務の関係で保育所・こども園の先生方との交流が難しい。

家庭、地域との連携、情報発信	(1) 家庭教育課題を踏まえた「大宮学園」PTA統一目標の策定 (2) 大宮学園PTA家庭教育委員会による「家庭のやくそく」の取組 (3) 大宮学園PTA統一目標に沿った校区全体及び各学校での具体的取組の計画と実施 (4) 大宮学園学校運営協議会と連動した具体的取組（見守りとセットのあいさつの取組） (5) 「大宮学園」学園評価の実施と家庭及び地域への啓発	(1) 大宮学園PTAの目標策定とともに、配布済の「令和版家庭の心得」を啓蒙することができた。 (2) 大宮学園PTA事業計画に基づき、「地域ではよう挨拶運動」や「情報モラル学習会」等、計画的に実施することができた。今後も学園PTAの取組に保育所・こども園保護者会をお誘いすることで連携を進めていく。 (3) 大宮学園学校運営協議会との協働を進め、「見守りとセットのあいさつの取組」を広く大宮地域に波及できるよう取組を進めた。特にコーディネーターが中心となり丁寧な連携が進められ、会員の皆様の思いや期待を運営に生かすことができた。地域との関係づくり、各取組への協働体制を築くことができています。 (4) 学園だより、ホームページの更新等で、各園所小中学校の取組や幼児児童生徒の姿が広く発信できた。 (5) 学園評価を実施し、今後に向けた評価をいただいた。
----------------	--	--

4 今年度の成果と課題 改善方策

成果と課題	改善方策
【成果】 (1) 学園教育課題、各会議・部会の推進状況を把握し、学園経営の統括、一貫した教育指導・活動を充実させることができた。また、年度当初、大宮学園教育推進計画を策定し、また各会議のミッションを明確にすることができ、限りある部会ですることが明確になった。 (2) 経営会議の方針のもと企画運営会議が運営し、教育課程会議等各会議で一致して進めるシステムが機能した。 (3) すべての教育活動で「ことばの力」「思いやる力」「つながる力」の育成に向けて取組を推進することができた。 (4) 視点を明確にした授業研究会や公開を通して、幼児から小中学校への接続やその意義、授業研究の一貫性等大きな学びがあった。 (5) 保幼小中の不登校状況である園児や児童生徒、配慮や支援の必要な子どもの状況を共通認識し、支援の在り方を探ることができた。 (6) 不登校及び不登校傾向児童生徒に絞って事例研究を進めることで不登校に陥る背景の多様さと小中学校で配慮すべきポイントについて共通理解を進めることができた。 (7) 学園の経営会議（校長）、運営会議（教頭）の両方で担当指導主事から具体的な資料を基に不登校の状況について確認する機会が設けられることで、教育支援部を中心として事例研究を通して不登校児童生徒の理解と支援につ	◎令和6年度は、大宮学園保幼小中一貫教育10年を迎え、これまでの成果・課題の整理とともに組織や各取組の検証を進め、次の10年に向けた学園の方向性を構想する1年とする。 【課題】に対して (1) 学園評価を受け、保幼小中一貫教育の3つの目的の共通理解を丁寧に行い、その共通理解に基づき、大宮学園保幼小中一貫教育の目標、教育指導の重点、教育指導・活動の充実を図る。 ①市の教育課題改善のため、保幼小中一貫教育の目的についての共通理解を当初全体会で確実に行う。 ②学びのパスポートや各種質問紙等から大宮学園の幼児児童生徒の実態や共通課題を整理する。 ③学びの基盤につながる心理的安全性や居場所のある教室、自他を尊重する心の育成を目指した「話し合い活動」の充実と園所小中学校における連続性・系統性のある人権意識向上を継続する。 ④その具現化に向け焦点化した大宮学園保幼小中一貫教育の重点策定を行う。 ア 確かな学力の育成に向けて、改定した「言語活用カリキュラム」のさらなる活用・定着を図る。 イ 人権意識の育成に向けて、「人権教育カリキュラム」を実施する。また、実施に向けた協議を大切にする。 ウ ICTの積極的活用も含めた連携・体験活動を充実させる。 エ 目指す子ども像の実現を見通した教職員の交流と協働を進める。 (2) 大宮学園保幼小中一貫教育の目標・教育指導の重点を踏まえ、一貫した教育指導・教育活動を一層充実させるための学園経営の充実を図る。 ①教職員の保幼小中一貫教育の意識のさらなる向上

いて研究を深めることができた。 (8) 校種間連携の必要性への意識が高まり、大宮中学校の小学校在籍時の欠席状況の情報提供（未然防止の観点）及び不登校傾向となった生徒に絞った小学校在籍時の学習の状況や欠席状況の情報提供（早期対応の観点）が進んだ。 (9) 大宮学園学校運営協議会では、「あいさつ」を中心に実行ある取組が進められた。（見守りとセットのあいさつの取組） (10) 小中連携事業の他、小小連携、幼保連携も可能なことを実施でき、継続した取組にできた。 【課題】 (1) 学園評価を受け、保幼小中一貫教育の3つの目的の共通理解を丁寧に行い、その共通理解に基づき、大宮学園保幼小中一貫教育の目標、教育指導の重点、教育指導・活動の充実を図る。 (2) 大宮学園保幼小中一貫教育の目標・教育指導の重点を踏まえ、一貫した教育指導・教育活動を一層充実させるための学園経営の充実を図る。 (3) 各校で不登校への対応を進めているが、結果として小中学校で学校に来にくくなる子が毎年出ている。不登校・特別支援教育・就学指導に係る学園課題に対して、さらに実践研究を積み重ねる。 (4) 教育支援が必要な幼児・児童生徒や、特別支援及び教育相談における校種間連携の仕組みを整え、校種間の円滑な接続を推進する。 (5) 大宮学園学校運営協議会（学園コミュニティ・スクール）との協働をさらに進め、より地域とともにある学園（学校）を目指すとともに、地域に根差していくための工夫を考える。 (6) 各会議・部会等、継続して開催できるものは幼児児童生徒の継続した指導について協議、取組でき、大きな成果につながっているが、担任会等回数が限られており、指導の継続性も含めて難しく検討が必要である。	と、学園としての指導の一貫性への更なるステップアップを図る。特に保幼からの接続について継続して意識を高める取組を進める。（他市町からの転入者や新規採用者等の増加に伴い丁寧な説明を行う必要がある。） ②各校持ち回りに授業研究会を開催し、本学園の重点内容を進めることで、「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指していく。授業研究会を通して、普段の授業で大切にすることを学園全体で確認し、幼児児童生徒の変容につながる継続した指導を行う。 ③これまでの「ことばの力の育成」「人権教育の推進」の視点を踏まえ、「探究的な学び」や「ICTの効果的な活用」「自己調整力の向上」等、これからの教育課題への連動を図る。 ④年3回の全体会、夏季研修会や授業研究会等、今後も持続可能な研修・交流を計画する。 ⑤担任会・教科部会等を効果的・効率的に進める。 ⑥幼児児童生徒の交流や各園所小中学校の行事・取組等について、学園としての実施時期や内容等の検討・調整を丁寧に進める。 (3) 各校で不登校への対応を進めているが、結果として小中学校で学校に来にくくなる子が毎年出ている。不登校・特別支援教育・就学指導に係る学園課題に対して、さらに実践研究を積み重ねる。 ①児童生徒の円滑な接続のための個別記録の活用及び不登校・不登校傾向児童生徒に特化した事例研究を継続して行う。 ②教育相談、不登校、家庭支援に係る情報交流と指導の在り方について継続して研究を進める。 (4) 教育支援が必要な幼児・児童生徒や、特別支援及び教育相談における校種間連携の仕組みを整え、校種間の円滑な接続を推進する。 ①保幼小連携事業・保幼中連携事業・小小連携事業・小中連携事業を通じた担任会の充実を図る。 ②幼児の具体的な姿から「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」を教職員で共有し、保幼小の丁寧な接続を継続する。 (5) 大宮学園学校運営協議会（学園コミュニティ・スクール）との協働をさらに進め、より地域とともにある学園（学校）を目指すとともに、地域に根差していくための工夫を考える。 ①大宮学園学校運営協議会の来年度の方向性を踏まえ、来年度当初の協議会で具体的な提案を行い、活動を通してより地域とともにある学園（学校）を目指す。 ②PTA・保護者会の事業の一体化について今後も無理なく進める。 (6) 各会議・部会等、継続して開催できるものは幼児児童生徒の継続した指導について協議、取組でき、大きな成果につながっているが、担任会等回数が限られており、指導の継続性も含めて難しく検討が必要である。
--	--

令和5年度 網野学園保幼小中一貫教育報告書

1 「目指す子ども像」、教育目標

【目指す子ども像】	
あ：明るく元気に進んで学ぶ子	【知】意欲的に学習に取り組む子ども
み：みんななかよく支え合う子	【徳】規範意識をもち、仲間と支え合う子ども
の：のびのび生き生きやりぬく子	【体】粘り強く心身を鍛え、やり抜く子ども
【教育目標】	
将来に夢と希望をもち、郷土を愛し、知・徳・体の能力を伸ばす子どもの育成を図る教育の推進	

2 保幼小中一貫教育として解決を目指す重点課題、取組の柱とする内容

(1) 確かな学力の育成	
ア 主体的に学ぶ力とコミュニケーション能力の育成	
(ア) 生徒指導の4機能を生かした「わかる」「できる」授業の実現	
(イ) 指導と評価の充実（指導と評価の一体化）	
(ウ) ICTの活用による授業改善	
(エ) 「網野学園で育成したい非認知能力」の検討・改訂	
イ 補充学習の充実	
(イ) 基礎基本を定着させるための個別補充学習	
ウ 家庭学習の充実	
(ア) 授業とつながる自主的な家庭学習の実現	
(イ) 家庭と連携した学習習慣の定着の取組	
(ウ) 家庭学習の指標づくり	
(2) 規範意識の醸成	
ア 学習規律の確立	
イ 生活習慣の確立	
(3) 豊かな人間性の育成	
ア 自尊感情の醸成	
イ コミュニケーション能力の育成	
ウ 将来を展望する力の育成	

3 保幼小中一貫教育の具体的な内容と評価

項目	内容	評価 (実践の過程・幼児児童生徒の姿・教職員の見方等)
幼児児童生徒の実態や課題、目指す子ども像や目標、方針等の共有方策	ア 学園内の全ての学校園所が、教育目標、目指す子ども像の共通化 イ 学園内の全ての学校園所が、学園経営方針・目指す子ども像の経営方針へ位置付け ウ 学園内の全ての学校園所が、第2期「未来を拓く学校づくり」推進事業の各学校・園所の経営方針へ位置づけ	○随時事務局会議を行い、経営会議の進行管理を行うことができた。 ○学園経営の基本方針に基づいた「重点的な取り組み内容」「行動連携」を具現化するために、経営会議で確認したことを、各会議・部会等で年間計画に沿って取り組み、目指す子ども像の実現に向けて実践を積み上げることができた。 ○全体研修会や授業研究会を計画通りに行い、第2期「未来を拓く学校づくり」推進事業の研究実践を各会議や部会と連携し組織的に進めることができた。 ○学園評価アンケートを実施・分析を行い、次年度の計画の改善に活かすことができた。 ○「網野学園保幼小中一貫教育だより」「網野学園保幼小中一貫教職員だより」「網野学園学校運営協議会だより」や学力充実部のたより等を通して、各学校園所・各部会・学校運営協議会の取組を共有することができた。
就学前から中学校卒業までを見通して一貫した指導、教育課程	ア 不登校の解消に向けて ・第2期「未来を拓く学校づくり」推進事業と連動した取組 ・全ての子どもにとって居場所となる魅力ある学校づくり	○第2期「未来を拓く学校づくり」推進事業に取り組む中で、「非認知能力」について研究を進め、「網野学園で育成したい非認知能力（指標）」に基づいて、ギミックブラッシュアップシートを活用した授業や保育・教育を学園、各校園所で進めることができた。 ○研究推進に係り、京都教育大学 田爪教授から指

	・早期発見、早期対応、適切な対応 ・社会的自立を目指した取組 ・組織的な取組（ICT の活用、関係機関との連携、保護者の心の安定） イ 0 期、Ⅰ期、Ⅱ期、Ⅲ期の指導目標を踏まえた系統的な指導 ・「網野学園で育成したい非認知能力」の検討・改訂 ・学力向上システムプログラムの見直しと活用 ・学力充実月間 ・家庭学習の手引きの活用・家庭学習がんばり週間の取組 ・6 年生中学校授業体験と 6 年生部活動体験 ・6 年生単元総括テスト ・6 年生学年末テスト・6 年生春季休業中の課題の見直し・実施 ・中 1 学習補習・小 4 ふりかえり学習 ・京丹後市保幼小中一貫教育モデルカリキュラムの積極的な活用 イ 落ち着いた環境をつくるための規範意識の醸成 ・学園で目指す「これだけは！」の取組 ・生徒指導・教育相談に係る情報共有 ・乗り入れ授業、小小連携授業、小中連携授業 ・アプローチプログラム・スタートカリキュラムの実践・検証 ・長期モデルプランアプローチプログラム・スタートカリキュラムの実践・検証 ウ 思いやりをもち仲間と共に生きる人間関係づくり ・生徒指導の 4 機能を生かした教育活動 ・アルミ缶回収・ボランティア活動 ・あいさつ運動 ・Ⅰ期・Ⅲ期の区切りとなる取組（1/2 成人式、立志式）	導助言をお世話になった。田爪教授からは、「学園におけるギミックの取組は、教育・保育実践の中で幼児・児童・生徒の認知能力及び非認知能力、学びに向かう力をどのように見取り、その能力を伸ばそうとするのが具現化されたものであった。実践の成果を評価する上でも有効である。学びに関わる認知能力や非認知能力を継続的、系統的に捉える機会となった。ギミックという共通する言葉で考えるということは、学園全体の組織的な取組として有効である。」と評価していただいた。 ○小学校から中学校への円滑な接続を目指し、「6 年生中学校部活動体験」「6 年生中学校授業体験」を行った。今年度も部活動体験を 6 月に実施し、中学校 3 年生が中心となった活動を体験することができたことで、部活動への不安解消と期待、部活動選択の一助に繋げることができた。また、中学校授業体験はもとより、日々の小中連携加配教員(算数科)や教科担任制(英語科)教員による授業を小学 5・6 年対象に行ったことで、不安を軽減し中学校への憧れを抱くと同時に学習に向かう力の高まりにつながった。 ○篠原嘉一氏（NIT 情報技術推進ネットワーク）を講師として今年度もゲーム・ネット講座を小学生と中学生を対象に行うことができた。今年度は、小学 4 年生とともに小学 2 年生も参加対象学年に加えて網野北小学校で実施した。また、中学生は、自分のスマホを持参可とし、自分を守るため、他の人を傷つけないための SNS の扱いについて学びを今年度も深めることができた。 ○「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を保幼小連携部で共有・取組を進めた。また、網野学園各園所の実態に合わせてカリキュラムの編成を見直すことができた。 ○今年度、保幼小連携部を中心に令和 6 年度版長期モデルプランを作成することができた。 ○小中合同アルミ缶回収ボランティアに取り組むことで、子どもたちは網野学園の一員であることを意識することができた。また、中学生が小学校に出向き一緒に活動することで、児童にとっては、中学生が自信をもって思いを表現し伝える姿に憧れをもち、目指す姿を学ぶ機会になった。中学生にとっては、小学生が一生懸命に取り組む姿を見て、アルミ缶回収に取り組む意義を考える機会となった。 ○不登校傾向及び不登校児童生徒について経営会議や運営会議で状況を共有するとともに、教育相談部会を中心に事例研究会を行い、具体的な対応について協議することができた。また、園所から小学校へ、小学校から中学校への引継ぎシートで確実に情報を引き継ぎ、スムーズな接続ができるようにしている。今後も、10 年間を見通して、学校・園所が家庭との連携を進めながら、一人一人の幼児児童生徒が、学校園所に適応できる力を身に付けていけるようにしていく。
--	--	--

幼児児童生徒、教職員の交流と協働	ア 目指す子ども像の実現に向けた教職員の協働及び教職員の交流 (7) 教職員の合同研修会 (4) 授業研究会、園所参観を通じた研修 (5) 学年部会を通じた研修 イ 「自尊感情」と「コミュニケーション能力」の向上を目的とした交流事業 (7) 6年生網野中学校合唱祭（練習見学）参加 (4) 6年生体育祭取組見学 (5) 6年生部活動体験 (エ) 合同校外学習及び学びの交流 (オ) 小中合同交流事業（ともだち交流会等） (カ) 小学校体験授業時の1年生との交流 (キ) 5歳児交流会	○年間3回の全体研修会を通して非認知能力についての理解を深め、共通認識を図ることができた。保育研究会と授業研究会（2回）実施し、園所の先生方も一緒に事後研究会を行い協議することができた。 ○推進会議が中心となり、「ギミックブラッシュアップシート」を基に、授業改善を各校で進めることができた。 ○「未来を拓く学校づくり」推進事業に係り、招聘した講師による講演や研修会へ参加するなど、連携した学びの場を設定することができた。 ○保幼小連携部には校長、教頭それぞれ1名が入り円滑な連携を進めることができた。 ○生徒指導部会、教育相談部会、養護部会を必要に応じて開催し、児童生徒の実態等の共有を図ることができた。 ○6年生中学校授業体験は、各小学校の児童をグループにして活動させたことで、個々の児童が交流する機会となり、中学校入学後のイメージをより具体的に持つとともに、同学年の仲間を知ることができ不安軽減につながった。 ○5歳児交流会を実施することで、園所間の交流及び友達を知ることができ、次の体験入学につながった。
家庭、地域との連携、情報発信	ア 網野学園学校運営協議会の取組 (7) 網野学園の教育や子育て環境について学校・家庭・地域が目標や課題を共有・協議し、具体的な取組を推進して学園の教育環境づくりを進める。 (4) 網野学園保幼小中一貫教育の推進に向け、学校（PTA）園所（保護者会）、家庭、地域が連携・協働して取り組む。 イ 京丹後市PTA協議会網野小中一貫校PTA、保護者会の取組 (7) 網野小中一貫校PTAとして、「学園合同あいさつ運動等、一体となって取り組む。また、学園の「目指す子ども像」の実現に向け、保護者会とも連携して取り組む。 (4) どの家庭でも、幼児から大切に「これだけは！」（家庭編）の取組 ・基本的生活習慣の確立 ・規範意識の基礎の確立 ・家庭学習の習慣化 (5) 「子育て講演会（ゲーム・ネット講座）」については、主催を網野学園とし、運営は運営会議が行う。また、PTA及び保護者会とも連携し進める。	○網野学園学校運営協議会を計画的に実施し、学校・家庭・地域が一体となった必要な教育支援について意見交流し、学園支援への参画意識の高揚につながった。 ○学期に一度、網野学園あいさつ運動を保護者だけでなく関係団体や地域の方々と協力し、全ての学校で実施することができた。 ○どの家庭でも幼児から大切にする「網野学園『これだけは！』（家庭編）」のリーフレットを保護者に配布し、保護者へ保幼小中一貫教育で大切にしたい視点をお伝えし、協力していただくことができた。 ○保幼小中一貫教育学園コーディネーターが中心となり、学園だより、ホームページ、リーフレット等を通して、学園の教育活動を保護者・地域に積極的に広報することができた。 ○学校支援ボランティア等を活用し、網野町の住民が教育活動に積極的に参加できる取組を進めることができた。 ○第2期「未来を拓く学校づくり」推進事業に伴い、京都ノートルダム女子大学高井教授からいただいた「ようこそ！えほんのせかいへ」を通して、幼児期からの読み聞かせの大切さを保護者に知らせることができた。 ○子育て講演会に篠原嘉一氏（NIT 情報技術推進ネットワーク）の講演を通じて、保護者がSNS等について学べたことは、家庭での生活習慣の確立を図る上で有効であった。来年度も継続してSNSに係る最新の学習会を実施する。

4 今年度の成果と課題 改善方策

成果と課題	改善方策
(1) 組織体制及び運営上の改善 ○随時事務局会議を開催することで円滑な経営会議の進行管理を行うことができた。 ○運営会議を定期開催し、学園内の教育課題を共有し、教育目標・目指す子ども像の実現に向けた経営を行うことができた。 ○学園経営の基本方針に基づいた「重点的な取組み内容」「行動連携」を具現化するために、経営会議が中心となり、各会議・部会等で組織的に進めることができた。 ○運営会議、推進会議、領域部会の取組の進捗状況を把握し、成果・課題を整理し、総合調整や改善に努めた。 △事務局は、継続して学園経営の円滑な進行管理に努める。 △最終年となる「未来を拓く学校づくり」推進事業の研究実践をまとめ、広く発信していく。 △「認知能力」と「非認知能力」を一体的に育む教育を今後の学園の教育活動の柱にして取組を推進していく。 (2) 重点的な課題・取組について <u>教育目標・目指す子ども像・学校経営方針について</u> ○教育目標及び目指す子ども像の実現に向けてPDCA サイクルで学園経営を行うことができた。 ○園所で「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を見通した実践研究を意欲的に進め	(1) 組織体制及び運営上の改善 ○「未来を拓く学校づくり」推進事業を通して、「認知能力」と「非認知能力」を一体的に育むための学園実践を積み重ね最終年をまとめる。 ○経営会議は、第2期「未来を拓く学校づくり」推進事業を経営の柱とし、今後も学園内の教育課題、各会議・部会等の動きを把握しながら的確な学園経営を行う。また、各会議・部会担当校長・教頭は、経営会議に連絡報告及び決裁を受けながら、実践の方向性・到達点を明らかにし、取組を進める。 ○次年度も保幼小中一貫教育学園コーディネーターが、各学校園所への訪問、各会議・部会への参加を行い、状況把握と内容整理、調整を図る。 ○「網野学園で育成したい非認知能力(指標)」を基に、授業や保育・教育の研究を深め、実践を積み上げる。 ○児童生徒の生活習慣や SNS との関連性の改善に向けてアンケートの分析を行い、各校園所の実態に合わせた取組の実施と交流を行い、学園の子どもの生活改善を図る。 ○保幼小連携部会の担当者が同一校にならないよう調整し体制を組む。 ○令和6年度、第1回研修会(5月2日)第2回研修会(8月8日)第3回研修会(2月18日)の年3回の研修会を節目として研究を深める。 ○第2回全体研修会(夏季)については、網野学園小中学校全教職員で3園所参観・事後研を行い、幼児の実態把握や指導実践について共有化を図る。また、網野学園教職員が学べる場として講師を招聘し研修を深めていく。 ○令和6年度については、授業研究を2学期に網野こども園・島津小学校・網野中学校で行い、京丹後市保幼小中一貫教育授業研究会と兼ねて実施し、第2期「未来を拓く学校づくり」の研究成果を、授業研を通して整理し、発信していく ○学年部会については、年4回実施する。(5月・6月・7月・1月)授業日における開始時刻は午後4時からとするが7月は午後3時からの設定とする。各小学校の授業公開と関連させたり、計画に沿った十分な準備をする等見通しをもったりして運営し、限られた時間の中で学年部会の研修の充実を図る。 ○小5、小6学年部については担任と中学校数学、英語担当教員で構成する。(5年部会…中学校英語科担当教員・小学校理科専科、6年部会…中学校数学科担当教員) ○学年の課題から必要に応じて学年部会を開催できるものとする。領域部会についても、必要に応じて開催する。 (2) 令和6年度に向けての重点的な課題・取組の方向 <u>教育目標・目指す子ども像・学校経営方針について</u> ○教育目標「将来に夢と希望をもち、郷土を愛し、知・徳・体の能力を伸ばす子どもの育成を図る教育の推進」及び目指す子ども像の実現に向けて、PDCA サイクルで学園経営を行う。

た。また、保育参観が実施でき、事後研を通して研修を深めることができた。 ○中学校卒業までの目指す姿の共有と系統的な教育、一貫した指導の継続を行うため、「網野学園で育成したい非認知能力（指標）」を活用した授業研究会が計画通り実施できた。 ○第2期「未来を拓く学校づくり」推進事業に係る2年次の研究実践を進めることができた。 確かな学力の育成について ○小学6年生においては、思考力・判断力・表現力を付けるために、単元終了時に学習内容の理解度・定着度の検証や把握をするため、単元総括テストを作成し、実施することができた。 ○推進会議を中心に授業研究会を年2回実施し、「網野学園で育成したい非認知能力（指標）」を基にした授業研究を進めることができた。 △さらに、「網野学園で育成したい非認知能力（指標）」を基に、学園として授業研究を進めていく。 △「確かな学力の育成」については、網野学園の最重要課題であるため、授業づくりを中心に研究を進めてきた。児童生徒アンケート結果から学習意欲、学習内容の理解については肯定的な評価（90%）が高い。しかし、自分の考えをもち交流することは学校間・学年間に差が見られる。また、家庭学習の充実の課題は大きく、小中の接続をより丁寧に指導し、学習時間はもとより自ら学習する力を育成する必要がある。 △今年度の学園児童生徒アンケートの分析から、課題を明確にし、学園としての手だて、指導の方向性を明確にし、具体的な取組を進める。 規範意識の醸成について ○「規範意識の醸成」については、児童生徒及び教職員アンケート結果や児童生徒の状況から中学校においてはほぼ定着（99%）してきている。小学校では、学校間、学年間に差が見られ更に定着させるための取組が必要である。	○各期で育てたい非認知能力を明確に持ちながら、教育活動を進める。 ○園所で「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を見通した実践研究を意欲的に進めていく。 ○第2期「未来を拓く学校づくり」推進事業最終年の研究実践に取り組み、まとめを広く発信していく。 確かな学力の育成について ○主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業デザイン、ゴールの姿をイメージした単元全体を通した授業づくりについて、研究・実践を推進会議が中心となり進める。また、授業づくりの研究とともに指導と評価の一体化について研修を深め、授業改善を進める。 ○育成したい非認知能力（指標）を基に授業改善を進め、確かな学力の育成を目指す。更には、非認知能力を伸ばすことが認知能力を伸ばすことにつながることから「学びに向かう力、人間性の涵養」の観点から「自分と向き合う力」、「自分を高める力」、「他者とつながる力」の育成に視点をおいた授業実践を行う。 ○ICTを活用し、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を進める。 ○単元全体を構想することで、授業のゴールの姿を明確にし、子どもが主体となる授業づくりと指導と評価の一体について実践を進める。 ○確かな学力を身に付けさせるため、推進会議が中心となり、各校の実態や状況を交流し授業改善に活かす。また、各種テストの分析を丁寧に行い、課題に対して各校の実態に応じた手立てを講じる。 ○学園として、家庭学習・基礎学力の定着に取り組む。特に家庭学習については保護者とも連携し、家庭学習習慣の定着・内容の充実（自主的な学習）を目指した取組をさらに進めていく。 ○小学6年生においては、思考力・判断力・表現力を付けるために、単元終了時に学習内容の理解度・定着度の検証や把握をするため、引き続き単元総括テストを作成し、実施する。 ○小学4年生においては、I期の最終学年であり、基礎基本の定着に向けた小4ふりかえり学習を継続して実施する。 ○家庭学習の充実が大きな課題となることを共通認識し、学校と家庭が連携し、家庭学習の環境づくりを進めていく。iPadやオンラインによる学習を授業や家庭学習での有効な活用について今後も検討していく。 ○保育参観での学びを自らの実践に生かす姿勢と具体的な実践を積み上げていく意識を高めていく。 規範意識の醸成について ○改訂した網野学園「これだけは！」について、学園、各校・園所で非認知能力の育成に向けて組織的に進める。 ○篠原嘉一氏による「ゲーム・ネット講座」については、小2年生、小学4年生、中学生、網野学園保護者を対象に経営会議、運営会議が主体となっ
--	---

△行動連携『どの家庭でも、幼児から大切に
する「これだけは！！」(家庭編)』の中の、
規範意識の基礎の確立の中で、「テレビ・ゲ
ーム・インターネット・SNSなどのルールを
決める」を挙げている。しかし、網野学園
生徒指導部のアンケート結果からも、大き
な課題になっている。

豊かな人間性について

- 不登校傾向児童生徒について毎月あげると
ともに、経営会議、運営会議等で確認し実
態交流を行った。
- 引継ぎシートを丁寧に作成し、園所小間、
小中間の接続を丁寧に行うことで不登校の
解消につなげている。
- 教育相談部会で事例研修会を実施し、不登
校児童生徒の事例をもとに児童生徒とのつ
ながりや家庭支援の手法等を学ぶことがで
きた。また、SCやSSWの専門機関と連携を
図り、状況改善に向けての取組を進めるこ
とができた。
- △「豊かな人間性」については、アンケート結果
から学年が上がるにつれ、自己肯定感や自尊
感情にかかわる項目が低くなっている。
- △学園評価アンケートから「自己肯定感」や「将
来の夢や目標」をもつ児童生徒の割合が学年
が上がるにつれ、減少する傾向にある。

保幼小中一貫教育の具体的な内容

- 網野学園Ⅰ期、Ⅱ期、Ⅲ期のゴールの姿を各
学年部会で実態交流するとともに、保育部会・
学年部会の中で育てたい非認知能力(指標)
について研究を進めることができた。
- 継続して感染症対策をしながらではあった
が、工夫をしながら多くの事業や行事を実
施することができた。
- 保幼小中一貫教育学園コーディネーター
が、各会議、各部会等に参加し経営会議で
の方向性等について把握し、整理したり調
整したりしながら、目的に沿った連携や取
組を進めることができた。各園所・小学校
を訪問し、各校の授業や取組をたより等で
発信し、学園内の各園所小中学校間をつな
ぐことができた。
- 保幼小中一貫教育学園コーディネーターが
網野学園運営協議会の事務局を務め、地域
学校協働本部地域コーディネーターと共
に、丁寧な連携を進める中で、保護者・地
域の方々の学園運営への参画意識の高揚に
つながった。

て実施する。(小学生は北小、中学生・保護者は網
中を会場とする)保護者の部(子育て講演会)に
ついては、主催は網野学園とし、運営は運営会議
が行う。また、PTA及び保護者会とも連携し、特
に、園所の保護者への参加も進める。

- ゲームやSNSの扱いについて、自己コントロール
を身に付け、正しく使う力をつけるために、学園
児童生徒アンケートの分析から生徒指導部会と養
護部会が連携しながら取組を進める。

豊かな人間性について

- 自己肯定感をもち将来を展望できる力を育むこと
ができるよう、より一層豊かな人間性を育む学習
や活動を取り組んでいく。
- 多様で複雑な不登校の要因や背景をできる限りの
確に把握し、切れ目のない組織的な支援をしてい
く。重点的な取組み内容の中の「豊かな人間性の
育成」に位置付け、「自立的に生きる基礎の確立」
に向けて、家庭と連携し系統的に取組を進める。
- 情報共有を丁寧に行い、不登校の未然防止、早期
解消、居場所づくりに向けて取組を進める。各ケ
ース会議、各関係諸機関との連携を強化する。
- 育成したい非認知能力(指標)を基に、学園の教
育活動及び各園所・学校での教育活動を通して育
んでいく。

保幼小中一貫教育の具体的な内容

- 確かな学力の育成に向けた具体的な取組として次
の2点を行う。
 - ① 小中連携加配を活用し、6学年部会で単元
総括テストを作成し、実施する。
 - ② 各学年で作成した「網野学園で育成したい
非認知能力(指標)」を基にし、ギミックブ
ラッシュアップシートを活用した授業改
善を進める。
- 部活動体験は中学3年生が活動している6月に実
施する。また、6年生対象入学説明会・中学校授
業体験は11月に実施する。
- 5歳児が一堂に会し、他の園所の仲間と交流を深
めるため、5歳児交流会を実施する。
- 各園所は近隣の小学校行事等の見学を通して、子
どもたちが小学校施設への出入りや行事を知る機
会を設定する。
- 学園の課題である「基本的生活習慣の確立」「規範
意識の基礎の確立」「家庭学習の習慣化」について
網野学園小中一貫校PTAとして、園所保護者会と
も連携し課題解決に向けて取組を進める。
- 就学前から中学校卒業までを見通した家庭との連
携を進める上で、園所保護者会との連携を進める。
- 網野学園学校運営協議会での交流・協議を通して、
さらに学校・家庭・地域が参画意識を高め、一体
となって教育力のある学校・学園づくりを目指す。

令和5年度 丹後学園保幼小中一貫教育報告書

1 「目指す子ども像」、教育目標

- ①ことばで伝え合い、主体的に学ぶ子 【知】
 ②自分を大切にし、人を思いやれる子 【徳】
 ③ねばり強く身体をきたえる子 【体】
 教育目標「夢と希望と創造性あふれる豊かな心を持ち、未来に向けて主体的に生きる子どもの育成」

2 保幼小中一貫教育として解決を目指す重点課題、取組の柱とする内容

- ①幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿についての研究・実践や各教科の目指す資質・能力のために生徒指導の実践上の4視点を授業にどのように活かすかを研究する。授業研究の教科として児童生徒の実態、課題克服の必要性があるため『国語』を重点とし、文章を正しく読み取り、じっくり考え、適切な表現ができることをめざす。
 ②保育所・こども園・学校間が連携して、就学前から中学校卒業までを通して適時性・一貫性・連続性のある教育課程を編成し、小中合同事業・保幼小接続に係わる事業・小小連携合同事業と3つの事業の充実を目指す。
 ③丹後学園の取組や事業等を積極的に発信することで保護者や地域の方の理解を一層深める。

3 保幼小中一貫教育の具体的な内容と評価

項目	内容	評価 (実践の過程・幼児児童生徒の姿・教職員の見方等)
幼児児童生徒の実態や課題、目指す子ども像や目標、方針等の共有方策	①各期の指導のポイントを設定し、子どもの交流を図る行事等の実施を通して、「集団生活の中で人と関わる力」や「コミュニケーション能力」を高める。 ②重点教科を「国語」とし、各期別言語活動「読むこと」の指導の重点的なポイントを意識して授業改善を行い、他教科・領域の指導についても同様にポイントを読み替えて実践を積み。授業改善の10のチェックリストの活用。 ③全体研修会、授業を通した研修会（3回）、学年部会を通した研修を計画的に実施し、目指す子ども像の実現、目指す教師像の意識化に努める。	○教育目標、目指す子ども像を保幼小中で確認し、子どもたちの成長と発達の特長や課題を共有して適切な指導を継続してきた。また、指導については一貫性や連続性を意識した実践ができた。 ○経営会議を定例化し、運営会議・教育課程会議と学力充実部会・教育相談部会・生徒指導部会・保幼小接続部会の取組の進捗や実践後の成果・課題を交流し、今後の方向性を示し取組を進めることができた。 ○事務局会議を経営会議の前に実施し、各会議、部会等の実践状況や学園内の教育課題を把握し、教育目標の達成に向け経営会議等の調整・事務作業を行った。 ○学園経営方針に基づき、運営上の課題の検討や調整を行い、各校での年度初・末全体研修会、夏季研、教育講演会を充実させるために事前準備、事務作業等を進めた。 ○経営会議・運営会議後は、会議内容についてコーディネーターがまとめ、各校・園・所に発信した。 ○一斉部会、一斉学年会を開催し、指導課題、合同事業、教材研究などの交流の時間を設定できた。 ○新型コロナウイルスが5類に移行したこともあり、経営方針や計画について、ほぼ予定どおりに進めることができた。また、丹後学園学校運営協議会の委員の方々には、挨拶運動や授業や体験活動等の参観をとおして、小中の連携や子どもたちの実態を見ていただく機会となった。 ○中学校からの課題提起を受け、学園全体で課題を共有し、課題解決に向けた動きや取組を各部で進める上で意識を高めることができた。 ○学園評価アンケートの分析により、地域・保護者・児童生徒の保幼小中一貫教育に対する認識や要望等について知ると共に、丹後学園保幼小中一貫教育についての改善の手がかりを得ることができた。アンケートについては、Formsを活用して、集計の効率化を図った。

		○各学校等で課題に応じた教育実践を行い、全ての学校等が中学校を卒業する姿を想定し、生きる力の育成につながる指導ができた。（自立につながる意図的な指導） ●保幼小中の10年間を見通した、保幼小中一貫教育の深化を図るためにも校種間における連携を含めた総合調整活動（公開授業、授業改善への環境づくり）を各種事業との連携のもと、今後も進めていく必要がある。 ●一斉学年部会で、ICT活用に関して、各期に応じてより効果的に使用する単元等を見極めておく必要がある。 ●次年度さらに保幼小中一貫教育を推進していくため、0期からⅢ期の各段階でつけるべき力の実践や研究を深めていくことが必要である。
就学前から中学校卒業までを見通して一貫した指導、教育課程	①就学前から中学校までの一貫した「教科の指導と生徒指導の一体化させた授業づくり」を進めるとともに、コミュニケーション能力の育成に努める。 ②指導方法の適時性や系統性・一貫性を重視するために、言語活動「読むこと」を重点として国語を研究し、指導の方向を2小学校でそろえる。 ③総合的な学習の時間を活用した「丹後学」を教育課程に位置づけ、実践研究を進める。	○国語を小中学校がともに重点に置き、授業の公開や授業研究会が実施できた。授業研究会では、宇川小学校では、特に安心できる学習環境が整えられた中で、工夫を凝らした心を揺さぶる発問により、子どもたちの熟考している姿が見られ、日々の丁寧な指導が窺われた。丹後小学校でも授業の中で、自分で決めたり考えたりする場面を設定し、深く考えたいような発問や問い返しを行い、主体的・対話的な学習に向かう機運が高まっているとともに、既習事項や学園、学校の教育方針を学級経営に落とし込んだ“かしこくなるための6か条”を子どもたちに意識させ、互いを認め合う姿が見られたときは、積極的に評価していく学級の温かい風土が醸成されていた。丹後中学校でも授業公開を参観する中で、生徒の様子を知ることができた。 ○「授業研究会通信」を発行し、授業研究会での学びを各校園所での保育・授業実践に生かすことができた。特に、学校園所において「対話的な学び」を充実させることができた。 ○小4～中3までの学力・学習状況（の変容）を把握できる「京都府学力・学習状況調査～学びのパスポート～」の結果（質問紙調査）の分析を行い、児童生徒の非認知能力の状況について把握することができた。「学習するときに、ICT端末を使うことで、ほかの人と意見や考えを共有しやすい。」「学校では安心して学習することができている。」という項目において、小4～中3までのすべての学年において、肯定的回答の割合が京都府を上回っていた。このことから、学園としてICTの積極的・効果的な活用が進んでいることや生徒指導の実践上の視点の一つである安全・安心な「居場所づくり」に配慮した授業づくりが進んでいることがうかがえる。（※結果（質問紙調査）については、各校で共有した。） ○小学校では、タイピングスキルの向上を目指すことで、授業や委員会等での振り返り・交流等がスムーズに行えるようになった。3学期に「タイピング検定」の取組を行うことを計画している。 ○オンラインによるタブレットの持ち帰り学習を積極的に推進することができた。（小中学校ともに、持ち帰りはいつでも可とし、児童生徒に選択させている。） ○家庭学習ががんばり週間の取組では、1学期の振り返りを踏まえ、2学期は取組期間を短くして取り組んだ。そうすることで、各校の実態に応じて、焦点化して取り組むことができた。 ○各校で「生活のきまり」を使って、学校生活のルールやマナーについて指導した。また、ipadの使い方については、各種ルール（操作、授業、持ち帰りなど）、情報モラル（画像や動画について、個人情報についてなど）、マナ

		一について指導した。 ○不登校や不登校傾向、教育相談課題のある児童生徒の交流をすることで、丹後学園として情報共有ができた。実態交流だけでなく、家庭環境などの背景や要因、支援のあり方なども探ることができた。 ○中学校入学後の様子を交流することによって、小学校は支援の在り方等を検証し、教育相談活動に活かすことができた。 ○スクールカウンセラーから専門的な知識を学び、児童生徒の見立てについて学ぶことができた。【7月14日「ABA（応用行動分析学）」について】 ○2学期末に、6年生の授業参観と懇談をもつことによって、小中の連携の円滑な接続が組織として積極的にできた。 ○中学校においては、11月後半、12月頭に参観懇談をすることで、余裕をもって各学校の児童の雰囲気、児童の実態や課題などを把握することができ入学後の見通しがもてた。 ○小学校在籍中15日以上欠席があるなど気になる児童の個別記録を中学校に持ち上がり、実態や指導・支援のあり方等を円滑に中学校に接続する予定である。（3月末） ●別室登校している児童生徒への支援の充実をさらに考えていきたい。
幼児児童生徒、教職員の交流と協働	①2小学校が集合して実施する事業と各校で共通して実施する事業を行う。 【2小学校合同事業】 ②教職員全体研修会・授業研究会を実施するとともに、保幼小接続部会や期別部会・学年部会を開催し、それぞれの課題の改善や解決に向けた取組を実践する。 ③中学校1年生入学後1カ月ごろの状況及び出口となる中学校3年生の授業公開を行い、多様な視点で課題共有すると同時に指導について研究協議を行う。【小中合同事業】 ④教職員間…学年部会での授業研究会 保幼小接続部会でのスタート研修会【保幼小接続に係わる事業】 ⑤保幼小の子ども…5歳児と小1年生との交流会（2回）、遊びと給食交流 保幼小の教職員…5歳児と小1担任の夏季研修会、テーマは「話す・聞く」 ⑥保幼連携…4.5歳児の交流活動	○年度当初に1年生の授業参観を実施し、新入生の様子について保育園で共有する事ができた。また、スタート研修会と同日に設定することで、子どもたちの姿をもとによりよい接続の在り方について協議することができた。 ○スタートカリキュラムの検証を通して、どのような部分の接続が必要なのかということやかかわり方の接続についてなど、具体的な接続の在り方について考えることができた。 ○接続部会夏季研修会では、幼児期の教育の基本的な考え方や保育園の接続の在り方について専門的な見地から学ぶことができた。また、幼児の姿をもとに育ちにおいてどのようなことを大切にしかかわっていくのかということを考える機会となった。 ○本年度の夏季全体研修会では、学校や家庭での非認知能力の育て方など講演された内容を教職員全員で確認できた。また、講演後は分散会をもち、今までの実践を振り返ったり、今後の指導構想などを交流することができた。 ○夏季全体研修会では、非認知能力を伸ばすことの重要性や教育現場で伸ばすためにできることについて教職員全体で確認できた。 ○「中学校授業体験」「小学校合同校外学習」「丹後こども園・宇川保育所合同での1年生と5歳児のなかよし交流」等、効果的に進めることができた。また、昨年度は「部活動見学」であったが、今年度は「部活動体験」として実施でき、より充実した取組となった。 ○小小合同行事、小6部活動体験、小6授業体験、ふれあい交流会等は中学校生活への不安を解消する機会になった。 ○なかよし交流会においては、実施時期や目的等を踏まえ、宇川保育所・丹後こども園・宇川小学校・丹後小学校の交流の広がりや深まりに焦点化することで、取組の充実を図ることができた。 ○少しずつではあるが、可能な範囲での日常的な交流を増やしていくことができている。（オンライン、事前交流等）

		●保幼小の交流を計画的に行えるよう、各校園所の活動の中で関わり合える場面があるか一定整理していけるとよい。 ●なかよし交流会については現日程でも行うことは可能であるが、各校園所での行事等を踏まえると10月中旬あたりに変更していくことが望ましい。 ●育てたい力が、ついたかどうかを検証し、それに対しての改善策を検討していく必要がある。
家庭、地域との連携、情報発信	①「丹後学園学校運営協議会」の機能化と充実を図る。(年間2回の総会) ②「丹後学園だより」等を発行し、保護者や地域に配付する。各校のホームページにて、取組の状況を発信するように計画する。	○予定していた年間計画は、ほぼ計画通り実施できた。 ○小中一貫校PTAと市教育委員会とともに教育講演会を開催し、家庭や地域での非認知能力の育て方等を保護者、地域住民と学ぶことができた。 ○学校と家庭、地域社会の横の連携を深めるために丹後学園学校運営協議会委員、町内民生児童委員、主任児童委員、保護司、各種団体の方々に保幼小中一貫教育の支援、協力、理解を得ることができた。 ○各校ホームページや学園だより等で、教職員や児童生徒、保護者に広く広報することができた。 ●保幼小中一貫教育の成果として顕われた子どもたちの成長を広く発信し、地域住民へ学園のめざすところがさらに浸透するように取組を継続させていく必要がある。 ※次年度も、2学期に予定している教育講演会を学園PTA行事として、位置付ける。

4 今年度の成果と課題 改善方策

成果と課題	改善方策
① 本実施 8 年目の丹後学園の経営を行った。組織や会議について当初計画したことが、ほぼ計画通り実施することができた。 ② 丹後学園運営協議会(名称:丹後学園教育応援会)を立ち上げて4年目で、地域への啓発に心がけ、参観の機会も計画通りに設けることができ、学園事業の啓発理解を深めることができた。 ③ 小・中学校だけでなく、こども園・保育所も含めた取組の実践を進め、『主体的・対話的で深い学び』による指導改善をテーマに掲げ、各園所校の実態に合った実践研究が進んだ。保育所やこども園の幼児の状況を学園として情報共有を行うことができ、保幼小の接続に関する学園としての研修が進んだ。 ④ 小1プロブレムを解消するための、保育所やこども園の幼児の状況を学園としての情報共有と交流を丁寧に行った。令和元年度の「教育フォーラム」で発信した「丹後学園」の研究の深化・検証の推	◇「京都府学力・学習状況調査～学びのパスポート～」の結果(質問紙調査)を踏まえ、確かな学力を育成するために、学園全体で授業改善を確実に進める。 ◇「京都府学力・学習状況調査～学びのパスポート～」の結果(質問紙調査)等から、児童生徒の非認知能力の変容を把握し、それをもとに授業改善の進捗状況を評価する。 ◇学園の目指す子ども像である「ことばで伝え合い、主体的に学ぶ子」の育成に向けて、研究テーマを「子どもたちが主体的に学ぶ授業づくり～教師主導から子ども主体～」とし、子どもたちが学習の主体者となるよう、「授業づくりの重点」を設定し、研究を推進する。 ◇授業研究会の日時を今年度中に決定しておく。 ◇家庭学習の在り方について検討し、「家庭学習のきまり」、「家庭学習の手引き」を見直す。 ◇各校の「生活のきまり」を、センターファイルサーバーに入れて、それぞれ参照することができるようにしておくことで、自校の「きまり」を見直し考えて、4月から運用することができるようにするなど、学園で情報を共有し、活用できるようにする。 ◇各校の生指事象の交流や研修についての協議などができるようにする。改訂された生徒指導提要の視点を入れた指導の交流により、研修にもなるため、次年度は各学

進の継続が続いている。 ⑤ 2小学校の学年ごとの合同校外学習、修学旅行等を行い、児童の交流が深まると同時に教員の指導方法等の交流も深めることができた。 ⑥ 2学期末に6年生の授業参観と懇談をもつことによって、小中の連携の円滑な接続が組織として積極的にできた。小学校においては、卒業までにつけておきたい力の見通しをもつことができ、中学校においては、各学校の集団の雰囲気や児童の実態や課題などの把握ができ、入学後の見通しがもてた。 ⑦ 小学校在籍中15日以上欠席のある児童の個別記録「丹後学園教育相談ファイル」を作成し、実態や指導・支援のあり方等を円滑に中学校に接続する予定である。 ⑧ 小学校と中学校との教職員の意見交流及び合同研修を通して、相互理解を深めながら、丹後学園の幼児児童生徒の指導課題を共通確認し、学園全体で、就学前から10年間の学びを学園として今後どのように進めていくべきか、保幼小中一貫教育モデルカリキュラムに示されている計画や指導に照らし、言語活動や学び方等の中から、本学園が重点としている指導内容を整理することができた。 ⑨ 実態に応じた指導方法の工夫・改善について、各校ごとの授業研究会を通して研究協議を行い、前進させることができた。また、ゴールとなるめざす中学3年生の姿を共有することができた。 ⑩ 読む力の育成を重点にした研究を継続して行い、目標と指導と評価の一体化を目指す授業づくりの研究が深まった。 今年度の課題 ① 学園の学力・学習状況の実態を踏まえ、研究テーマ（「主体的・対話的で深い学びの授業づくり～生徒指導の実践上の4つの視点を生かして～」や研究授業・研究協議の視点（目指す資質・能力の育成に向けた「主体的・対話的で深い学びの授業づくり」、「教科の指導と生徒指導を一体化させた授業づくり」）を焦点化して研究を進める必要性を感じた。	期に部会を設定していきたい。また、センターファイルサーバーなどを活用し、共通ファイルに入力するなど、担当者が集まって部会が持てなくても定期的な情報交流ができるようにする。 ◇来年度の学園生指部会として、学期に1度は部会を持ち、情報交流や事業実施に向けた協議などをする。また、生徒指導提要の視点を全体に広げ、生徒指導部の方向性を丹後学園の全教員に広げ、実際に教員が動きやすいものにし、生徒の変容が見られるよう実働的な取組にする。 ◇配慮が必要な児童について、小学校での様子が分かるように記録を残し、中学校へつなぐ。 ファイルの色は、小1・4年が青 小2・5年がピンク 小3・6年が黄にする。 ○経営会議は、学園内の教育課題、各会議や部会等の活動状況を把握しながら、恒常的に課題を整理や新たな取組を提起し、学園経営を行う。 ○各会議・部会担当校園所長は、経営会議に事前連絡、事後報告及び決裁を受けながら、実践の方向性・到達点を明らかにし、取組を進めていく。 ○部会は、学力充実部、教育相談部、生徒指導部・保幼小接続部の4部会とする。 ○教育課程会議兼学力充実部会については、教務主任が担当し、学力の調査・分析や学力・授業力向上を図る計画・実践に関わる進行管理、検証等を行う。学園として重点教科は設定しない。 ○令和5年度と同様に、重点的な取組内容として「確かな学力の育成」「コミュニケーション能力」「評価を通した取組の充実」を設定していく。 ○小学校で気になる児童が、中学校で適応しにくくなることもあるので、児童の見立てや支援、家庭との連携を大切にして教育相談活動を行い、小学校での様子（本人・家族・医療との連携等）を丁寧に記録に残し、中学校につないでいく。 ○夏季研修会については、学園全体で幼児期の教育について理解を深めていけるよう、特に時期・実施形態等の工夫が必要である。（夏季全体研修会として、午前中ことも園参観、午後より研修会予定） ○学園PTAと連携し、「家庭学習の手引き」を活用しながら、家庭学習習慣の確立を目指した取組を更に進めていく。 ○ケース会議等を通じて、本人を取り巻く生活環境や保護者の生育歴等の実情を踏まえるとともに、子の将来を見据えた指導の支援策を関係機関と連携を図り、対応していく。
--	---

令和 5 年度 弥栄学園保幼小中一貫教育報告書

1 「目指す子ども像」、教育目標

○教育目標 「ふるさとを愛し、主体的に学び、心豊かで、たくましく生き抜く子どもの育成」
○目指す子ども像
(知) 知識と技を磨き、活用する子 *自ら課題に取り組む (自主的な姿勢)
(徳) 自他の良さを知り、共に伸びる子 *仲間と知恵を絞る (対話的な学び)
(体) 心身を鍛え、何事もやりぬく子 *解決策を探り、自信をつける (深い学び)

2 保幼小中一貫教育として解決を目指す重点課題、取組の柱とする内容

1 重点課題
(1) 「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指す授業づくりの推進
・授業実践力等の向上 (他校種研修、授業研究会、全体研修会等を通じて)
(2) 自尊感情の醸成を目指し、生徒指導の実践上の視点を生かした多様な教育活動の推進
・異年齢の交流活動、自尊感情、自己有用感、上級生への憧憬
2 取組みの柱
(1) 学力向上、授業づくり
研究主題：他者の意見をふまえ、自分の意見を持ち、発信する力をつける
① モデルカリキュラム、丹後学をもとに、教育課程編成を行う。
② 授業公開、事後研を実施し、学力の定着と指導力の向上を図る。(授業研究会)
③ 円滑な接続ができるようⅠ期、Ⅲ期を充実させる。
④ ICTを活用した授業や取組みを推進し、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を行う。
(2) 交流・連携の取組み(園小・小小連携、小中の交流活動、小学生の中学体験授業)
(3) 学園内のいじめ、不登校、ネットトラブル等の未然防止と解消に向けた取組み
(4) 積極的な公開や情報発信 (HP 等により地域へ発信)
(5) 関係機関、地域との連携 (弥栄学園運営協議会との連携)
(6) 授業力の向上と教育課題解決のための研修会の開催 (研修会、研究協議)

3 保幼小中一貫教育の具体的な内容と評価

項目	内容	評価 (実践の過程・幼児児童生徒の姿・教職員の見方等)
幼児児童生徒の実態や課題、目指す子ども像や目標、方針等の共有方策	1 弥栄学園の組織の活性化 (1) 経営会議、運営会議、教育課程会議との各部の連携 ○経営会議 12回開催 ○運営会議 9回 ○教育課程会議 10回 (2) 各会議、各部の中での各校の交流と分析、指導方針の確認 ○生徒指導部会 4回開催 ○教育相談部会 4回 ○養護部会 4回 ○事務部会 9回 ○学年部会 3回 (3) 全体研修会で子どもの実態や分析結果、指導方針の共有	(1) 組織運営について ア 学園規模に合わせた組織体制の改編後の運営も安定してきており、経営会議が運営会議、教育課程会議、その他学年会を含めた各部会の取組みの進行管理・評価を適切に行うことで、弥栄学園全体の事業・取組みが計画的に進められた。 イ 吉野小学校と弥栄小学校との適正配置後の弥栄学園として保幼小中一貫教育の方向性について、学園組織の改編も含めて整理を進める事ができた。 ウ 経営会議、運営会議、教育課程会議の3会議を定例的に開催することで、各会議が有機的な運営を行ってきているが、細かな調整や各会議の方向性など更に改善が必要である。 (2) 各活動における交流 ア 1中2小1園の特色を生かして計画的にそれぞれの会議、部会が活動を実施し、10年間を見通した一貫性のある指導のための協議・交流を行った。各校園の指導や校風等を理解してお

	○第1回全体研修会 5/2 ○第2回全体研修会 8/21 ○第3回全体研修会 2/14 於：弥栄中	互いのよさや強みを学び合い尊重する機会となり、次年度の組織改編に向けて一定の整理が進んだ。 イ 各会議、各部が指導の方向性を決め 各種活動に取り組むことはできたが、活動によっては各校園の全職員に目的や活動内容等の共有が不十分なものもあった。 (3) 全体研修会 本年度コロナ前同様に3回の全体研修会が全て集合型で開催することができ、学園の方針、教育目標、重点課題、取組みの柱等を周知徹底し、学園全体で共通認識を深めることができた。また、今年度は全体研修会において、通常学級に在籍する特別な支援を要する児童への対応について、外部講師を招聘しての研修を行い、特別支援教育や発達障害等に係る理解を深める場となった。
就学前から中学校卒業までを見通して一貫した指導、教育課程	2 発達段階に応じた系統的な指導・活動 (1) 家庭学習習慣化に向けて ○家庭学習がんばり週間 (2) 円滑な接続に向けて ○園小接続プランの実践 (3) 保幼小中一貫した授業づくりの推進 ○授業改善で目指す児童の姿の共有	(1) 家庭学習がんばり週間 家庭学習の取組みを中学校の期末テスト期間に合わせて3回実施した。学習習慣を身に付けたり、学習意欲を高めたりするための働きかけや保護者が家庭で取り組めること等について、学園全体で共通理解を図り実施することができた。保護者の感想からも分かるように、多くの家庭で家庭学習や学習環境等について振り返る機会となっている。家庭学習における系統性や学校間・担任間の差異を解消するとともに、各家庭における9年間を通した家庭学習の連続性につながっている。 (2) 保幼小接続モデルプランの実践 2小学校での確実な実践に向け、年度当初に園小接続部会を開催しスタートカリキュラムの確認を行い、実践を行った。本年度はこども園参観の機会を得たので、こども園での指導やねらいについて再度確認し、学園内で定期的に交流することを通して年度末における接続プランの見直し・改善に生かしていく。 (3) 学びのパスポートの効果的な活用 本年度から実施された府の学びのパスポートのデータ活用や分析などから得られた各校の学力実態、非認知能力との相関関係など学園として園・小、小・中合同での分析や改善に向けての手立て、教育課程など令和6年度からの1園1小1中体制の中で整理していく必要がある。
幼児児童生徒、教職員の交流と協働	3 教育活動の連続性・協働性 (1) 授業研究会の取組み ○弥栄中1年 国語 6/14 ○弥栄小 11/29 6年 算数 1年 算数 (2) 園小連携 ○園小合同交流会 9/13 (3) 小中連携 ○部活動体験 2/28 (予定) ○ふれあい交流会 11/8	(1) 授業研究会 ア 今年度は計画通り小1、小6、中1において合同授業研究会を開催することができた。学園の教員が集まり、発達段階を踏まえた指導方法や学習形態等の工夫について共通認識を図ることができた。研究協議においては、各校種による授業観や評価観の差等が縮まるなど、お互いのよさや強み、文化等を理解することができた。 イ 第2回全体研修会では、教育課程会議より第1回授業研究会のまとめについての報告があり、「2学期以降の授業の中で意識していきたいこと」について、全体で確認することができた。 (2) 園小連携活動 園小接続プランに基づいて、児童園児の実態に応じた交流行事を計画通り実施することがで

	○中学校授業体験 9/29 体育 1/18 社会 (4) 小小連携 ○各学年、年間1回の交流行事を実施 (5) 情報モラル教育に向けた取組み ○情報モラル教室 12/6 ・篠原嘉一 様 (NITネットワーク取締役) ○情報モラルアンケート ・インターネットの利用に関するアンケート実施 (小4～中3)	きた。当日は小1が中心となって活動を進め、自己有用感を高めた。 (3) 小小連携活動 ア 部活動体験 (6年のみ) では、中学校への入学に対する不安の一つに上級生との関係があげられるが、実際に部活動で中学生と交流することで、上級生のやさしさに触れ不安の軽減につながり、入学への期待を高めるものとなった。中学生にとっても、自尊感情、自己有用感を感じられる取組みになった。 イ 今年度、小6の中学校授業体験は、実技 (体育) と社会科を実施した。中学校の体育館や教室で授業体験を行うことで、中学校の授業の雰囲気に触れ、学習への不安を軽減して入学への期待を高めるものとなった。 (4) 小小連携 ア 2小の同学年で交流行事や合同の取組みを実施した。特に本年度は令和6年度からの学校適正配置を視野に2学期、3学期を中心に交流授業の機会を複数回計画し、両校の児童の学習を通しての交流を主たる目的に実施した。両校児童も交流の機会を複数回持つことで、お互いの理解に繋がっている。 イ 学年会では、交流行事や合同の取組みの運営について児童数や児童の実態に応じて、子どもたちに力をつけられるように協議しながら取組みを行った。また、教材研究や授業の指導に関して、授業実践や単元計画、指導方法等进行交流し、自校の実践にいかすことができた。 (5) 情報を吟味し精査する力の育成 ア 情報モラル研修会 オンラインゲームやインターネットトラブル等に関する知識・理解が深まり、ネット上での様々な事象に敏感に反応、軽微なトラブルでも認知できる情報モラルの力が高まった。啓発講演を実施する中で呼びかけは行ったが保護者の参加者数は少なかった。授業時間内に実施するため、仕事の関係で忙しい時間帯と重複しているため、保護者のニーズに添った啓発活動を検討する必要性もある。 イ 情報モラルアンケート アンケート結果から、各校・学年の特長的な課題等が明確になった。結果については、校内だけでなく、学級懇談会等で保護者にも伝え、家庭と学校の両輪で指導することを啓発した。今後も実態を正確に把握するためにアンケートを実施していくが、1年前のアンケート結果は参考にならないほどデータは常に変化している。定期的に調査等を行い、実態を正確に把握するとともに学園・学校としての対応につなげていきたい。
家庭、地域との連携、情報発信	4 家庭、地域との連携・情報発信 (1) 弥栄学園運営協議会との地域連携・教育環境づくりを進める。 (2) 弥栄学園便り等による広報活動を積極的に行う。 (3) 学校行事等において学校支援ボランティアを積極的に活用することを通して交流を深める。	(1) 運営協議会との連携 弥栄学園運営協議会の活動が4年目となった。コロナ禍での制限も緩和され、学園の取組みを参観していただく機会が通常に戻りつつある中、熱心に参加していただき、地域の方として学校の外から見た弥栄学園について貴重な意見を頂くことができた。学園の活動や教育目標に対してさらなる理解や協力を得るために、啓発活動と同時に運営協議会と学園PTAと連携した活動にも取り組んでいきたい。

		(2) 広報活動 こども園、各学校が、たよりやホームページで取組みを発信するとともに、保幼小中一貫コーディネーターが学園だよりの発信や弥栄学園運営協議会の取組みをコーディネートして、広く学園の活動について啓発を行った。 (3) 学校支援ボランティアの活用 地域のボランティアの方々に、こども園や各学校の教育活動や交流事業に快く多くの支援を頂くことができた。子どもたちと地域の方々との交流や学園に対する理解が深まり、学園・家庭・地域が連携した「横の連携」を深めることができた。
--	--	---

4 今年度の成果と課題 改善方策

成果と課題	改善方策
1 弥栄学園経営及び進行管理 本学園規模に応じた組織改編により、個々の役割が明確になり、効率化・合理化につながっている。コロナ禍を経て、規制が大幅に解除された本年度はそれぞれの組織が見通しを持って計画的・主体的に活動等を実施することができた。 活動計画を円滑に進めることは大切だが、それを目的化することのないように経営会議で進行管理する必要がある。 令和6年度の学校適正配置により、1園1小1中の保幼小中一貫体制に向けて、既存の弥栄学園の組織体制について、改編案の作成、新しい保幼小中一貫教育の在り方について調整することができたが、組織体制が大きく変わる中での学園経営・運営について更に調整を進める必要がある。 2 発達段階に応じた系統的な指導・活動 「家庭学習頑張り週間」等は、本学園の柱となる活動でもある。それらは各校での実施となるが、学園規模を生かして今後も丁寧に一つ一つの活動を進めていきたい。 コミュニケーション力の向上と合わせて、児童・生徒同士の「教え合い」「学び合い」を意識した授業改善や授業形態の工夫が進んできているので更に深化させていく必要がある。 3 教育活動の連続性・一貫性・協働性 学園規模や立地条件等から交流連携活動は本学園の特長の一つでもある。教育活動の連続性・一貫性・協働性につながったものとする。前例踏襲型の活動とならないようにねらいと目的、中学校卒業時（第3期）の終わりの「生徒の姿」を共通理解しなければならない。 4 家庭、地域との連携・情報発信 こども園、小学校、中学校がそれぞれに、たよりやホームページで各校園の取組みを発信するとともに、学園ニュース（教職員向け）、保幼小中一貫教育だよりの（保護者、地域向け）や学園ホームページでタイムリーに情報を発信し、学園の動きを広報している。また、学園のリーフレットを作成し、保護者や弥栄学園運営協議会、その他地域の方々に配布したり、弥栄学園運営協議会で学園の活動を紹介したりして、弥栄学園の活動についての啓発を行っている。	1 学校適正配置により1園1小1中の体制に対応した組織作りと運営が必要となる。経営会議が主体となり、現状の組織改編、運営・活動方法、位置づけ、活動目的等を再確認しながら年間を通して新しい組織の微調整などを進める。 2 1園1小1中の形態になる中、園小、小中の系統的で一貫性のある指導が非常に重要となってくることを踏まえ、系統的な指導に係る資料（授業改善に係る資料等）の再構築、改定を行っていく。 また、ICTを活用した授業改善、家庭学習の在り方、活用方法などについて利活用を推進する。 3 今後も継続的な情報発信と広聴活動（アンケート調査等）を積み重ね、考察を繰り返すことにより教育活動の成果・課題等を明らかにし、必要な改善を図っていく。

令和5年度 久美浜学園保幼小中一貫教育報告書

1 「目指す子ども像」、教育目標

〔教育目標〕

「ふるさとを愛し、意欲的に学び、やさしい心を持ち、根気強く努力する子どもの育成」

〔目指す子ども像〕

(知) 意欲的に質の高い学力を身につけようとする子ども

(徳) 自ら正しく判断、行動し、豊かな心をもつ子ども

(体) 心身を鍛え、粘り強く最後まで、協力して取り組む子ども

2 保幼小中一貫教育として解決を目指す重点課題、取組の柱とする内容

(1) 中期的な展望(取組の見通し)

年度	教職員の意識	学力	ギャップ(不登校)
R 3 (6年次)	・新学習指導要領への対応 ・学力向上の方策を全職員で検討	学力向上試案の策定 (教育課程会議)	接続期の校種間連携充実 事例研の継続
R 4 (7年次)	学力向上の方策を全職員で検討・実践 新学習指導要領で求められている資 質・能力の育成	学力向上方策の実践、 改善(全学年)	学校に起因する不登校 人数の減少 事例研の継続
R 5 (8年次)	学力向上の方策を全職員で検討・実践	学力向上方策の実践、 改善(全学年)	早期対応、情報共有の 徹底(全職員の共有)
R 6 (9年次)	↓	府・全国学力テスト・調 査全学年平均以上(学園)	↓
R 7 (10年次)	久美浜学園保幼小中一貫教育の継続 した取組の整理とまとめ 次の10年を見通し新たな取組の構築	府・全国学力テスト・ 調査全学年平均以上 (全学校)	早期対応、情報共有の 徹底(全職員の共有)

(2) 重点目標

「意欲的に生活・学習に取り組む子どもの育成」～子どもの実態や系統性を踏まえた指導～

(3) 指導の重点

『学力向上』①基礎・基本の徹底 ②主体的に学ぶ力の伸長(授業づくり) ③家庭学習時間の確保

(4) 取組の柱

- ア 10年間(就学前から中学校卒業まで)の幼児児童生徒の成長発達に全教職員で責任をもつという意識の向上
- (ア) 久美浜学園全教職員がチームとして、みんなでやるという協働意識を醸成する。(対話と理解)
- (イ) 目指す授業として、学習指導要領に示された「主体的・対話的で深い学び」を実現する。その上で、学園テーマとして、「主体的に学ぶ力の伸長」を設定し、すべての教職員で幼児児童生徒が自らの主体的に学ぶ力を伸ばすための教育活動を進める。
- イ 各校園所における規範意識の醸成を基盤とした落ち着いた学校(園)づくり、授業づくり
- (ア) 生徒指導の三機能(自己決定・自己存在感・共感的人間関係・安全安心な風土の醸成)を生かした「わかる授業」と「学級経営・特別活動の充実」により、規範意識を醸成し、学ぶ意欲を育てる。
- (イ) 各学校の重点研究をもとに、各学年単位をベースに授業研究を進める。特に「主体的に学びに向かう力」を育成する授業づくりの取組を進める。
- (ウ) 基礎・基本を徹底し、基盤となる力を十分付けきるとともに、当たり前のことが当たり前にできる雰囲気づくりを進める。
- ウ 子どもの交流行事並びに教科指導交流の推進による行動連携強化
- (ア) 共に学ぶ意識を育て、子ども同士を結び付ける保幼小、小小、小中における交流行事・授業
- (イ) 豊かな教科指導を目指す指導交流(保幼小連携、小小連携、小中連携)
- エ 保護者、地域とともに「久美浜を支える人づくり」の視点に立った取組を進める。
- (ア) PTA、学校運営協議会、地域学校協働本部事業との連携
- (イ) 家庭学習時間の確保に向けた連携

3 保幼小中一貫教育の具体的な内容と評価

項目	内容	評価 (実践の過程・幼児児童生徒の姿・教職員の見方等)
幼児児童生徒の実態や課題、目指す子ども像や目標、方針等の共有方策	(1) 経営会議を中心に組織的且つ丁寧な、実態や課題、目標、方針等の共通理解を図る。 ア 年度当初の学園全体会での提起と全体研修会での全教職員による協議を通して、共有を進める。 イ 夏季全体研修会、園所参観、市授業研究会等の取組を通じて、教職員同士の「理解と対話」の充実を図る。 (2) 保幼・小・中で共通指導内容を確認し、PDCAで改善を図りながら共通理解を深める。	○久美浜学園7校園所が1つの目標に向かう中で、ICT活用や取組の工夫を行い、教職員及び児童生徒園児の交流を確実に実施し、「理解と対話」の継続を図り目標や方針等を共有することができた。 ○園所参観とその後の交流会を実施することができた。 ○市授業研究会の取組を通して、会議や部会の中で授業研究を深め共有することができた。 ○共通指導事項を確認し、指導を継続していくことができた。今後も、具体的な実践共有の場である連携部会、領域部会の運営のあり方等を改善し、引き続き目標やめあて、指導内容を振り返りながら進める。
就学前から中学校卒業までを見通して一貫した指導、教育課程	(1) 子どもの育ちと指導の一貫性を目指した教育課程編成 ア 考えを深め、コミュニケーション能力を高める学習の推進 イ 郷土への愛着と誇りを持ち、人とつながる力を育てる学習の推進 ウ 保幼小中の接続を意識した教育課程編成 (2) 重点指導 ア 学力向上 (ア) 授業規律の確立 (イ) 基礎学力の定着と活用力を育てる授業づくり イ 不登校の解消 (ア) 規範意識の醸成と基本的生活習慣の確立 (イ) 学級活動の充実と児童会・生徒会活動等自主活動の活性化 (ウ) 自尊感情の高揚 (エ) 保幼・小・中の連携強化 ウ 今日的課題（ICT機器の効果的で安全な取り扱い） (ア) 「ICT活用及び情報モラル」に係る教育の推進 (イ) 人権教育の推進 (ウ) 「リーディングDXスクール事業」指定研究からの学びの共有	○市授業研究会の取組を通して、学園テーマ「主体的に学ぶ力の伸長」を各校で追求し、1人1台端末、ICTを活用した授業づくりを進め、各小中学校での研究成果を交流し共有することができた。 ○ICTを活用した授業づくりについて、教育課程会議で「情報機器リテラシー及び情報モラル指導計画」を作成した。どの段階で、どのような内容で、どのように指導するか、一定の指針を示すことができた。 ○学園内2校による「リーディングDXスクール事業」指定研究で、目指す授業づくりのイメージが広がった。市授業研究会、校内研究会での深まり、ホームページでの取組発信によって学園内での学びと共有が図られた。 ○市授業研究会の取組として3園所の5歳が京丹後市の歌「恋い来い丹後」の創作ダンスをつくり発表した。その作成と練習の過程を「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」としてまとめ掲示物として提示した。その後の子どもの自立や成長につなげる重要な視点を具体化した事例として大変意義のあるものとなった。 ○保幼小連携部会で、アプローチプログラム、小1スタートカリキュラムの実施状況を検証、改善を図った。 ○「資質・能力ルーブリック」の活用等、付けたい力の系統性を検討した。更に重点化の取組を進めていく必要がある。 ○久美浜学園「身に付けたい言語能力表」や小中共通指導事項を確認・検討して取り組んだ。 ○PTA・保護者を巻き込んだ久美浜学園共通の「家庭学習がんばり週間」の取組を進めることで、学習習慣の定着を進めた。 ○教育課程会議では家庭学習時間の確保、養護部

		会ではメディアに係る0期の指導内容を含む保健指導系統表の作成（養護教諭による年長児への出前講座の実施）、生徒指導部では情報機器に関するアンケートを行い、メディア・コントロールについての指導を、学園全体で進めた。 ○教育相談部会では、SCを中心とした事例研修会を実施し、未然防止に向けた具体的方策を検討した。 ○学校生活の充実感を味わわせることや基本的生活習慣の確立を各校で図ること、教育相談部における事例研を通して、不登校の未然防止、解消に取り組んだ。 ○情報機器の望ましい活用（情報モラル）のための講話学習を小3・4年生、中学1・2年生、中学3年生と、3回実施した。
幼児児童生徒、教職員の交流と協働	(1) 全体会、全体研修会、園所参観と分散会、領域部会、連携部会を中心とした教職員の交流と協働 ア 中学校卒業時の生徒の姿を常に意識した協議 イ 児童生徒の実態交流に基づく具体的な取組の推進 ウ 「主体的に学ぶ力の伸長」の系統性を意識した指導を目指す授業研究 (2) 学校、校種間をまたがった指導の推進 ア 小小連携、小中連携、専科教育、出前授業等、人的交流をもとにした協働 イ 振り返りスタディ等指導面での協働 (3) 幼児児童生徒の行動連携 ア 保幼の連携 イ 保幼小の連携 ウ 小小連携 エ 小中連携、保幼中連携 (4) 市授業研究会に向けての取組推進による交流と協働	○市授業研究会に向けての授業研究が、各校で推進された。各連携部でも授業参観を繰り返すとともに、授業内容が検討され、教職員の交流と協働が一気に加速した。 ○夏季全体研修会では、非認知に係る著名な講師を招聘し、全員で話を聞くことができ、「主体的な学び」を進める授業のあり方についての研修を進めることができた。 ○各校の授業研究会の案内を発出し、相互参観ができた。また、「リーディングDXスクール事業」指定研究の校内研究会では、学園内の教員も参加し、各校の研究推進に活かされた。 ○保幼小連携では、年長児メディア指導を養護教諭が行うことができた。小学校のよりよい学校生活に向け、よい機会となった。 ○市授業研究会の発表として、3園所の5歳児が創作ダンスを創り上げた。質の高い5歳児交流となった。 ○小小連携授業では、5年能体験、1年かぶと山公園での生活科の授業、3、4年生のSNS講話学習が実施された。また、5歳児交流会も例年通りかぶと山登山が実施された。 ○小中連携では、合唱祭参観、部活動体験、授業体験を計画通り実施した。保幼小連携では、小学生の生活科へ5歳児を招待、体験入学を実施した。保幼中連携は、中学2年生の職場体験で園所へ多くの生徒が行った。また、中学校吹奏楽部が3園所でコンサートを実施し園児と交流した。 ○児童会・生徒会の合同会議は、対面による会議やリモートでの会議を年3回実施した。あいさつ運動やSDGsの取組を継続して行った。
家庭、地域社会との連携、情報発信	(1) 久美浜学園保幼小中一貫教育に係る目標、活動等の広報及び啓発 ア たよりの発行（月1～2回程度）、有線放送による取組紹介	○様々な取組を様々な機会を通じて広報できた。学園の取組をリーフレットにし、全戸配布をした。 ○町区長幹事会、各地区自治会、民生児童委員協議会等への取組説明が実施できた。学園活動への協力や周知を訴えた。

	イ リーフレットの作成、配布 ウ ホームページによる広報活動 (2) 学校運営協議会の取組を通じた「久美浜を支える人」の協議 (3) 地域学校協働本部事業の積極的な活用等による久美浜町民の学校教育活動への参加と積極的支援 (4) 久美浜学園PTA・保護者会との連携による家庭教育支援	○学校運営協議会は3回実施し、学園基本方針等の承認、活動状況の説明、意見聴取を行った。 3つの部会では、「久美浜を支える人づくり」「学校園所の応援団としての役割」「地域での子どもに関わる活動」等について、多くの意見をいただくことができた。 ○久美浜学園PTA・保護者会があることで、学園の全家庭で「あいさつ運動」「家庭学習がんばり週間」「教育講演会」等の取組ができた。
--	---	---

4 今年度の成果と課題 改善方策

成果と課題	改善方策
○まもなく一貫教育10年になる。取組の柱に従い、地道に取組を進めてきて、「教職員の協働」も「落ち着いた園所学校、授業」も、「校種間連携」も「地域とのつながり」も、一定できてきた。 ○市授業研究会の会場校（学園）として、教職員が丸となって活動することができ、授業研究等が進んだ。また、園所、学校、校種間の連携も進んだ。 ○文科省「リーディングDXスクール事業」指定研究校が学園内に2校（小1、中1）あり、1人1台端末、ICT環境の効果的活用、授業改善等が進んだ。 ○新型コロナウイルス感染症5類移行に伴い、感染防止に配慮しながら、様々な取組を実施することができ、それぞれの取組のねらいを達成することができた。 ○4PTAと3園所の保護者会と一緒に活動でき、学園PTA・保護者会の基盤がより確かなものになり、全学園での取組が行われた。 ○経営会議の方針のもと、企画運営会議が事業を運営し、教育課程会議が学習指導等に関する内容の具現化を図り、相互に共有して進める運営の機能化を図ることができた。 ○共同事務室ができ、会議の定例化、各種業務の見直し等を進めることができた。 ○小学校への接続の1つの視点としても、年長児メディア指導を実施することができた。 △学園の児童生徒の課題として、不登校の増加がある。部会での事例研修・具体的な取組の協議等、地道な取組の継続が必要である。 △連携部会の取組は回数に限られている中で、ミッションを成果が見えるところまで高めることは難しい。	・これまで積み上げてきた保幼小中教員の「対話と理解」をベースに、保幼小中一貫教育推進計画の共通理解を図る。また、学校園所公開や交流会を引き続き進める中で、保幼小中に係る共通視点を明確にした指導方法等の継続性について、研修及び協議を行っていく。 ・「リーディングDXスクール事業」指定研究の成果を、学園全体に波及させ、授業改善を図る。 ・学力向上について、拡大教育課程会議において、CBTの結果分析を行い、児童生徒実態や課題を改めて共有し、具体的な取組へ落とし込むことを通して、検証と実践を積み重ねていく。 ・市授業研究会の取組の成果を明確にし、「主体的・対話的で深い学び」「主体的に学ぶ力の育成」に基づく研究推進を進める。 ・授業研究の充実を目指し、教育課程会議が主となり学園の研究推進を行い、連携部会が具体的な授業づくりについて協議ができるよう、計画的に運営する。 ・児童生徒の生徒指導上の課題や不登校の状況から、学園全体での醸成すべき視点（非認知能力等）を見出す。また、肯定的評価を基盤として、学園の教職員の指導観をすり合わせ共通化していく。 ・未然防止について、事例研修や入学説明会への講師招聘等、スクールカウンセラーの具体的な活用を図る。 ・校種間での情報連携や家庭支援連携を進め、不登校の未然防止や早期対応に努める。

(別紙様式2)

令和5年度学校評価自己評価報告(こども園)

こども園名〔京丹後市立峰山こども園〕

こども園経営方針(中期経営目標)		前年度の成果と課題	本年度こども園経営の重点(短期経営目標)
“元気いっぱい 笑顔いっぱい こども園 だ〜い好き!” 〜いっぱい遊ぼう 夢中になって〜		○保護者と連携を持ちながら、感染症対策に努め、様々な行事や活動の仕方・内容を見直し、着いた雰囲気の中で安定した園生活や活動を送りながら、教育・保育を進めることができた。 ○様々な実体験を通して、感動体験や学びに向おうとする姿勢、豊かな言葉力に繋げることができた。 ○園児が言葉で伝え合いながら主体的に協同活動を進めたことで、達成感や満足感を味わい自己肯定感に繋げることができた。 △開かれた園として、地域への情報発信の手段であるホームページの活用や、タブレットを使って保護者への配信を行ってきたが、更新や配信が十分とは言えなかった。 △職員の資質向上のための園内研修に努めてきたが、時間を確保するための体制を組むのが難しかった。	・園児自らが生活の仕方や健康に関心を持ち、規則正しい生活が習慣になるようにする。 ・様々な体験を通して、豊かな感性や言葉の力を養う。 ・「楽しいこども園」を基本に、遊びを中心とした活動の中で、コミュニケーション力や持続力、学びに向かう力を育てる。 ・園児の主体的に取り組む姿を認めながら、他者と関わる力を育てる。 ・保護者が安心して子育てができるように子育ての不安に寄り添い支援する。 ・地域に開かれた園として、情報発信に努める。 ・滑らかな接続ができるように、峰山学園(保幼小中一貫教育)の連携を深める。
評価項目	重点目標	具体的方策	成果と課題(自己評価)
保幼小中 一貫教育 の推進 (保幼小 接続)	『峰山学園』の連携 自己肯定感を持ち、自分の将来を展望し、共に学ぶ子どもの育成 ・意欲を持って自ら学ぶ子どもの育成 ・コミュニケーション能力の育成と適切な人間関係の育成 ・園小の円滑な育成	・峰山学園経営会議を通して園児・児童の実態を交流する中で、共通の目標を持ち、ことばによる伝え合いを軸とした教育・保育を進める。 ・幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を踏まえ、幼児期から中学校まで一貫した指導を共有する。 ・人と繋がる楽しさを味わい、ことばで伝え合う力を育む。 ・「保幼小の架け橋プログラム」を反映しながら、小1スタートカリキュラム・アプローチカリキュラムの検証を私立園や学園担任会と行い、教育・保育内容の理解を深める。	○経営会議の中で、非認知的能力や言葉の力の育成、主体的な活動の実践など、園で大切にしていることを伝え連携することができた。 ○学園担任会参加時間を十分に確保したことで学校と園の距離が近くなり、連携を密にすることができた。また、互いの活動や学びをより深く知り、園の教育・保育に活かすことができた。 ○アプローチカリキュラムを再度見直し、それをもとに実践に反映することができた。 ○学園で実施している「おはようあいさつ運動」を保護者会協力のもと、こども園でも同日に実施し、一貫教育の連携を深めることができた。 △様々な研修会では、開催時間や体制上、管理職のみの参加となることが多く、保育教諭が公開授業を参観したり、事後研修で話し合ったりして直接学ぶ時間がもてず、報告のみで終わってしまった。

教育課程	・感動する体験や伝統行事などを大切にし、豊かな感性やコミュニケーション力を養う。 ・基本的な生活習慣や態度を育てる。 ・自分の思いや考えを表現したり行動したりできる力を養う。 ・日常的に園内外での安心・安全に過ごそうとする姿勢・態度を養う。	・園内外での感動体験や発見などを通して、考えたり工夫したりしながら生活や活動を行う。また、地域の伝統行事など、人と繋がる楽しさを感じられるような取り組みを進める。 ・挨拶を通して、人と関わることの心地よさを感じさせるためにあいさつデーを設定したり、生活点検表などを作成したりして、生活習慣を整えていく。 ・園児が主体的に話し合ったり、協同的な活動を進めたりできるように計画を密にする。 ・園児の生活や発達状況を把握し、個々に合った助言や援助・指導を行う。 ・園外保育を通して、実際に交通ルールを体験したり、学んだりしながら、園内では、生活や遊びを通して、集団でのルールを園児と考えたり、知らせたりして、様々な場面での危機管理について学ぶ。	○様々な実体験を通して、考えたり工夫したりしながら活動を進め、個々の子どもの思いを受け止め関わることで、考えたことを表現する力や言葉の力が育ってきている。 ○一日の始まりを元気な挨拶と捉え、保護者会と協力のもと、たくさんの園児や保護者に挨拶の心地よさや人との関わりのきっかけを伝えることができた。 ○園児が取り組む活動や行事のあり方を、個々の生活や発達を大切にしながら見直すことで、主体的で協同的な活動が進められた。 ○期間を決めて生活点検を行い、生活リズムを整えるきっかけとなった。 △交通ルールや安全意識について、絵本や紙芝居などで知らせてきたが、散歩などで実際に歩いてみる体験が、交通量の多さや気候の変動(暑さや雨など)で十分に持つことができなかった。
子育て支援	・子育ての不安に寄り添い、安心して子育てができるように支援する。	・保護者の思いや不安な気持ちに寄り添いながら、相談がしやすい雰囲気をつくり丁寧に対応をする。 ・園開放や園庭開放・懇談会など、保護者同士が交流し合える場を提供する。 ・園児や家庭の実態を把握し、保護者との連携を丁寧に行い、個々に合った支援や対応をする。	○送迎時に、職員から率先して園の様子や家庭での悩み・困り感など、話を聞く機会をもつことができた。 ○園の活動を実際に見たりできる園開放や、保護者同士が交流できる園庭開放を計画的に作るなど、保護者が交流する場をもつことができた。 ○子育て実態について話し合い、検討を進めながら、保護者の思いや園児の実態に合わせた関わりや関係機関との連携を行い、子育て支援を進めることができた。
研修 (教員の 資質向上・ 人権教育)	・園内研修の充実を図り保育教諭の資質向上(人権を含む)に努める。 ・保育支援システムや ICT の活を効率よく進める。	・職員同士で保育の振り返りや意見交流などの時間をもったり、指導力や関わり方など学び合ったりするためにドキュメンテーション・公開保育・担任会・事例研修などを行う。 ・保育支援システムを活用し、職員会議や学年会議等の教育・保育の実践に活かす。	○様々な公開保育や研修を受け、報告を行うことで、個々の捉えや関わりなど振り返る機会となり、資質向上に繋がった。 ○人権教育について、振り返りシートを活用して意識調査を行い、結果を職員間で共有し、学び合うことができた。 ○タブレットを使い、各担任のドキュメンテーションや日々の活動のまとめを見ることで、研修時間の縮小や教育・保育実践の参考となった。
次年度に向けた 改善の 方向性	・園の取り組みを発信しながら、私立園や小中の連携を深め、学園の目標に合った実践に繋げていく。 ・実体験を通して感動や達成感を味わい、主体的な言動(言葉や行動)ができる園児を育てるための教育・保育を進めていく。 ・保護者や地域の方と繋がり、日々の生活や活動・行事について工夫し、開かれたこども園を目指す。		

(別紙様式2)

令和5年度 学校評価 自己評価報告(こども園)

こども園名〔京丹後市立大宮こども園〕

こども園経営方針（中期経営目標）		前年度の成果と課題	本年度こども園経営の重点(短期経営目標)
人との関わりや体験を通して、心豊かでたくましく、生き生きと遊ぶ子どもの育成 ・心も体も元気な子どもの育成 ・のびのびと遊び、感性豊かな子どもの育成 ・人の話を聞き、自分の思いや考えを言える子どもの育成 ・自分も友達も大好きで、思いやりのある子どもの育成		○コロナ感染防止を図りながら、小1プロブレム解消のための保幼小の連携活動やアプローチプログラムに基づいた教育活動を進め、小学校への期待感を膨らませるとともに、心構えを育てることができた。 ○同年齢や異年齢で様々な体験活動を通して、発見や感動を豊かに言葉や体で表現するようになった。また、友達と夢中になって遊び、園児同士で遊びを進めていく姿が見られるようになった。 △コロナ感染防止や登降園方法の変更等から、保護者との直接会話の機会が減り、即日の子育ての連携がタイムリーに実施できなかった。	・基本的な生活習慣を身に付け、見通しをもって主体的に生活や活動ができる環境を工夫する。 ・恵まれた自然環境の中で、人やものと関わりながらたくさん体験や伝統的な行事、様々な文化や生活の仕方に触れ、表現力や思考力の芽生えを培い、豊かな感性を育てる。 ・友達と関わり、ルールや規律・善悪の判断など、生活や遊びを通して規範意識の基礎を育てる。 ・友達との関わりを通して、互いの思いや考えなど違いがあることに気づき、折り合いをつけながら互いの良さを感じ、『みんな違ってみんないい』『自分も友達も大好き』と思える豊かな心を育てる。
評価項目	重点目標	具体的方策	成果と課題（自己評価）
保幼小中一貫教育の推進 (保幼小接続)	・大宮学園の教育目標を踏まえ学園の方針に基づき、取り組みを進める。 ・小学校との連携を密にし、スムーズな接続を図る。	・大宮学園の『人権教育・ことばの力の育成』の取り組みを、保育参観や園内研修で理解を深め、実践につなげる。 ・学園内での授業研究会に参加したり、こども園の公開保育を行ったりしながら、職員間の資質、能力の向上につなげ、10年間の滑らかな接続を図る。	○学園の方針を園内で共通理解するために学園コーディネーターを招いて研修会を開き、学園の目標や園の教育・保育への実践に向けての話し合いを進めるきっかけとなった。 ○乳幼児保育の大切さを理解してもらうために公開保育や実践報告などを行うことで、職員相互の学びとなり10年間を見通した指導へのつながりの大切さが分かり合えた。
教育課程	・健康で安全な生活に必要な習慣や態度を身に付ける。 ・様々な環境に関わり、感動体験を通して、豊かな感性を養う。	・基本的な生活習慣が身につくように、時間を決めたり、園児と話し合ったりしながら、生活や遊びを進める。 ・恵まれた自然環境や様々な人とのかかわりの中で、実体験を通して、心を揺さぶる体験や感情体験の充実を図る。 ・様々な体験を通し、驚きや感動を自分なりの言葉や表現で伝えることができる環境を作る。	○年間を通して、毎日時間を決めてサーキットなどを行うことで生活リズムや持ち物の始末などの習慣や態度を身につけることができた。また、時計を見て過ごしたり活動するなど園児同士で声をかけ合ったりして行動する姿が見られるようになってきた。 △自然に恵まれた地域であるが、交通量の多さからの安全確保が難しく、園外に出る機会が少なかった。 ○園内の環境築山を利用し、アスレチックをつくり全身を

	・自分の思いや考えを伝えたり、人の話を聞いたりする豊かなコミュニケーション能力を育てる。	・日々の生活や遊びについて、伝えることや伝わった時の喜びを感じることができるよう個々に合った振り返りの時間や場をもつ。 ・園児一人一人の良さを認め、主体的に展開できる教育・保育を進める。	使った遊びができるように進めていくことで感情・感動を言葉で表現する園児が増えてきた。 ○様々な体験から「話したい」「伝えたい」という気持ちが膨らみ、振り返りの時間を利用して発言の場をもち、友達に伝えることの嬉しさを感じる園児が増えてきたが、上手く伝えられず友達や保育教諭に補ってもらい話すことを経験する園児もいる。 ○一人一人の興味のある活動（遊び）を知り、それぞれに合った環境を園児と一緒に準備することで主体的に行動しようとする姿が見られてきた。
子育て支援	・保護者の気持ちに寄り添い、安心して子育てができるよう支援する。 ・一人一人の個性を大切にしながら集団生活の中で育ち合えるよう支援を園全体で進める。	・日々の送迎時や個人懇談、一時預かり保育などで子育てについて話したり、悩みや不安、ストレスを抱えている保護者の相談にのったりしてリフレッシュ支援を行う。 ・園での誕生会で、保護者に日常の感謝の気持ちを込めて「子育てがんばったで賞」を贈呈し、共に楽しんでいけるようにする。 ・園児一人一人の特性に応じた支援や配慮を全職員で共通理解し、園児と共に温かい人間関係づくりに努めながら、互いを認め合う肯定的な関係をつくっていく。	○話しやすい雰囲気をつくり、温かく迎えることで信頼関係を築くことができ、共に子育てについて、思いを伝え合うことができた。 ○誕生会で園児のみを祝うのではなく、保護者の今までの頑張りに対して、手作り頑張りカードを送ることでより気持ちに寄り添った子育て支援につながった。 ○全職員で日々個々の状況を伝え合い、同じ対応をすることで園児にも多国籍児・医療ケア児・支援児また、異年齢交流等で言葉を交わし、お互いを認め合ったり、思い合ったりする姿が見られるようになってきた。
家庭・地域との連携	・家庭や地域に開かれた園づくりを目指す。 ・地域の環境・文化・人との出会いや体験を通して親しみがもてるようにする。	・保育支援システムを利用して園生活の様子や園の教育・保育をタイムリーに情報配信し、地域の園としての活動・行事を進める。 ・学校ボランティアや食いく先生など、地域の人と自然体験や文化に触れることができるような連携を進めていく。	○保育支援システムやホームページを利用して園の教育・保育について理解を深めてもらうために発信してきたが、内容の組み立てや検討の時間を確保するのが難しかった。 ○地域の人（食育・田んぼの先生、読み聞かせ）地区のゆかりのある人（鯉のぼりの職人・地区の絵画展など）との文化交流をもつことで園児を真ん中におき、保護者と地域をつなげるきっかけとなった。
次年度に向けた改善の方向性	○朝の挨拶が一番大切であり、大宮学園の取組「ハイタッチ モーニング」を定着させ、心を育成するための教育活動の充実を図る。 ○自他を認め、「みんな違ってみんないい」「自分も友達も大好き」と思える子どもの育成を図る。 ○直接体験からの感動を経験し、ことばの力の育成に努める。 ○園の教育・保育を広く理解してもらうために情報を配信する。 ○地域への愛着がもてるように地域の人との自然体験や文化に触れる機会を計画的にもつ。		

(別紙様式2)

令和5年度 学校評価 自己評価報告(こども園)

こども園名〔京丹後市立網野こども園〕

こども園経営方針(中期経営目標)		前年度の成果と課題	本年度こども園経営の重点(短期経営目標)
『園児自らが主体的に環境に関わり、心豊かでたくましく生きる力を育てる。』 (あ)明るく元気で主体的に活動する子どもの育成 (み)みんななかよく思いやりのある子どもの育成 (の)伸び伸び生き生きやりぬく子どもの育成 <テーマ> 『どきどき わくわく きらっ！ ひとりひとりがかがやいて』		○コロナ禍ではあったが、小学校との連携交流はできる限り積極的にアプローチしていくことで、幼児期の教育・保育について理解を深めたり、学習発表会リハール等を見学したりすることができた。また、アプローチプログラムや非認知能力の育成について、自園で作成した実践シートを活用しながら園内研修を積み、全職員で検証し共有することで、全年齢の遊びや学びにつながることができた。 ○一人一人のウェルビーイングを高めていくことを念頭に保護者との面談を繰り返したり、こどもクリニック等に同行したりする等、個別最適な支援を最優先とした教育・保育を進めたことで、主体性や協同性を伸ばすことができた。 ○家庭生活や生活習慣の不安定さにより、園児の内面に抱えている不安感等が大きく、園だけでは支え切れないこともあったが、保護者との連携を密になしながら、一人一人の成長を共有し、園児らしさやよさを受け止め、愛情豊かな関わりをすることができた。 △教育・保育に対するベクトルを揃えるため、職員間で協議を重ねたが、引き続き園内研修やOJTを重視し、人材育成や質の向上を図る取組みを進めたい。	・非認知能力の育成について、網野学園での取組や研修等を踏まえ園でも共有し、実践や検証をしていく。また、アプローチプログラムや『幼児期の終わりまでに育って欲しい姿』をもとに、さらに小学校との連携を密にしていく。 ・乳幼児教育・保育の中で意識したいSDGsの項目を選定したり、捉え方を見直したりして、園全体で取り組めるようにする。 ・園児やその背景にある家庭を支援するため、保護者との連携を深めるとともに支援体制を充実させ、一人一人のウェルビーイングを高めることを目指す。 ・健康的な生活習慣の確立に向けた取組と園内外での安全指導や安全対策を考慮する。 ・職員一人一人が人権意識をもち、同僚性やOJTを積み上げ、質の高い教育・保育につなげる。
評価項目	重点目標	具体的方策	成果と課題(自己評価)
保幼小中 一貫教育 の推進 (保幼小 接続)	・「網野学園」の教育目標をもとに、基本方針や取組内容を理解しながら教育・保育を進める。(確かな学力の育成・規範意識の醸成・豊かな人間性・非認知能力の育成等) ・園児と児童の交流の機会や保育教諭と教師の研修の場を重視し、相互理解を強化する。	・網野学園経営計画を全職員で共有するとともに、第2期『未来を拓く学校づくり』のプランを理解し、研究の方向性を確認しながら、教育・保育を進める。 ・園児と児童の交流や教育内容の共有を深め、幼小の職員同士でアプローチプログラムや非認知能力の育成を検証したり取組みを進めたりする。	○網野学園経営会議や全体研修会参加報告等を通し、学園で育成したい非認知能力について職員間で共有した。また授業研究会に参加し、意見交流ができたことで園での教育・保育の言語化や明文化する等、実践に向けた取組が定着した。 △園児と児童との交流では内容を工夫し、もう少し互恵性のあるものを考えていきたい。また、アプローチプログラムや非認知能力についての視点を重視し、実践検証をしたり取組を深めたりしていく。

教育課程	・『包み込まれているという感覚』を醸し出し、園児が楽しい園生活を過ごせるようにする。 ・主体的・対話的な遊びをくり広げられるような環境づくりをする。 ・人とつながり合うことの喜びを味わえるようにする。	・園での温かい雰囲気と生活習慣の確立を基盤に、安心安定した園生活になるよう園児と保育教諭等の信頼関係を築く。(心の居場所づくり) ・遊びの中の学びを見取りながら、集団の中で一人一人が生き生きと園生活を過ごすことができるような環境を整え、実践する。(園生活の充実) ・園児が主体的に協同的な遊びを展開したり、探求心をもって遊んだりすることができるような環境の工夫や援助をする。(遊びの充実) ・友達と一緒に過ごす中で心地よさや友達のよさや違いを感じ、受け入れたり思いを伝えたりすることができるような関わりを大切にする。(同年齢・異年齢児との関わり、言葉でのやりとり、遊びの発展等)	△園では温かい雰囲気づくりや一人一人に応じた配慮を心掛けているものの、生活習慣においては、それぞれの家庭で認識の差があった。また、保護者の多様性を理解し、対応する難しさも感じた。 ○日常の遊びを重視し、そこからつないだ運動会や発表会の取組を通して、園児の生き生きとした姿が見られるようになった。 ○保育者が遊びや行事を見通し、園児が自己決定をしたり、やり切ろうとしたりする雰囲気をもつ等、環境の工夫が園児の主体的な遊びの充実につながった。 ○集団遊びや活動の中で、友達と一緒にする楽しさを感じたり、受け入れたりすることができるようになってきた。言葉での表現が難しい場合は、保育者が仲介することで気持ちが伝わった喜びを感じたり、相手の思いを汲んだりする姿につながっていた。
子育て支援	・家庭と連携し、基本的な生活習慣の確立を目指す。 ・未就園の親子を対象にこども園を開放し、子育ての安心安定を図る。	・保護者に園児の様子を知らせる(園だより、クラスだより、保育支援システムによるお知らせ、懇談会等)とともに、『網野学園家庭学習頑張り週間』の取組を通して基礎基本の大切さを意識付ける。 ・「園開放日」や子育て支援センターで保護者同士が交流できる場をもち、子育て情報を交流したり、こども園での雰囲気を知ったりすることができるようにする。	○園児の様子は、送迎時の対話やホームページ、クラスだよりを中心として、より詳しく知らせよう努めた。網野学園の頑張り週間が定着し、家庭での読み聞かせや生活習慣の大切さを意識する保護者が増えた。 △支援センター内での情報は、園児の生活背景を知るツールになっているが、園舎が離れていることもあり、園開放の参加は少なく、保護者同士の交流には至らなかった。
研修 (教員の 資 質 向 上・人権 教育)	・テーマ研究や園内研修を通して、全職員の資質向上を目指す。	・網野こども園教育・保育計画の重要事項を全職員で共通理解し、個別最適で協同的な教育・保育の在り方を実践できるようにする。 ・人権意識をもちながら園児や保護者、職員同士が向き合い、関わり合うことを重視するとともに、教育・保育の質の向上を目指すため、園内研修を充実させる。 ・同僚性やOJTを最大限に活用しながら、職員の人材育成につなげていく。	○保育者が園児の多様性と一人一人の丁寧な見取りが大切であることを共通理解しながら、主体性を重視する教育・保育につなげている。 △教育・保育における人権意識の大切さは重視しているが、関わり方や捉え方は個人差にも係わるので、機会を捉えて研修をしていく必要がある。 ○教育・保育内容や園児理解、支援策について等、ベクトルを合わせて実践できるようOJTを重視してきた。
次年度に 向けた 改善の 方向性	・非認知能力の育成に係わって、園児一人一人に視点をおいて探るとともに、認知能力との相関性を可視化して職員同士で共有する。 ・子育て支援の在り方として、多様性を踏まえながら園児やその家庭に適切に提供できるよう、園内で作成した『こころの育ち指標図』をもとに、全職員の連携を強化し実践する。		

(別紙様式2)

令和5年度 学校評価 自己評価報告(こども園)

こども園名〔 京丹後市立丹後こども園 〕

こども園経営方針(中期経営目標)		前年度の成果と課題	本年度こども園経営の重点(短期経営目標)
- 生活や遊びの中で様々なことに心を動かし、豊かな園児を育む。 - 地域に愛され、保護者に信頼される園づくりを進める。 - 資質向上を目指し、職員同士が互いに学び合える組織づくりを進める。		○たくさんの人やものに関わる経験を重ねたことで、思いを伝え合う姿が見られるようになった。 ○小学校との連携では限られた時間の中での的確に伝えることの難しさは感じたものの、学園の経営会議や授業参観保育参観等で園児や児童の様子を把握し、情報交換することによってスムーズな接続につながった。 ○コロナ禍ではあったが、感染予防をしながら異年齢活動を進めたことにより思いやりの心やあこがれの気持ちをもつことができた。	「いっぱい遊んでつながって」 ～感じよう 伝えよう 伝え合おう～ - 様々な人やものに関わったり、自然と触れ合ったりしながら豊かな心を育てる。 - 異年齢児と様々な活動をする中で、わくわく・ドキドキの感動体験を積み重ねる。 - 健康で安全な生活や活動に必要な習慣や態度を養い、心身の健康や食習慣の基礎を培う。
評価項目	重点目標	具体的方策	成果と課題(自己評価)
保幼小中一貫教育の推進 (保幼小接続)	○『丹後学園』間の連携 ・学園の教育目標を踏まえ基本方針に基づき取り組みを進める。 ・保幼小の連携を密にし、就学に向け滑らかな接続となるようにする。	・学園の会議や授業参観などに積極的に参加し、育てたい力(ことばの力、自尊感情、自主性、コミュニケーション力)を全職員で共通理解できるようにする。 ・小学校と連携し、公開保育や授業参観等を通して、互いのカリキュラムについての理解を深める。 ・小学校への滑らかな接続をなるようアプローチプログラムやスタートカリキュラムを理解、活用し、実践につなげていく。	○経営会議や授業参観に参加することにより子ども達の実態を把握し支援や連携について参考となった。 △園の公開保育では、幼児教育への理解へとつながっていると感じたが、参加者が少なく話し合いを通しての学びにつながらなかった。 ○小学校との接続は、一年生だけの交流ではなく活動内容を職員間で検討し、進めたことで就学を期待しながら楽しむことができた。
教育課程	○保育、教育活動の充実 ・安心安定した中で、言葉や態度で表現しようとする園児を育てる。 ・様々な人やものに関わる活動を取り入れ、コミュニケーション力や思考力の芽生えを培う。	・園児や保護者一人一人の思いを受け止め、居心地のよい中で生活習慣が確立できるような環境づくりを進める。 ・園内外の人と関わる機会(絵本の読み聞かせ、交通教室など)を取り入れ、言葉の意味や響き、面白さや美しさなどを味わい、人に対する信頼感や思いやりの気持ちが持てるようにする。 ・生活や遊びの中で、自分の思いや考えを伝える、相手の話を聞く、受け止めるなどの体験を通して互いを認め合い大切にする心を育てる。	○登降園時や個人懇談等で保護者の思いや考えに寄り添いながら、園児の状況を共通理解することができた。また、幼児クラスは年2回夏・冬と生活点検表を活用したことで早寝早起きなどを意識する園児が増えた。 ○ボランティアによる絵本の読み聞かせを定期的にお世話になったり、警察官や消防士の防犯防災訓練を受けたりと身近な人と関わる機会をもつことで交流や地域への関心をもつことができた。 ○様々な活動をする中で、自分の思いや考えを伝えようとする園児の姿がたくさん見られるようになった。職員が仲立ちをすることにより少しずつ互いを受け止め、認め合う姿も見られるようになってきた。

教育課程	・心身ともに健康な園児を育成する。 ・豊かな心をもつ園児を育成する。 ・進んであいさつや返事ができる園児を育てる。	・朝マラソンやサーキットなど園児の興味や関心に合わせ運動を取り入れ多様な動きを経験できるようにする。 ・様々な人やもの、自然との関わりの中で、自然の不思議さや思い通りにならないもどかしさなどの感情体験ができるようにする。 ・毎朝玄関で一人一人を温かく迎え入れ、気持ちよく登園できる環境をつくる。	○巧技台や固定遊具を使った活動を継続して取り組むことで、体が目覚め、友達と一緒に体を動かし、集中して楽しむことができるようになってきた。 ○異年齢の行動を真似てやってみたり、一緒に遊んだりする中で、我慢や悔しい気持ち、友達の役に立つ喜びなど繰り返し体験を重ね、活動を発展させることができてきた。 ○毎朝、職員が園児や保護者を玄関で迎え、元気な声で挨拶を交わすことで心地よさを感じ、5歳児が進んで挨拶当番を決め、玄関で迎えてくれるようになった。また、自ら挨拶をする園児の姿がみられるようになってきた。
子育て支援	・保護者と連携し、それぞれの家庭に合わせた支援をする。 ・一人一人の発達の過程を考慮した支援をする。	・登降園時、クラス・個人懇談会等で、園児の良さや変容等を保護者に伝え、共に成長を喜び、子育ての楽しさや悩みを相談できる場や機会を設ける。 ・たよりや懇談会などで基本的生活習慣を身に付けることの大切さを伝え理解してもらえるようにする。 ・園での様子を伝えたり、保護者から発達の状況や家庭の様子を聞いたりしながら、園児の課題や今後の方向性について共通理解し、医療や療育など関係機関とも連携し、一人一人に合わせた支援ができるようにする。	○園の生活や活動の様子を動画・ドキュメンテーションなどで保護者にアプリを使って、タイムリーに知らせてきたことで保護者への報告・相談などの連携が進めやすかった。 △生活点検をする期間を設けたが、一時的には意識できるものの継続していくことの難しい家庭もある。 ○支援の必要な園児に対しては、保健師や医療などの関係機関と連携し、保護者と園内の支援の仕方について検討することで統一した支援や関わりをすることができた。
研 修	・園内研修の充実を図り、職員間の資質向上に努める。	・園児一人一人にあった指導をするため職員同士が園児の発達課題を共有し、援助や環境の工夫について話し合う機会をもつ。 ・公開保育や実践交流などを通して保育を振り返りながら、常に職員間で話し合える環境を作る。	○教育アドバイザーや作業療法士に保育や園児の様子を見てもらうことで、保育の振り返りや援助・環境について話し合い改善することができた。 △職員会議や日々の保育の振り返りをする中で援助や環境について話し合う機会をもつことはできたが、会計年度職員に細かく伝えることができない時もあり、実践につながらないこともあった。
次年度に向けた改善の方向性	・丹後学園での縦のつながりの中で、幼児教育の大切さや関わりの基本であることを伝えるために公開保育を行い、研修を重ねる。 ・生きる力を育むための基本的生活習慣を身につけることの大切さを知らせていく。 ・保育の環境や援助の仕方について、共通理解ができるように研修や話し合いを重ねる。		

(別紙様式2)

令和5年度 学校評価 自己評価報告(こども園)

こども園名〔京丹後市立弥栄こども園〕

こども園経営方針(中期経営目標)		前年度の成果と課題	本年度こども園経営の重点(短期経営目標)
1 生活に必要な習慣・態度を身に付け、健康な心と体を育てる。 2 自ら様々な環境に関わり意欲的に遊ぶ中で豊かな心を育てる。 3 身近な人や地域に関わり、思いやりの心や人権意識、規範意識の芽生えを育む。		○登園時、担任が玄関で受け入れたり、5歳児が弥栄学園で進めている「あいさつ運動」を玄関で行ったりすることで、多くの園児が元気に登園するようになってきた。 ○見たことや感じたことをいろいろな表現で伝える園児の姿を職員が丁寧に聞いたり、共感したりして園児の伝えたい気持ちを大切にすることができた。 ○マラソン、サーキット遊び、固定遊具を使った運動遊び等、季節に合わせた場所・決めた時間に行うことで、粘り強く挑戦する気持ちや達成感、充足感など、様々な感情を味わいながら豊かな心と体を育むことができた。 ○登降園時に園児の様子を伝えながら、保護者の思いや悩み・不安を共有することで、安心した表情に変わっていった。 △園児が友達と一緒に考え、活動や生活を進めていく中で、職員が「こうだろう」「こうなってくれたら嬉しい」という思いが強く、保育者主導となることがあった。	・一人一人が安心安定できる環境を整え、意欲的に生活や遊びに向かう中で基本的な生活習慣を身に付け、自立心を育む。 ・園児自らが周囲の環境に関わり活動する充実感を味わいながら、発達に必要な経験を積み重ね豊かな心を育む。 ・いろいろな人との関わりを通して、自分の思いや考えを伝えたり、人の話を聞いたりする等、コミュニケーション能力と思いやりの心を育む。 ・園児のあるがままの姿を温かく受け止め、自己肯定感を育み、相手の良さや多様性を認め合える柔軟な心を育む。 ・家庭、学校、関係機関及び、地域との連携を行い、充実した教育保育を進める。
評価項目	重点目標	具体的方策	成果と課題(自己評価)
保幼小中一貫教育の推進 (保幼小接続)	・弥栄学園の教育目標を踏まえ学園の基本方針に基づき、取り組みを進める。 ・小学校との連携を密にし、スムーズな接続を図る。	・弥栄学園の指導の重点の内容と園児、児童、生徒の実態を把握し、不登校の解消などについて取り組む。 ・弥栄学園の諸会議や公開授業・保育などに参加し、全職員でスタートカリキュラム、アプローチプログラムの検証を行いながら、実践を重ね、幼少期に育成する資質、能力を明確にして、小学校への滑らかな接続を図る。	○経営会議で各校園の園児、児童の様子を交流することで、園児の卒園後の言動や兄弟関係の様子が分かり、学園での縦のつながりを見取り、園としての関わり方を考えることができた。 ○学園の研修で公開保育と報告会を行い、実際に園児が活動を進める姿や保育者の言動(その関わり)を参観してもらい、乳幼児期の大切な関わりと捉え方など連携の仕方について検証ができた。
教育課程	・保育教諭との信頼関係を基盤に安心、安定の中で園生活を楽しみ、自分の力で行動する充実感を育む。	・園児一人一人の生活実態や年齢・発達に応じて、必要な支援方法を考えたり、異年齢との連携を進めたり、実践につなげる。 ・生活や遊びを通して、園児が保育教諭に見守られながら自己発揮したり、きまり(ルール)の必要性に気付いたり、気持ちを調整したりできるように関わる。	○保育教諭間での連携と保育環境(場での人数配慮、音量など)を工夫し合うことで少しずつ落ち着いた環境で生活や活動を進めることができた。 ○園児一人一人の気持ちの安定を図ることを第一に考え、園児の心を受け止め、関わることで気持ちに折り合いをつけたりすることができる園児が増えた。

	・ 基本的生活習慣を身に付け、見通しをもって行動する園児を育てる。 ・ 自分なりの言葉で表現したり、相手の話を聞こうとしたりする意欲や態度を育てる。	・ 一日が気持ちよく迎えられたり、送れたりできるように挨拶の大切さを知らせたり、人とつながる心地よさを感じられたりするよう対応に心がける。 ・ 友達と一緒に体操、マラソン、サーキット遊び等、体を使った遊びを積極的に取り入れ、健康な体づくりをする。 ・ 園内外の自然体験を通して、感じたことや考えたことを様々な方法で表現できるようにする。 ・ 園児や保護者に丁寧な挨拶や対応を行い、居心地のよい環境づくりや関わりを進めていく。 ・ 絵本などに親しみ、言葉の楽しさや美しさに気付き思いを巡らせ保育教諭や友達と同じ世界を共有し、心通わせる経験をする。	○ 登園してきた親子を5歳児の挨拶当番が玄関で出迎えた。元気な声の挨拶で迎えらる親子の表情は嬉しそう。朝から園は活気づき、年下の園児の良い手本となっている。 ○ 朝の体の目覚めや体づくりのため、年間を通して計画的に体操やマラソン・サーキットなどに取り組むことで園児同士や保育者と楽しみながら進めていくことができた。 △ 園児の言動を読み取り、すぐに対応できるように職員間で連携し、環境を構成することで感じたことを伝えようとする姿が見られるようになってきたが、個人差はある。 ○ 園児や保護者の話を丁寧に聞いたり、状況や様子を伝えたりするなど、安心して話ができる関係をつくることで落ち着いた園生活の進めていく園児の姿につながった。
子育て支援	・ 保護者の子育ての不安や悩みに寄り添い、喜びや楽しさを感じられるように支援をする。 ・ 未就園児の子育ての不安解消を図り、楽しく子育てができるように支援する。	・ 保護者が園児の成長に気付き子育ての喜びを感じられるように登降園時に園児の日々の様子を伝えたり、園だよりやクラスだよりの発行、保育支援システムで配信したりする。 ・ 保護者の就労や家庭事情、子育ての悩みや不安、ストレス等配慮し、悩みを抱えている保護者への相談にのったり、リフレッシュ支援を行ったりする。また、不適切な養育等が疑われる場合は、関係機関と連携し適切な対応を図る。(個人懇談、一時預かり保育等) ・ こども園や地域子育て支援センターで、未就園児の親子や、出産方に前の保護者が育児を楽しんで行えるように相談にのったり、遊んだりできるようにする。	△ 園からの情報を園だより・クラスだよりで伝えてきたが、その日の活動の様子などの写真や動画などで発信できる保育支援システムの利用することが少なかった。 △ 園児の家庭環境を考慮して、園内での面談を重ねたり、関係機関と情報を共有したりすることで連携をもつことができたが、中には寄り添い方に苦労した家庭もある。 △ 未就園児の保護者との関わりをもつ機会が少なく、思いや様子を知ることがあまりできなかった。
研修 (教員の資 質向上・人 権教育)	・ 園児一人一人の発達や家庭環境を考え、温かい関わりで支援できるよう職員の人権意識の向上を図る。	・ 園児のいろいろな姿を受け止めたり、寄り添ったりしながら自信を持って支援ができるような方法を学び合う。 ・ 日常的に保育内容についての話し合いの場を持ち、保育を振り返り、園児一人一人がよりよい関わりや支援が行われているかなど園内研修を行い、共通理解できるような職員会議を持つ。	△ 園児の姿の受け止めや寄り添いは、保育の考え方の違いなど、共有して同じ方向でできるように繰り返しの話し合いを進めてきた。柔軟な対応をすることの難しさも見られる時があった。 ○ 園児の家庭環境や発達を考慮し、園児を温かく受け止めることが出来る保育者が増えてきたことで、保護者の信頼を得ることができた。
次年度に 向けた 改善の 方向性	○ 園児一人一人を大切に職員の人権意識の向上を図り、意欲的に生活や遊びに向かう園児を育成する。 ○ 様々な地域の特色を教育・保育活動に活かし、豊かな心と健康な体を育む。 ○ 園の方針や活動内容など保護者や地域の方に理解してもらい、地域に根差した園づくりに努める。		

(別紙様式2)

令和5年度 学校評価 自己評価報告(こども園)

こども園名 [京丹後市立かぶと山こども園]

こども園経営方針(中期経営目標)		前年度の成果と課題	本年度こども園経営の重点(短期経営目標)
こども園教育目標 「元気な体と豊かな心、生きる力を持った たくましい子ども」 《元気 勇気 笑顔 つながれ仲間》 ～のびのび いきいき 仲間と共に輝いて～ 1 園児自らが興味関心をもって環境に関わり、心豊かでたくましく、生きる力を育てる。 2 人との関わりの中で、人に対する愛情と信頼感、人権を大切にする心を育てる。 3 相手の思いを受け止めながら、自分の思いや考えを表現する力を育てる。		○小学校の行事や中学生の職場体験等を通して、小、中学生と触れ合うことで親しみをもつことができた。また、中学校生徒会活動の一環としてのSDGsの取組を久美浜学園で共有し、共に活動を進めることで学園内のつながりを深めることができた。 ○身近な自然環境『わくわくひみつきち山』を活用し、散歩や運動遊びを多く取り入れたことにより、最後まで物事をやりきるたくましい園児の姿が見られるようになった。 ○ホームページや保育業務支援システムを活用して保護者と園での活動や園児の姿を共有することで、園の教育・保育への理解や信頼に繋げることができた。 △保育実践を通して研究主題に迫った環境づくりや援助の仕方等について、時間やその方法などの計画性の弱さから十分に検証することができなかった。 △クラスを超えて保護者同士が子育ての楽しさや悩みなどを気軽に交流できる機会をもつことができなかったため、十分な子育て支援の役割が果たせなかった。	・一人一人が安心して自己発揮できる環境や関わりを工夫し、自己肯定感を育む。 ・身近な自然を活用した遊びの場を意図的・計画的に取り入れ、主体的で協同的な活動ができる環境を工夫し、健康な心や体、豊かな感性や表現力を養う。 ・友達と関わったり協同的な遊びや活動を繰り返したりしながら、豊かな人間性の基礎を培う。 ・地域の人や自然、文化に触れる機会を設け、生活体験や社会体験を豊かにする。 ・安心安全な環境のもと教育・保育の向上に努める。
評価項目	重点目標	具体的方策	成果と課題(自己評価)
保 幼 小 中 一 貫 教 育 の 推 進 (保 幼 小 接 続)	・久美浜学園の教育目標、目指す子ども像に向けて、基本方針を理解して取組を進める。 ・保育所、園、小学校と連携し、相互理解を深めながら一貫性・連続性のある指導に努める。	・久美浜学園の指導の重点や取組の柱とする内容を新しい職員体制の中、共通理解し、実践し検証していく。 ・学園内の園所や小、中学校と合同研修の場(公開校、研修会、担任会等)を設け、学園の重点目標に向けて一貫性・連続性のある指導へとつなげていく。 ・園児と児童、生徒との交流が深まるような学校行事(運動会、学習発表会、マラソン大会、生徒会活動など)の取組を学校と連携をとりながら企画し、スムーズな小学校との接続や豊かな心の育成につなげる。	○久美浜学園の重点や取組の柱が保育実践にどのように反映されているか、またその成果や課題はどこにあるか実践記録を通して検証していくことで、学園基本方針の共通理解ができた。 ○京丹後市保幼小中一貫教育授業研究会において学園内3園所が共に発表し、その過程を幼児期の終わりまでに育みたい10の姿に捉えて共通のまとめ方を行った。その報告を通して園所、小学校、中学校の指導のつながりを確認することができた。 ○小学校1年生との生活科での授業交流では、園での遊びと小学校の学習との接点が多く、園児の小学校生活や学習への意欲や期待感につながる良い機会となった。

教育課程	・楽しい園生活を繰り広げる。 ・主体的、協同的に活動する力を育てる。 ・人とつながりあうことの喜びを味わい、人と関わる力を養う。	・園児一人一人の姿を肯定的に受け止め、「温かく包み込まれている」という安心感のもと自信をもち自己を発揮できるようにする。 ・「自分大好き！先生・友達大好き！こども園大好き」と思えるよう互いを認め合える居心地の良い環境づくりを行う。 ・身近な自然の中で体を思い切り動かし、友達と一緒に感じたり、考えたりする感動体験を積み、主体性、協同性の育成につなげていく。 ・異年齢児や地域との交流を行い、遊びや体験を通して人を思いやる気持ちや人と関わる楽しさ、また地域を愛する気持ちを育めるように進めていく。	○一つ一つの活動に頑張る個々の姿をしっかり受け止め認めることで園児は自信を付け、自己発揮しながら活動を進める姿が多く見られるようになった。 △伸び伸びと園生活を送る園児は増えつつあるが、友達のよさに気づき園児同士が認め合えるつながりは、十分にもてなかった。 ○裏山での遊びの環境を意図的に多く取り入れたことで、体を動かしたり、自然を通して感じたり考えたりする体験を積むことができた。 ○地域の方にお世話になり栽培活動や音楽鑑賞などの取組を行うことができ、人への親しみや感謝の気持ちを育むことができた。
子育て支援	・保護者が安心して子育てができるように支援する。 ・家庭の教育力向上を図るとともに家庭と連携し、「共育て」を目指す。	・保護者の何気ない話や相談に丁寧に耳を傾け、保護者が「話を聞いてほしい」「先生の話聞いてみたい」と思えるような関係づくりをする。 ・園庭開放日や園開放日を通して、親子が楽しい雰囲気の中で子育てについて交流できる場を設定し、子育ての楽しさを共有する。 ・園児の様子をホームページやドキュメンテーション等を活用して保護者にタイムリーに伝え、安心、信頼される園づくりに努める。	△日々、対話に心掛けてきたが、十分な関係づくりができないこともあり、保護者の不安感が少し残ってしまうことがあった。 ○園庭開放日に保護者会と共にクリーンデーを設けたことで、保護者同士の交流が盛んになり、つながりを広げることができた ○定期的なドキュメンテーションの配信により各学年の保育内容についての理解を深めることができた。また、アプリでの配信により保護者の既読が確認できるようになり、お願いやお知らせ等が周知しやすくなった。
特色ある園づくり	・身近な人や自然環境を生かした活動を多く取り入れ、地域と協働した教育・保育を目指す。 ・自然体験や環境学習を通してSDGsについて考え、毎日の生活の中でも意識付けていく。	・地域ボランティアや保護者の協力のもと、身近な自然環境を生かした遊びや活動の環境を整え、主体性、探求心、創造力、コミュニケーション力また人に対する愛情や信頼関係などを育むようにする。 ・山遊びや散歩を通して森林や草花と触れ合い、自然に親しみ理解したり、アルミ缶回収、ペットボトルのキャップ収集また微生物による堆肥づくりなどの取組から環境を保護する意識を育んだりして、生命や自然、もの等を大切にすることを習慣化していく。	○保護者会本部役員の積極的な協力により、裏山遊びを安全、安心に進めることができた。また、その遊びから自立心や創造力も培うことができた。 ○中学生のペットボトルキャップ集めや保護者会のアルミ缶回収に協力することで、身近なごみや廃棄物に関心をもち、自然環境を保護する意識を育むことができた。 △積極的に栽培活動を取り組んだり、飼育物を通して愛情や生命の尊さについて意識したりしてきたが、行動や態度に結びつけることは難しかった。
次年度に向けた改善の方向性	・保幼小中一貫教育の取組を分かりやすく保護者に伝え、理解してもらえるよう努める。 ・認め合い、支え合い、人とつながる心地よさを味わえるような教育・保育の充実を図る。 ・地域や保護者の協力のもと自然体験や環境学習を積み重ね、園児のSDGs意識を継続するとともに態度を習慣化していけるよう努める。		

(別紙様式1)

令和5年度学校評価自己評価報告

学校名〔京丹後市立峰山小学校〕

学校経営方針(中期経営目標)		前年度の成果と課題	本年度学校経営の重点(短期経営目標)
多様な人々と協働し、個性や能力を発揮して主体的・自律的に生きる力を育てる。 1 自ら学び、学んだことを伝え合う子どもを育てる。 2 生き方・在り方を深く考え、自律して行動する子どもを育てる。 3 よりよい社会をつくろうと力を合わせる子どもを育てる。		○教科等学習における学び合いや自ら考え諸問題を自律的に解決する児童活動が充実したことにより、児童の良好な関係性や自律的な判断力・行動力を高めることができた。 ○不登校(傾向)児童への支援、愛着形成不全等の心理的課題や発達障害等への支援が充実したことで、学校不適応(特に不登校)の状況が改善した。 △愛着形成に課題のある児童や、貧困等の厳しい状況にある家庭へのケア・支援をさらに工夫する必要がある。	全ての児童がつながりながら、将来の社会的な自立を目指して力を伸ばし合う学校づくりを行う。そのため、 ①学び合う子 ②高め合う子 ③認め合う子 を目指す児童像とし、身に付けさせる力の具体的目標を6点設定して学校経営を進める。 それらに取り組む重点的な場を「①学習指導 ②児童活動 ③児童支援」とし、全ての教職員が分掌して目標の達成に迫る。
評価項目	重点目標	具体的方策	成果と課題(自己評価)
学校教育指導の重点、 各学級の重点等を基盤として	教育課程 学習指導	①伝え合い、話し合い、学び合いによる教科指導を実践し、児童同士のかかわり合いの中で学ばせる。 ②認知能力と非認知能力を一体的にはぐくむ授業づくりを研究重点とし、組織的に実践的な研修を行う。 ③電子黒板やタブレット端末等のICT器機を効果的に活用し、児童の学び合いを一層深める。 ④授業改善や効果的な家庭学習等について峰山学園内小・中学校と連携して取り組み、教職員が相互に学び合う。	○目指す授業を明確にした授業研究を進めたことで、「わからないことは聞いたり人と考えたりしている」「話し合うと授業がよく分かる」と90%程度の児童が感じている。 ○できないことにもあきらめずに取り組もうとする児童が90%になるなど、非認知能力として重点的に目標設定した学ぶ力の向上が見られた。 ○ICT機器の活用により、児童の興味・関心が高まり主体的に学ぼうとする意欲の向上につながった。 △主体的に学びに向かう意欲を向上させ確かな学力を身に付けることができるよう授業改善を進める。また授業での学びが家庭学習につながるよう研究を進める。
	生徒指導	①児童自らが考え、話し合い、判断し、問題を解決する自律的で自治的な活動(特に特別活動)を全校で展開する。 ②不登校や学校不適応の未然防止に向け、毎週1回の児童支援会議を行い、学習指導・教育相談・特別支援等の多面から計画的・総合的な児童支援を進める。 ③スクールカウンセラー、児童養護施設、医療、福祉等との情報連携・行動連携の質を高める。 ④峰山学園内での校種間連携を強化し、早い段階からの移行支援に取り組む。	○えがおスポーツパーティや秋祭り等、児童自らが考え学年を超えて仲間と共に課題解決する取組を進めたことで、「周りの人の頑張りが良いところを見つけている」「目標に向かって友達と協力して頑張っている」「他の学年にも中の良い友達がいる」と90%程度の児童が感じている。 △不登校等の未然防止や解消に向けた組織的対応を行っており、改善しているケースもある。しかし、今なお厳しい状況にあるケースもあり、不適応・不登校(傾向)の解消に向けて、専門家等と連携しながら取組を強化する必要がある。 △いじめの未然防止、再発防止に向け、人権学習を基盤とした心の教育を専門家の活用も図りながら組織的に進めていく。

健康（体育）・安全	○心身ともに健康な生活に自ら取り組む意欲と態度を育て、望ましい生活習慣を確立させる。 ○交通事故防止を徹底し、児童の安全を守る。	①望ましい生活態度や健康づくりに向けて、児童が自分の生活を振り返り、考えることができるよう生活習慣に関する指導を、すべての学年で計画的に行う。 ②SNSやオンラインゲーム等の問題に関して、PTAや峰山学園と連携し、児童・保護者の学習・研修・啓発を進める。 ③登下校の安全確保と事故防止に関して、地域の安全ボランティア組織と連携した取組を進める。	○非行防止教室や歯磨き巡回指導等、外部講師による専門的な指導を実施できたことで、自らの健康や安全について振り返り考えさせることができた。 ○PTAや安全ボランティア組織と緊密に連携し、登下校や校外での重大事故は本年度も0件となった。 △ゲームやSNSの使用法については家庭や専門機関との連携を図りながら、自らコントロールできる力を付ける必要がある。
特別支援教育	○将来の社会参加に向けた自立を支援するという立場から、児童一人一人の教育的ニーズを整理し、すべての児童が自分らしさを伸ばし合える環境をつくる。	①「多様性を尊重する」という方針の下、全ての児童が参加し力を伸ばし合える学習指導や集団活動を追求する。 ②校内に適応指導教室・特別支援教室（学習ルーム）を設置し、必要に応じて個別の支援を行う。 ③特別支援学級では、個々の児童に応じた支援計画と教育課程をつくり、地域と連携した生活単元学習（各教科等を合わせた指導）を中心に得意を伸ばす指導をする。 ④保護者と定期的な懇談を行い、合意形成を図りながら、一人一人に応じた合理的配慮を行う。	○「相手の気持ちを考える」「なんでも聞いてくれる友達がいる」などと考える児童が90%程度おり、他者理解が進んだり児童同士の結びつきが強まったりした。 ○特別支援教育への保護者の理解と信頼が深まり、特別支援学級や通級指導教室に対するニーズが高まった。 △通常の学級における個に応じた支援が途切れないよう、6年間を通して一貫した支援を進める必要がある。 △愛着形成に課題のある児童や、貧困等の厳しい状況にある家庭へのケア・支援をさらに工夫する必要がある。
開かれた学校づくり	○峰山学園、保護者や地域社会との連携・協働を通して、教育活動を工夫改善し、児童の学びを深める。	①地域性を生かし、地域の人材を活用した学習活動を創意工夫して実施する。 ②保護者や地域に対して、本校の方針や教育活動についてホームページ等を通して発信する。 ③学校評議員、学校関係者評価委員、峰山学園運営協議会の意見・評価から学校経営等を改善する。	○峰山町の伝統や産業等、自分たちの住んでいる地域に向き様々な方々から話を聞き学び地域への愛着を高めることができた。また外部講師として地域の方々を招聘し農業や伝統芸能等について学んだり、子どもたちの学校での様子を知っていただいたりすることができた。 ○授業参観やホームページ、学校便り等を通して保護者や地域の方々に発信することで学校の様子を知っていただくことができた。 △教育目標実現に向けた行事や取組のねらいについて更に理解が進むよう丁寧に発信をしていく必要がある。
次年度に向けた改善の方向性	(1) 認知能力と非認知能力を一体的に育む指導を一層進めることにより、学びに向かう力を高め、学力格差を改善する。 (2) 児童の自律的・自治的な活動を学校全体に根付かせ、自ら生活をよりよくするために考え判断し、協働して問題を解決する力を一層高める。 (3) 一人一人の児童のニーズに応じた適切で効果的・継続的・計画的な指導・支援を全ての教職員が行うため、年間を通して実践的な研修を行う。 (4) 全ての児童に学校での学びを保障する観点から、児童個々の特性・特質・差異・選択を尊重し、不登校、いじめ、家庭の貧困や教育力の課題などに対し関係機関と連携したチーム支援を一層強化する。		

(別紙様式1)

令和5年度学校評価自己評価報告

学校名〔京丹後市立いさなご小学校〕

学校経営方針(中期経営目標)		前年度の成果と課題	本年度学校経営の重点(短期経営目標)
教育目標「自己肯定感を持ち、自分の将来を展望し、共に学ぶ子の育成」 目指す子ども像 1 意欲を持って自ら学ぶ子ども 2 思いやりのある子ども 3 進んで心と体を鍛える子ども		コミュニケーション能力の育成を柱として、すべての教育活動に位置付けてきた。その結果、自分の思いを相手に伝えられる児童が増え、人と関わる良さを感ぜられるようになった。しかし、安定した学級経営の下で規範意識の向上、思いやりの心の育成を目指したが不十分なところもある。一人一人の良さを生かした指導を行い、「お互いを認め合う」学級づくりを進める。自分の居場所があり、安心できる学級を支えにして授業づくりを進める。	目指す子ども像を具体化する重点 1 自ら考え判断し、表現する力を向上させる。 2 自らの時間と力を周りの人々のためにもつかい、他者に貢献する態度を育てる。 3 自らの目標を設定し、自分で調整しながら根気強く、やり抜く力を育てる。 4 保護者、地域から信頼される学校づくりを推進する。
評価項目	重点目標	具体的方策	成果と課題(自己評価)
学校教育指導の重点、各学園の重点等を基盤として	教育課程 学習指導	1 コミュニケーション能力の育成を柱とし、ねらいが明確で児童が分かる授業を研究授業等によって教員が学び合う。深い学びになる指導と評価、ICTを活用した授業づくりの研究を通して目指す資質・能力を伸ばす。 2 学習意欲が持続するような手立てを工夫しつつ、1時間で指導しきり、習得させる。学び合いや振り返りについても、どこまでをねらうのかゴールを明確にする。	○授業のねらいを達成するため、自分の考えを伝え相手の意見も取り入れて考えが深められる授業の研究を行った。意見交流にはICTを効果的に活用できた。 ○めあての提示や授業展開を工夫し、授業に向かう意欲や興味を高め、何を学習するのか明確にできた。 △家庭学習の目的を児童が自覚し、自主的に学習するための指導を継続する。
	生徒指導	1 道徳や特別活動等を通して、自分の思いを伝えたり、友達の意見を受け入れたりして望ましい人間関係をつくり、いじめを生まない学級づくりを行う。 不登校を未然防止するために、居心地のよい学級・学校を目指し、児童同士の関係作りや児童と担任の信頼関係を築く。 2 授業づくりを通して学級づくりを行うことを全教員で確認し、授業の中でペアやグループで対話する場面を設定する。また、日々の肯定的評価を積み重ね、自己肯定感を高めるとともに、お互いの良さや自分との違いを認め合える(受け入れる)集団づくりを進める。 3 学級活動や異年齢集団での活動における、行動価値として、他者貢献の視点を常に伝え積み重ねていく。	○「ちがいがあって当たり前」の考え方を基本とし「楽しい」と思える学校・学級づくりに努めた。 ○何でも話せる雰囲気醸成し、困ったことは担任・友達に伝えると解決できる体験を重ねた。 ○結果に至るまでの過程を重視し、子どもの取組を認めて肯定的評価を続けたことにより、自分のがんばりや成長を自覚できた。 ○異年齢活動では、6年生がねらい達成のための内容や方法を考えて取り組んだ結果、下級生から「ありがとう」「うれしかった」と聞き、成功体験として実感できた。 ○異年齢活動の成果により、学年交流遊びを計画した。相手意識をもった活動を行い、達成感を味わった。

健康（体育）・安全	1 全校的な感染症予防や体力にかかわる取組の充実と積極的な児童への指導、保護者への啓発により、自分自身の身体に関心を持たせる。 2 困難なことにもねばり強く挑戦していこうとする態度を育成するために、自分で目標設定できる力を付ける。	1 健康安全部が中心となり、感染症予防の取組を継続的に行う。（各学期の1回の保健指導）平時の場合と感染が広がりつつある場合の行動を考えさせ、感染予防に努める。感染予防できる方法を工夫し、体力向上と粘り強く頑張ろうとする心を育てる。 2 学級、学校での取組において個々のめざす目標を発達段階に応じて明確にし、自分の目標を数値化し、具体的な目標に向かって、ねばり強く挑戦する態度を高める。目標達成だけが成長したととらえるのではなく、達成していなくても見えない成長があると認めていく。	○人数制限や感染対策をとりながらの活動ではなくなったが、コロナ禍前の朝マラソン等の取組に戻さずに、体育の時間を使っての持久走、縄跳びで自分の目標に向けて努力できた。 ○自分で目標を設定して取り組むことができた。目標達成への過程を振り返ることにより、目標達成に届かなくても成長できたと感じる児童が増え、意欲が持続した。 △結果がすべてではないとわかっているが、できなくてあきらめてしまうことも多い。できなくても挑戦してみようという学級の雰囲気をつくっていく。
人権教育	1 規範意識を身に付けさせ、いじめを許さない心を育て、行動できるようにする。 2 発達段階に応じた仲間意識を育成する指導を進める。	1 全教育活動を通して道徳教育・人権教育の推進、規範意識の醸成によりいじめの防止を行う。日々の小さな事象を見逃さない気づく力を高め、未然防止に努める。また「他者への思いやり」については相手意識を持たせた指導を行う。 2 互いの個性や価値観の違いを認め、得意なこと認め、違いがあるから友達と協力することに意義があることを実感させ、自分に自信を持ちさらに良さを伸ばす指導を行う。	△「いじめはいけない」とわかっている児童がほとんどであるが、深く考えずに行動し、人の嫌がることをしてしまうことがある。その都度、それぞれの思いを聞き、相手のことを考えさせる指導を続ける。 ○個の良さ、得意なことが発揮できる場を設定し、やってよかったと思えるような取組を行った。 ○「さらによくなるように」という視点で取組や行動を振り返り、質の向上につながられた。
研修（資質向上）	1 職員の指導力向上に向けた研修を積極的に進める。 2 峰山学園が目指す保幼小中10年間の連続した学びと育成を目指した研修を進める。	1 峰山学園における研修会、校内の授業研修会等をおして、職員の指導力向上に向けた研修を行う。校内研修では、児童の見方や支援の方法を研修し個別指導に活かす。適宜評価を行い、日々の実践と結びつけた価値づけを行う。 2 峰山学園の「(0)Ⅰ～Ⅲ期における「目指す姿」を共有し、「主体的・対話的で深い学び」を実現するための視点についての研修を進める。校内研では、グループでの協議も組み入れ、教員同士が学び合える環境を作る。	○2学級ある学年は学年で授業研究を行った。研究するグループの構成を工夫し、学年の系統について学び合えた。 ○峰山学園の授業研究では、しんざん小の実践から、自分や自校の実践と比較したり、峰山中での実践から、中学校へのつながりを考えたりできた。 △学習内容が分かり、より深く学べるためにペアやグループで伝え合うことを取り入れた授業づくりについて研究を継続する。
次年度に向けた改善の方向性	・変化し続ける社会に対応できる思考力・判断力・表現力を育成するための指導について研究を継続する。 ・児童が主体となる授業や特別活動を連動させ、何でも話せて安心して学び合える学級集団をつくる。 ・スクールカウンセラーなどの外部機関と連携し、方向性を明らかにしたうえで、個別に適切な支援を行う。		

(別紙様式1)

令和5年度学校評価自己評価報告

学校名〔京丹後市立しんざん小学校〕

学校経営方針(中期経営目標)		前年度の成果と課題		本年度学校経営の重点(短期経営目標)
1 一人一人が自己肯定感を持ち、いきいき活動する学園 2 「中学校卒業時の子どもの姿」に全教職員が責任を持つ学園 3 保護者・地域に信頼される学園		○ 生徒指導の視点を生かした学級経営により落ち着いた教育環境づくりができ「学校が楽しい」の項目では、93%が肯定的回答となった。 ○ 個別に配慮を要する児童への専門機関と連携した取組を進め指導・支援を行った。また保護者と定期的な面談等を行い支援の共通理解を図り、不適応等の未然防止に努めた。 △ 「自分にはよいところがある」の項目では肯定的な回答が78%であった。より自己肯定感が高まるような指導や取組を大切にしたい。		『自己肯定感を持ち、自分の将来を展望し、共に学ぶ子の育成』 ○ 考えて行動できる【思考】 ○ 自分で判断できる【判断】 ○ 自分なりに表現できる【表現】 ○ やさしい言葉を使う【言葉】
評価項目	重点目標	具体的方策		成果と課題(自己評価)
学校教育指導の重点、各学園の重点等を基盤として 学校教育指導の重点、保幼小中一貫教育の諸計画及び	教育課程 学習指導	1、2を通して ○ 重点研究として国語科を設定し、児童の学びたい意欲を引き出し意見や考えを伝え合ったり表現したりする力を伸ばす授業づくりの理論的・実践的に進める。 ○ 初任者研修、2年目研修等を効果的に活用し、経験年数や課題意識に応じて実践力を高められる研修を積み重ねていく。 3 これまでの授業実践を踏まえて、家庭学習での活用を具体的に進める。		○ 研究授業や学園の公開授業を計画的に行った。また、理論的に学ぶ研修の機会を設定し、理論的、実践的に授業研究を深めることができた。 ○ 個々の教員の課題意識等に応じた研修等への参加を積極的に促し、校内での波及に努めた。 ○ 日常的にタブレット端末を持ち帰り、家庭学習での活用が進んだ。 △ 授業観・指導観の転換についての意識は徐々に高まってきたものの「探究的な学び」の具体については、次年度の中心的な課題の一つとなる。
	生徒指導	1 子ども自身の思考や判断、その子どもなりの表現を促すために、児童の声を傾聴すること、自己決定を促すこと、その子に応じた支援をすることを大事にする。 2 人権教育を教育活動の基盤とし、日々の授業や教育活動を通して、相手の立場に立った望ましいコミュニケーションができる行動を促し評価することを繰り返していく。 3 児童に目標や見通しを持たせる計画を丁寧に共通確認する。取組過程において肯定的な評価を繰り返し児童の自己肯定感を高める。		○ 毎週の会議時や日常的な情報共有を徹底し、問題事象や保護者対応、不登校の未然防止等、基本的には迅速・適切に対応することができた。 ○ 学期ごとに児童アンケートを実施し結果を児童や保護者に返すことで、次の目標設定や見通しを持つことにつなげた。 △ 個々の児童の家庭的な背景、教員の指導の問題等により、学級や学校に不適応を起こす児童のケースが複数あった。今後も継続課題である。 △ 保護者アンケートの「いじめ防止の積極的な取組」について、「よく分からない」が27%と高く、いじめアンケート等の結果により丁寧な周知が

	健康（体育）・安全	1 年間を通した体力向上の取組を進める。 2 交通安全、熱中症予防に事故防止を徹底する。	1 学校行事や日々の教育活動と連動し、また、「体育指導力向上指定校」の取組を有効に活用し体力向上を図る。 2 地域の特性に鑑み、日々の交通安全には学校体制で細心の注意を払って対応する。熱中症等予防について教職員で指導と対応を共通理解し徹底する。	必要である。 ○「体育指導力向上指定校」の取組を生かし、体育授業における ICT 機器の積極的な活用や年間を通した体力づくりを行った。 ○ 事故や怪我の予防に積極的に努めたが、様々な理由により心身の不調を訴える児童が多くいる。
	(A) 人権教育	1 児童や保護者・家庭、地域の状況を把握し、全ての教育活動に人権教育の視点を反映させる。	1 児童や家庭・地域の実態を丁寧に把握し、一人一人の児童が安心・安全の中で学校生活を送れるようにする。全教職員の人権意識を高め、一致した視点で指導や支援を行えるよう管理職が指導助言をしたり価値づけをしたりする。	○「言葉を大事にする」ことを目指す児童の姿に位置付け年間を通して日々の声かけをし、いじめやトラブルの未然防止に努めた。 ○ 様々な背景により自己肯定感の低い児童が多く見られ、次年度も継続的に取組を進めたい。
	(B) 特別支援教育	1 知的、自閉・情緒、病弱学級があることを生かし、特別支援教育の視点を全教育課程に反映させる。	1 3 学級間で連携した取組、交流学級と連携した取組を効果的に設定する。また、全校児童の中で大事にされる理解教育を推進する。保護者と定期的な面談を行い、その児童、保護者の願いを踏まえた支援計画を作成し、個に応じた支援を行う。	○ コーディネーターを中心として、支援学級に在籍する児童、通常の学級に在籍する支援が必要な児童への支援を組織的に行った。 ○ 就学相談について、保護者との連携を丁寧に図ることができた。
次年度に向けた改善の方向性		・ 「考えて行動する力を伸ばす」ことを中心に、一人一人の児童に応じた判断や表現ができ、将来生きていく力を伸ばすことに教育活動全体を通して取り組む。 ・ 「探究的な学び」の具体について、1 学期早い段階でイメージを共有し、各教科等において授業改善を進める。 ・ 全ての児童が安全で安心して学校生活を送れるよう、いじめ予防や学級経営、生徒指導の充実を図る。また、日常的な情報共有を徹底し、必要に応じて学級への支援を組織的に行う。		

(別紙様式1)

令和5年度学校評価自己評価報告

学校名〔京丹後市立長岡小学校〕

学校経営方針(中期経営目標)		前年度の成果と課題		本年度学校経営の重点(短期経営目標)	
「峰山学園」の経営方針を踏まえ、教育活動全体を通して学園教育目標「自己肯定感を持ち、自分の将来を展望し、共に学ぶ子の育成」に迫る。		○学校教育目標の理念を機会あるごとに伝え、価値付けすることで教職員、児童ともに浸透してきた。 ○気になる児童や事象について組織的に早期対応を行う中、大きな生徒指導事象はなく、不登校傾向児童もいない。 ○高学年を中心にICTの利活用が進んだ。冬季休業中は全学年タブレットを持ち帰り活用した△学園の各期における指導の系統性について意識化を図り「主体的・対話的で深い学び」の実現を追求する。 △PTAや保護者と連携してSNSの利用の仕方や就寝時刻について考え、よりよい生活習慣の確立を目指す。 △特別支援教育について、保護者や児童への理解教育を進めると共に個々のニーズに応じた指導・支援を追求する。		学校教育目標「ちがいを認め合い、笑顔あふれる学校」 人権尊重を基盤とし、あらゆる教育活動を通して、一人ひとりを大切にしたい教育を推進する。 1 人を思いやる豊かな人間性の育成 2 一人ひとりを大切に個性や能力を最大限に伸ばす指導（発達支持的生徒指導） 3 確かな学力・コミュニケーション能力の育成(個別最適な学び・協働的な学び・探究的な学びの推進) 4 たくましく健やかな心身の育成 5 安心・安全で信頼される学校づくり（環境整備、保護者・地域連携）	
評価項目		重点目標		具体的方策	
学校教育指導の重点、各学園の重点等を基盤として 保幼小中一貫教育の諸計画及び	教育課程 学習指導	1 「主体的・対話的で深い学び」の実現と探究的な学びに向けての授業づくりを追究する。 2 振り返りを重視し、自己調整力を育成する。 3 目標と指導と評価の一体化を図る。 4 ICTのより効果的な活用を推進する。		1 学園の指導目標と視点を踏まえて、各期における指導を系統的に進める。また、各教科における探究的な学びについて分掌主任が中心となり研修を行う。 2 自分を見つめ直す場を設定し、成長や効果的な学習方法等に気付かせる。 3 児童実態に応じた目標を設定し、ゴールを明確にした授業づくりを行う。 4 ICTの授業や家庭学習での利活用について研修の機会を設ける。	
	生徒指導	1 人を思いやる豊かな人間性を醸成する。 2 発達支持的生徒指導を全教育活動で推進し、不登校傾向やいじめ事象等の未然防止、早期発見、早期解消に努める。		1 教え合い助け合う児童同士のつながりを通して、誰もが安心して生活でき居場所のある学級、学校づくりを進める。 2 児童が主体となる活動を仕組むと共に、一人ひとりを大切にして、全教職員で全校児童を育てることを意識化する。また、生徒指導部、教育相談部、いじめ防止委員会の機能化を図る。	
				成果と課題（自己評価） ○△教え合いを通してつながる授業づくりができた。「主体的・対話的で深い学び」の実現や探究的な学びに向けての授業づくりを更に追究する。 ○△特別活動では、常に振り返りをしながら取組を進めてきた。授業でも時間の設定をして自己調整力を育成していきたい。 ○どの学年もめあてを提示し、児童に見通しをもたせて授業ができた。 ○ICTの活用は、特に4年生以上で積極的にできた。長期休業中は全学年タブレットを持ち帰り復習や自由研究等で活用した。 ○学校教育目標「ちがいを認め合い笑顔あふれる学校」の理念を機会あるごとに伝え、価値付けすることで、思いやりのある行動や、全校児童で楽しく遊んでいる様子を多く見ることができた。 ○年間を通して児童が主体となる行事や取組を行い達成感を感じさせることができた。 ○気になる事象については情報共有を図り組織的に早期対応を行った。大きな生徒指導事象はなく、不登校傾向児童もいない。	

健康（体育）・安全	1 体を動かすことを楽しみ、体力づくりやスポーツに親しむ態度を育成する。 2 家庭と連携して基本的な生活習慣を確立させる。 3 危機管理の充実や環境整備による安心・安全な学校づくりに努める。	1 中間マラソンや縄跳び等、目標を明確にした体力づくりの取組を充実させる。 2 生活がんびり週間を活用し、家庭と連携しSNSの使用時間や就寝時刻を考える等、健康的な生活習慣を確立させる。 3 年間4回の避難訓練を実施し、状況に応じた身の守り方を学ばせる。また、毎月安全点検を行うとともに、家庭や地域と連携し、安心安全な登下校を目指す。	○事前に目標を設定させたことで、各自が目標に向かって取り組むことができた。 △生活がんびり週間を年間3回設定したり、PTA 本部役員に協力していただき便りを発行したりしたが、ゲームの時間や就寝時刻は、なかなか改善できなかった。 ○計画通りに避難訓練を実施し、状況に応じた避難の仕方を学ばせることができた。毎月の安全点検やニコニコカーでの保護者による登下校の見守り活動が、年間を通して実施できた。
人権教育	1 人権尊重を基盤とした学校経営を推進し、教職員の人権意識の高揚を図る。 2 違いを認め合い、多様性を受け入れ、誰とでも仲良くできる児童を育成する。 3 人権について考える機会を設定するとともに、保護者への理解を深める。	1 学校教育目標に立ち返り、適宜研修を行い、教職員に人権尊重を意識させる。 2 違いを認め合い、教え合い助け合う中で、また、異年齢活動を通して、居心地のよい学校・学級づくりを進める。 3 人権旬間や人権月間で課題に応じたテーマを設け取り組む。また、学校・学級だより等や授業公開を通して保護者等に啓発・発信をする。	○校内研修や新聞記事等から自身を振り返る機会を適宜設け、教職員の人権意識の高揚を図った。 ○児童会活動等で「誰もが楽しめること」を考えて取組を計画することが定着した。 ○△人権旬間や人権月間等を計画的に進めた。友達の良い所をたくさん見つけたり、視覚障害者の方の講話により障害に対する理解を深めたりすることができた。学校だよりやホームページで発信したが、授業公開は実施できなかった。
特別支援教育	1 特性（個性）への理解を深め、助け合える好ましい人間関係を築く。 2 特性に応じた指導・支援の方法を追求する。 3 保護者や関係機関と連携し、適切な就学指導を進めていく。	1 学級開きや人権学習を通して様々な障害に対する理解教育を行う。 2 発達障害等、個別の支援が必要な児童への効果的な支援方法を他機関と連携して追求していく。 3 保護者との定期的な懇談を実施し、保護者の願いを反映させた個別の教育支援計画を作成するとともに、適切な就学について共に考えていく。また、他機関と連携し、コーディネーターを中心に校内組織の機能化を図る。	○学級開きや朝会等の講話で理解教育を行い、互いを認め合う雰囲気醸成された。 ○市の臨床心理士や丹後地域教育支援センターの巡回相談等により、支援を要する児童の効果的な指導や支援の方法を学んだ。 ○△コーディネーターが中心となり懇談前に打ち合わせを行った。保護者に児童の様子や効果的な支援を伝えることができた結果、良好な関係を保ちながら懇談を継続することができたが、特別支援学級への入級に同意が得られなかった家庭もある。児童や保護者の気持ちに寄り添った就学相談を今後も継続していく必要がある。
次年度に向けた改善の方向性	1 各教科の「見方・考え方」を意識しながら、「主体的・対話的で深い学び」の実現や探究的な学習について協働的な研究を推進する。また、振り返りを重視し「自己調整力」の向上を図る。 2 PTA や保護者と連携して SNS の利用の仕方や就寝時刻について考え、よりよい生活習慣の確立を目指す。 3 特別支援教育について、保護者や児童への理解教育を更に進める。また、外部と連携して個々のニーズに応じた指導や支援の方法を学び指導に生かすとともに、保護者や児童の気持ちに寄り添った就学相談を進めていく。		

令和5年度学校評価自己評価報告

学校名〔京丹後市立大宮第一小学校〕

学校経営方針(中期経営目標)		前年度の成果と課題	本年度学校経営の重点(短期経営目標)
「学校教育目標」(長期目標) ◆自他を尊重し、自ら学ぶ こどもの育成 「目指す学校像」 ◇一人一人が輝き、生き生き活動する学校 【児童】 ◇やりがいを持って自分の力を発揮する学校 【教職員】 ◇安心して子どもを任せられる学校 【保護者】 ◇他の地域に誇れる地域とともにある学校 【地域の方】		○2～6年のDRTの結果、昨年比同等以上が国語248人75.2%、算数239人72.9%となり、算数では目標に達成しなかったが、全体としてテストに現れる力を多くの子が伸ばすことができた。 ○話し合い活動について各学級で研究を進め力をつけ、授業や学級での話し合いに生かしていくことができてきている。また、ICTの活用がさらに進み、まとめたり表現したりする学習での活用ができてきている。 ○特別活動の異年齢活動等を活用し、協調性・自制心・やり抜く力などが身につけてきている。日々の学級経営の中で肯定的な評価を大切にすることで、自己肯定感を高め、心理的安全性のある学級づくりが進められた。 ※学力差に対応し、全体指導と個別の結果から指導内容を見つめなおしていく。 ※コロナの影響による体力・心理両面からくる影響に対して、可能なことでの取組を検討していく。	「一人ひとりが自分の良さを発揮し、将来の自立に向けてつながりながら力を高めることができるような学校経営を行う」 - 子どもたちをつなぎ、「心理的安全性」のある学級を目指す。(特別活動の研究そのものであり、そこから将来に向けた子どもの自立を進める。) - コロナの影響による、子どもの心理面、身体面の成長を常に意識する。 - 保護者との丁寧な連携を進め、集団の中で生きる力を伸ばす観点で理解を得ていく。 - 昨年度までの特別活動の研究によりつけた力を、さらに“誰もができる”を目指して実践を積み上げる。 経営のキーワード 『チーム第一小アップデート！ ー将来の自立を目指し、仲間と力を合わせようー』
評価項目	重点目標	具体的方策	成果と課題(自己評価)
画及び各学園の重点等を基盤として 学校教育指導の重点、保幼小中一貫教育の諸計	教育課程 学習指導	1 読む力・書く力・確実に計算する力等、基礎学力を定着させるため、単元及び本時の目標が明確で児童にとってわかりやすい授業を計画的に進める。 2 知識・技能を用いて活用する力を育成するため、「主体的・対話的で深い学び」による授業改善を積極的に進める。 3 感情をコントロールする(協調性)、集団の中で自分を律する(自制心)、自主的に粘り強く取り組む(やり抜く力)態度を積極的に育成する。 ・学習指導部、研究推進委員会を中心に、基礎学力の定着のため、単元及び本時の目標が明確で児童にとってわかりやすい(具体的手立てのある)授業を工夫する。また、授業時間内や放課後学習、家庭学習を通じて学習の積み上げを進める。12月のDRTの標準得点において、昨年度よりさらに伸ばすことを目指す。 ・身に付けた知識・技能を用いて考える力(活用する力)を育成するため、「主体的・対話的で深い学び」の実現による授業改善を特別活動の話し合い活動の視点から、積極的に進める。ICTを活用して思考力、表現力の向上を目指す。 ・協調性・自制心・やり抜く力を育成するため、指導のねらいを明確にした学級・学校の取組及び日々の指導を発達段階に応じて意図的・計画的に推進する。教科指導と生徒指導を一体化した授業づくりをすすめるとともに、特別支援教育の視点を大事に居場所のある学級・学校となるよう取り組む。	○今年度のDRTの結果では、学級平均では、特に国語において課題が見られた。しかし、算数において、一人ひとりが主体的に学べるよう工夫した授業(自由進度学習等)により力を伸ばすことができた。 ○学活の話し合い活動の研究を生かし、どの学級でもあらゆる授業の中でペアやグループによる小集団での話し合いや学級全体の学び合いを大切に進めている。その結果、多くの学級で主体的、対話的な学習が進んできている。 ○ICTを活用した学習がさらに進み、考えをまとめたり、表現したりする学習での効果が見られる。 ○特別活動の異年齢活動等も活用し、協調性・自制心・やり抜く力などが身につけてきていると感じる。また、日々の学級経営の中で肯定的な評価を大切に心理的安全性のある学級作りが進められている。 ○多様性を認め、居場所のある学校づくりに向けて、組織的に取り組み、「安心して学習ができる」の項目では91%以上の児童が肯定的評価をしている。

生徒指導	1 発達段階に応じた「友達と互いに理解し、信頼し、助け合う」気持ちを育成する指導を進める。 2 「不登校」、「いじめ」等の諸課題に対し、自己肯定感を高める等、未然防止と個に応じた支援による状況改善の視点において、積極的な生徒指導を充実させる。	・特別活動、学級活動、道徳科を中心に、全教育活動を通して道徳教育・人権教育を推進する。特に「主として人との関わりに関すること」[友情・信頼]についての指導を重視する。特に教室内の「心理的安全性」を目指すための様々な取組を進める。 ・教師が児童の良さをまた児童同士がお互いの良さを認めることで、自己肯定感を高め、自分の特徴に気づき、長所を伸ばそうとする態度を促進させる。学校・学級に一人一人の居場所があるように丁寧な取組を進める。	○学級活動や児童会活動、学校行事、人権教育の取組などを通して、集団での学び合いや支え合いができる学級が増えてきた。児童アンケートの「学校が楽しい」では、91%以上の児童が肯定的評価をしている。 ○不登校傾向の児童への対応として、常に居場所の確保に努め、また保護者とともに歩むことを大切にすることができた。その結果、少しずつ前向きに成長する児童が増え、長期欠席にはつながっていない。 ○いじめ等の生徒指導事象についても、トラブルはたくさんあるものの、確実な事実確認と保護者連携を通して、解決することができている。 ○児童アンケートで、自分には良いところがあると答えた児童がさらに増え約 89%だった。
健康（体育）・安全	1 全校的な体力にかかわる課題改善に向け、取組の充実と積極的な児童への指導、保護者への啓発により、心身ともに健康な体づくりに取り組む。	・体育の授業と運動し、期間を決め、集中的に朝マラソンや縄跳び等の取組を行ったり、計画的でタイムリーな児童への指導、保護者への啓発を進めたりすることで、体力（特に持久力）向上と休まず学校に来ようとする耐力（意欲）を高める。 ・休み時間の積極的な異年齢遊びを通して、安全に楽しく誰とでも遊べる経験を増やす。	○マラソン大会や縄跳びの取組等、体力づくりを全校的に進めることができた。 ○保護者との丁寧な連携を図り、子ども同士のつながりを大切にして居場所を創ることでどの子どもも学校に来ようとする気持ちを持ち、登校できている。 △コロナ禍で落ち込んだ体力的な面の課題は、まだ改善には至っていない。けがも多い。
(A) 特色ある学校づくり	1 昨年度までの特別活動の研究実践の成果をさらに積み上げ、誰もができる将来の社会的自立を目指した教育活動の在り方について、実践を重ねる。	・学級活動や児童会活動等の授業や活動の考え方や指導の在り方について理論研究を進める。また、すべての教育活動の基盤として安心して学べる学級となる人間関係づくりの指導方法を発達年齢に応じて身につける。 ・大宮学園の授業研究会や市小研の特活部の研修等で、積極的にこれまでの研究の成果を発信する。	○特別活動の研究や実践から、児童が主体的に自他を尊重して話し合い活動を進めることができ、温かな人間関係づくりの文化が根付いてきている。 ○大宮学園の授業研究会では、伸び伸びと自分の意見を伝え、友達の意見を聞き、子どもが主体となって話し合いを進める授業から、研究協議が深まった。
(B) 情報活用能力（ICT 活用）	1 電子黒板や一人 1 台のタブレットを活用した、授業改善を進める。 2 情報モラルについては、実際に使用しながら細やかに実態を把握し、課題についてはその都度よりよく使うためのルールを考えさせながら身につける。	・具体的にどのような教科や単元、場面等で活用しているか実践交流を行い、さらに使用範囲を広げながら効果的な活用を目指していく。 ・学園の取組の中でも、オンラインでの交流を行うなど、活用を図る。 ・「個別最適な学び」の実現を意識しながら、少しずつ家庭学習におけるタブレットの活用を進める。オンラインによる家庭学習についても、段階的に取り組む。	○全学年で、どのようなことに ICT が活用できるのかを実践研究することができ、児童の活用スキルも高まった。 ○学園での情報モラル研修会を行い、児童生徒だけでなく、保護者や教職員も最新のトラブル等について知り、正しく使う視点での指導に活かすことができた。 ○タブレットの持ち帰りを進め、オンラインによる家庭学習にも段階的に取り組んだ。
次年度に向けた改善の方向性	※一人一人の可能性を最大限引き出す教育を進めるため、学習の見直しをもったり学習したことを振り返ったりする等、児童が主体的に学習に取り組む（学びの自己調整）力を高める指導を進める。さらに、タブレットを活用して、日々の学習ともつなぎ個別最適な学びの実現を目指した家庭学習の取組を工夫する。 ※全ての子どもにとって心理的安全性のある学級・学校の実現を目指し、居場所のある環境で力を発揮できるように取り組む。 ※本校の落ち着いた雰囲気的基础に、特別活動で育ってきた異年齢のつながりや相手を思いやる気持ちなどがある。今後も、「誰もができる特別活動」の実践を地道にすべての学級で進める。 ※今後も保護者地域との連携を大事にし、地域を知り、地域の良さを生かした探求的な学びを進め、課題解決学習により子どもに力をつけていく。		

(別紙様式1)

令和5年度学校評価自己評価報告

学校名〔京丹後市立大宮南小学校〕

学校経営方針(中期経営目標)		前年度の成果と課題	本年度学校経営の重点(短期経営目標)
「自他を尊重し、自ら学ぶ 子どもの育成」 ・意欲的に学び、チャレンジする子ども ・自他を大切にし、思いやりのある子ども ・心身を鍛え、活動的な子ども 大宮学園「教育目標・目指す子ども像」の実現を目指し、学園の園所や小中学校の保育・教育から謙虚に学び、常に自校教育の改善に努める。		○学園授業研究会・校内重点研究において生徒指導の三機能を生かした授業づくりを理論的・実践的に研究し授業づくりと学級づくりの一体化が進んだ。 ○肯定的評価を学校経営の重点におくことで、児童同士、教職員と児童、教職員同士の良好な関係性が高まった。 △家庭的な背景や発達上の多様な課題への指導支援、関係諸機関との連携による保護者・家庭支援を強化する。	安心感の中で一人一人が自分らしく挑戦し、確実に前進する学校づくりの推進～肯定的評価を基盤とした教育活動の展開～ 【4つの重点】 ・学習・生活における誠実な努力 ・約束を守り、自分も周りの人も大切にする心 ・知恵を集め、新たなものを生み出す力 ・児童・教職員の達成感と次への意欲
評価項目	重点目標	具体的方策	成果と課題(自己評価)
各学園の重点、保幼小中一貫教育の諸計画及び 学校教育指導の重点、学習指導	教育課程 学習指導	・重点研究教科を算数科とし、課題設定場面(導入)のあり方を重視する中で、児童の意欲や主体性、見通しを引き出す指導、探究的な学びにつなげる手法について研究を進める。 ・生徒指導提要の改訂趣旨も踏まえ、肯定的な評価に基づく居場所づくりを大切にしその中でコミュニケーション能力の向上を図り授業・学力向上の取組を推進する。 ・学びのパスポートの実施と効果的な結果分析のあり方等を研究し、個の学力状況・今後の経年変化や課題等の把握について整理する。	○授業研究会をとおして、従来の「授業者主体の授業」から「学習者主体の授業」への転換に向けてのポイントを児童の姿から学び合い、共有することができた。 ○学びのパスポート質問紙調査「学校では安心して学習することができている」は府平均を大きく上回り、安心感の中で学べている状況が窺える。 ○児童が積極的に発表や対話をする姿が見られるようになり、保護者アンケート「授業等でことばの力を育成している」は85%→91%に向上した(前年度比) △各種テスト・質問紙等から個の学力課題を整理し、より個別最適な学びや支援につなげる。
	生徒指導	・肯定的評価や安心安全な居場所づくり等と学級経営の連動についての研修を定期的に実施し児童のよさ、誠実な努力を引き出す指導を大切にする。 ・特別活動等において児童の発想や主体性を大切に、失敗の中から学び、工夫・創造し挑戦する力を高めるとともに自他の成長を喜び合える力を育成する。 ・SCやSSW、関係諸機関等との連携の中で、具体的な動きづくりにつながる役割分担のあり方や学校としての方針をより明確にし、対応の向上充実に努める。	○児童アンケート「学校は楽しい」は96%、保護者アンケート「人権を大切にした学級・学校づくりをしている」は98%と一定安心安全な学校生活を送ることができている状況が窺える。 ○各行事・取組において児童の発想や挑戦を大切にし高学年を中心とした異年齢活動の中でつながりが深まり所属感や一体感を高めた。 △肯定的な評価を基盤とした教育活動の中で一定安定した学級・学校経営を進めることができたが、家庭状況を背景とした個々の課題は大きい。SCやSSW、関係諸機関等との連携の中で学校としての改善構想を立て、協議・共有していく必要がある。

健康（体育）・安全	・運動の楽しさや喜び、心身の健康の大切さを感じさせる授業や活動を推進する。 ・望ましい生活習慣の確立と安全な登下校、事故防止に係る知識・実践力を高める指導を推進する。	・昨年度の体育指導力向上研究で学んだ「自分に適した場や運動の設定」を大切に授業や体育的行事等の中で、自分らしく楽しみながら挑戦させる。 ・課題の見られるゲームやSNS視聴についての家庭ルール確立に向け、学園の取組を活用し啓発を行う。 ・安全な登下校への取組や交通教室等、PTA・学園・関係諸機関との連携を強化する。	○休み時間は多くの児童が異年齢で体育館やグラウンドで遊ぶ姿が見られる。昨年度の研究から授業の中で「自分に適した場や運動の設定」をすることが定着してきた。運動が得意な児童も苦手な児童も自分らしく挑戦する姿が見られる。 ○教職員による下校パトロールを強化しその中で実態把握とともに安全な登下校指導を進めることができた。 △児童・保護者アンケート「ゲームやテレビ等の視聴ルールがある」は81%→76%に低下しており、今後一層の家庭との連携、啓発・継続した指導が必要である。
特別支援教育	・個々の特性等を組織的に捉え共有することに努め、適切な支援をととして児童が学び合い、育ち合えるようにする。	・特別支援コーディネーターを中心に児童支援に係る部会を定例化し、現状や課題・手立て等について協議する中で、よりよい指導支援のあり方を探り、実践する。 ・特別支援教育に係る研修を充実させ、個別支援とともに通常学級における個と集団の支援のあり方について研究を進める。 ・具体的な方針に基づく保護者との面談を定期的に行い、児童の特性とともによさや成長を確かめ合う中で、合意形成に基づく支援を進める。	○児童支援に係る部会の定例化が図られ、配慮の必要な児童の様子や変化等の把握や保護者面談に向けた打合せ等ができ、安定した支援を継続することができた。 ○通常学級における支援についても校内研修会を設定し見立てや支援のあり方について学び合うことができた。 △保護者に課題面だけでなく、児童のよさやがんばりを日常的に伝える中で信頼関係を丁寧に築き、学校と家庭で支援の共有や見通しをもつことを大切にする。
情報活用能力 (ICT活用)	・授業における使用から質の高い活用に高めるための研究を進める。 ・家庭学習をはじめ広く教育活動における活用の手法を研究し個別最適な学びの実現を目指す。	・昨年度の ICT 活用研究で学んだ「単元指導計画や1時間1時間の授業の中で活用場面の構想」「児童に「何を見せ」「何に気付かせるか」の明確化」等の視点を日々の授業の中に落とし込み、質的向上を図る。 ・児童の考えや学びをつなぐツールとして ICT をいかに活用するかを研究する。 ・「整理」「探究」「予習」「補習」等、家庭学習における ICT 活用の視点を研究し学校での授業と家庭学習とをつなぐ。	○各教室で日常的に ICT を活用した授業が展開され、授業研究をととしてその質を高めることができています。 ○タブレットの持ち帰りによる家庭学習も定着してきており、効果的な活用の研究を進めることができた。 △学びのパスポート質問紙調査「ICTを使うことで他の人と意見や考えを共有しやすい」は府平均を下回り、ICTのよさを生かした意見交流の仕方をさらに研究する。 △大宮学園でも家庭学習のあり方が課題となっている。今後「自己調整力の向上」を目指す上で効果的な ICT 活用のあり方をさらに研究する。
次年度に向けた改善の方向性	・学びのパスポート等の効果的な活用をもとに、より個別の学力・学習状況の把握・改善を推進する。 ・肯定的な評価を基盤とした教育活動を継続し、児童にとってより心理的安全性や居場所のある教室・学校を目指す ・安心感の中で児童が考え、挑戦・協力し、失敗から学ぶことのできる主体性を育む学校行事や特別活動を推進する。 ・特別支援教育を中心に多様な課題への支援、関係諸機関との連携による保護者・家庭支援を推進する。 ・家庭での生活を「自己調整」する力を高めるための家庭学習のあり方を ICT 活用も含め研究し改善を図る。		

(別紙様式1)

令和5年度学校評価自己評価報告

学校名〔京丹後市立網野北小学校〕

学校経営方針(中期経営目標)		前年度の成果と課題	本年度学校経営の重点(短期経営目標)
1 落ち着いた学校、落ち着いた授業により学力を付ける。 2 規範意識を醸成し、思いやりをもち仲間と共に生きる、豊かな人間関係を築く力を育てる。 3 すべての子どもに、未来を展望し、自ら将来を切り拓く力を付ける。 4 自然・人・社会とのつながり、郷土を愛する心を育てる。		○目標達成のための活動を仕組み、運営することができた。 ○「未来を拓く学校づくり」推進事業における研究を進めることで、非認知能力育成に焦点化した授業改善を図ることができた。 △学年があがるにつれ自己肯定感が低下しているため、児童の主体性を引き出す取組と肯定的評価が必要である。 △基礎学力の定着を図ることが更に求められる。	1 網野学園保幼小中一貫教育の「目指す子ども像」の具現化を図るため、他の保園小中学校一貫した教育を推進するとともに、全教職員が学校運営に参画する。 2 「児童が主体性とそうぞう力を発揮する学校」「児童のよさがつながる学校」を目指し、児童にとって居場所のある魅力ある学校づくりをすすめる。
評価項目	重点目標	具体的方策	成果と課題(自己評価)
諸計画及び各学園の重点等 を基盤として 学校教育指導の重点、 保幼小中一貫教育の 学習指導	1 「認知能力」と「非認知能力」を一体的に育む教育活動を柱として授業改善を推進する。 2 生徒指導の4つの視点を生かした「わかる」「できる」「表現する」授業を通して「学びに向かう力」を育む。 3 振り返りを行い、自らの学びと成長を確認できる活動を行う。	1 「未来を拓く学校づくり」推進事業における研究において、非認知能力を教職員と児童が共有し、効果的なギミックや仕組み方を通した授業研究を行う。 2 学習意欲を喚起する授業展開とねらいが明確で「わかる・できる授業」を目指し、身に付けた知識・技能を活用し考え、表現する中で、児童が学びあう授業研究を行う。 3 多様な学習形態や学力補充・家庭学習、個の興味や理解に応じた学習を更にすすめるためにICTを積極的に活用する。 4 単元を通して児童が学習の成果や自分自身の成長したことに気づき、次の学習や学びに向かう意欲につながられる振り返りを通した授業改善に取り組む。	○教育活動全般に於いて学校としてつけたい非認知能力を焦点化し取り組むことができた。 ○保護者アンケート「学校はわかるできるの授業をすすめている」の間に「よくあてはまる」昨年度比+15 ○「未来を拓く学校づくり」推進事業における研究を進め、焦点化した非認知能力におけるギミックブラッシュアップシートによる全担任の授業研究会を行うことにより授業改善に取り組んだ。 ○全学級でICT機器を活用した授業を実施した。オンラインの配信型の課題だけでなく、Teamやロイロノートに於ける他者参照を取り入れる等授業でのICT機器の活用が進んだ。 △効果的なICT機器の活用の研究とタブレットを活用したオンラインでの家庭学習を更に進めていく。

生徒指導	1 教育活動全体を通して、生徒指導の4つの視点を大切にしたい実践を行う。 2 いじめと不登校においては未然防止に重点をおき、組織的な対応を行う。	1 異年齢活動の充実を図り、児童が自ら気づき主体的に活動することで、達成感や充実感を感じ合い自他ともに大切にする安心・安全な「居場所づくり」に努める。 2 生徒指導部会・教育相談部会、いじめ防止組織の中で、児童の姿を共有し、児童の変化に気づき見逃さない校内体制を構築する。 3 不登校やいじめを含む問題事象については、迅速かつ丁寧な初期対応に努め、児童や保護者の思いに寄り添い対応をする。	○異年齢活動（行事・チーム遊びや掃除・委員会活動）に年間を通して取り組むことで、主体的・創造的な活動へと変容した。 ○週1回のいじめ防止対策委員会の中で全校児童の変化や気になる状況を校内及び家庭と共有し支援を行った。 △不登校（傾向）児童や家庭に対し、関係機関や専門家と連携を図り、児童や保護者の思いを大切にしたい支援を更にすすめる。 △学年があがるにつれ自己肯定感の低下がみられる。
健康（体育）・安全	1 積極的にチャレンジし、自らの成長につながっていることを実感する指導を進める。 2 基本的な生活習慣に関する児童の実践的な態度の育成を図る。	1 個に応じた目標や短期（各単元）目標を設定させ、目標児童が達成感を得られる取組を仕組む。 2 振り返りの中で、児童の相互評価や家庭との連携、指導者による肯定的な評価による価値付けを行う中で、自他の成長に気づき次への意欲を高める。 3 児童の成長の基盤となる生活習慣について、主体的実践的な態度の育成に向けた取組の充実を図る。	○授業だけでなく各取組等においても児童が目標を設定し、振り返ることを通して次につながる意欲を高めた。 ○家庭と連携し基本的な生活習慣の確立に向けて目標をもちながら取り組むことができた。 ○保護者アンケート「基本的な生活習慣の確立」の問いに対し「よくあてはまる」前年度比+8となった。
特別支援教育	1 児童一人ひとりの実態に応じた適切な支援を行う。 2 特別支援コーディネーターを中心とした組織体制の充実を図る。	1 すべての児童にとっての学びやすさ、生活のしやすさにつながる教育環境を整備する。 2 組織的なアセスメントを行った上で、支援を要する児童の教育的ニーズに応じた支援内容を検討し、保護者・児童と目標を共有しながら支援の工夫改善を図る。 3 特別支援コーディネーターを中心として関係機関と連携を進めるとともに、校内組織の機能化を図り、個に応じた支援の質の向上を図る。	○定期的な校内委員会や必要に応じてケース会議を開催し、個のニーズに応じた支援について検討し、全教職員で共有しながらすすめることができた。 ○年間を通じた保護者との懇談を通して、児童や保護者と目標を共有しながら指導計画と教育支援計画の見直しを図った。 △保護者アンケート「きめ細やかな支援」の問いに対し、「わからない・（あまり）あてはまらない」前年度比±0。
開かれた学校づくり	1 丁寧で分かりやすい情報発信と積極的な学校公開を進める。 2 PTA・地域との関係機関等との連携を強化する。	1 学校だよりや学級通信、ホームページ等で、学校の様子を発信するなど積極的な学校公開を行う。 2 PTAや地域の人材や関係機関等との連携を強化し、学校行事や授業参観を促進する。	○月1回の学校だより、ホームページの更新による情報発信を行った。 ○保護者アンケート「情報発信と学校公開」の問いに対し「よくあてはまる」前年度比+19、「PTA・地域との連携」の問いに対し「よくあてはまる」前年度比+16となった。
次年度に向けた改善の方向性	・「未来を拓く学校づくり」推進事業における研究を踏まえた実践研究の更なる推進 ・「学びのパスポート」質問紙の分析を活用した探求的な学びへの授業の質的転換 ・個別最適な学習に繋ぐICT機器の効果的な活用の更なる推進 ・「振り返り」活動を位置付けた児童の創造的かつ主体的な活動の取組 ・家庭や地域への丁寧で分かりやすい情報発信と学校公開		

(別紙様式1)

令和5年度学校評価自己評価報告

学校名〔京丹後市立網野南小学校〕

学校経営方針(中期経営目標)		前年度の成果と課題		本年度学校経営の重点(短期経営目標)
網野学園基本方針より 1 落ち着いた学校、落ち着いた授業により学力を付ける。 2 規範意識を醸成し、思いやりをもち仲間と共に生きる豊かな人間関係を築く力を育てる。 3 すべての子どもに、未来を展望し、自ら将来を切り拓く力を付ける。 4 自然・人・社会とつながり、郷土を愛する心を育てる。		○ペア・グループ活動を通した学び合いによる課題解決力や学習意欲の向上 ○非認知能力育成の研究による身に付けさせたい力の明確化と授業改善 ○異年齢活動を通したよい関係づくりと高学年のリーダー性の高まり ○保護者・地域と連携した安心・安全な登下校の確保 △読み解く力、活用力を高める授業 △規範意識の醸成 △家庭と連携した家庭学習や生活習慣確立の取組の充実		○みんなと学び合う学校 ・自分の考えをもち、他者に伝えたり話を聴いたりすることができる子の育成 ・仲間と共に力を高め合う子の育成 ○仲間とつながり合う学校 ・進んでチャレンジし、やり抜く子の育成 ・仲間と問題を解決しようとする子の育成 ○居心地のよい学校 ・人を思いやり大切にする子の育成 ・よさや違い、多様性を認めることができる子の育成 ○信頼される学校
評価項目	重点目標	具体的方策		成果と課題(自己評価)
学校教育指導の重点、及び各学園の重点等、保幼小中一貫教育の諸計画	教育課程 学習指導	・日々の様子や学力テスト等の結果から個々の実態を把握し、課題に迫る授業とその評価を行う。 ・授業や家庭学習にICTを効果的に活用し、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を充実させる。 ・教科指導と生徒指導4機能を一体化させた授業づくりに取り組む。 ・教科横断的なカリキュラム・マネジメントを行い、地域教材を生かした探究的な学びを充実させる。 ・認知能力と非認知能力を一体的にはぐくむ授業の研究を行う。		○学力充実月間を設定し、研究授業を通して授業の改善点を整理したり、ICTの活用や計算力向上、家庭学習充実の取組みを行ったりして、主体的に学ぼうとする力を高めることができた。 ○認知能力と非認知能力を一体的にはぐくむ授業の研究が進み、育てたい力や大切にしたいことが明確になってきた。 △探究的な学びを意識した丹後学を仕組み実践することに課題があり、充実を図るためには計画的な研修も必要だった。
	生徒指導	・学級活動や異年齢活動を大切に、児童が安全・安心できる居場所やよりよい人間関係をつくるよう取り組む。 ・道徳教育や人権教育、国際理解教育、特別支援教育等を通して、個々のよさや多様性を認め合う心、思いやりや人権尊重の心を育てる。 ・教育活動を通して、児童の個性の発見、よさや可能性の伸長、社会性の発達を支援する。(発達支持的生徒指導の実践) ・早期に発見し対応できるよう、日頃から変化への気付きと情報共有に心掛け、組織的な動きを基本にする。(課題予防的生徒指導の実践)		○運動会や大縄大会、掃除等で異年齢活動を充実させ、高学年のリーダー性を高め、だれもが参加しやすくよりよい関係を築きくことができた。 ○日常的に教職員間で情報共有を行い、児童の様子や変化に早期に気付き、丁寧に対応することに努めた。 △不登校や別室登校の児童がおり、状況を常に確認しながら組織的に対応を行ってきたが、前進はしているものの解消には至っていない。

健康（体育）・安全	・進んでチャレンジし、やり抜く力を付ける。	・実態調査結果等を示しながら家庭と連携を図り、よりよい生活習慣の確立に取り組む。 ・外部講師を招いての専門性を生かした交通教室・非行防止教室・薬物乱用防止教室や訓練等を計画的に実施し、安全に対する意識を高める。 ・自分の目標に向かって粘り強くやり抜く経験と肯定的評価を重ね、自発的・主体的な力を伸ばす。	○長期休業明けを機会に、非認知能力を高めて生活習慣の定着を図れるよう家庭と共に取り組んだ。 ○交通安全や非行防止、薬物乱用防止、性被害防止の学習時には外部講師を招聘し、安全な生活について事例を交えながら学ぶことができた。 △熱中症の対策を強化すると、目標を決めて粘り強くやり遂げる持久走の取組みは厳しく、ねらいや方法等を見直していく必要がある。 △講師を招聘した火災や不審者対応の訓練ができていない。
情報活用能力（ICT活用）	・情報活用能力を伸ばす。 ・ICTを効果的に活用できる実践力を高める。	・ルールや約束事を理解した上で適切に使用したり、得た情報を活用したりできるよう、経験を通して児童に身に付けさせる。 ・目的を明確にしてICTを授業や家庭学習に活用し、その効果を把握し検証する。 ・授業に効果的に活用できるよう教職員研修や実践交流を行い、実践力を高める。 ・PTA活動と連携しながら、家庭でのメディアコントロールを高める取組を進める。	○タブレットを持ち帰り、個に応じたドリル学習等を家庭でも活用することが増えた。 ○各担任が試行錯誤しながら授業におけるICTの活用を実践するとともに、その交流を通して効果的な活用を学び合い、実践に生かすようにした。 △情報機器使用に関する状況調査の結果、本校児童の課題は大きい。児童や家庭へ実態を知らせ、より具体的に改善の取組を行う必要がある。
特別支援教育	・個の教育的ニーズに応じた指導・支援を実践する。 ・組織体制整備と機能化を充実させる。 ・よさや違い、多様性を認め合える心を育てる。	・特別支援教育コーディネーターを中心に、児童の実態把握や特性の理解、指導の方向性を全教職員で確認し合い、より適切な指導・支援を行う。 ・組織的な体制を整え、短・中・長期の目標を明らかにして支援計画や指導計画等を作成し実践する。 ・理解教育やすべての教育活動の場面を通して個のよさや違い、多様性に気づかせ、互いの頑張りを認め合い共に学び合おうとする心と態度を育てる。	○理解教育や人権教育を通して、個々のよさや違いを認め合うことの大切さを伝え、実践力を高めてきた。 ○毎週部会をもち、児童の実態を把握しながら指導や支援の方向性や手立てを検討し、全体で共有しながら進められた。 △保護者の思いに寄り添いながら、迅速で丁寧な対応を心掛ける。
次年度に向けた改善の方向性	○非認知能力を高める取組をさらに充実させ、本校課題の「仲間とつながる力、粘り強く取り組む力、チャレンジする力」を高めることができるかの見取りや検証、認知能力の向上との関係性を追究する。 ○課題や問題に自ら向き合い、解決していく過程を楽しみながら体験し、結果や答えを導き出していく授業づくりを大切にする。 ○個々のよさや違いを教職員も児童も認め合い、活動等をとおしてよりよい関係を築き、安全かつ安心して登校できて居場所がある学校づくり、学級づくりに取り組む。 ○保護者や地域、外部の方々と連携して児童を守り、育てる。		

(別紙様式1)

令和5年度学校評価自己評価報告

学校名〔京丹後市立島津小学校〕

学校経営方針(中期経営目標)		前年度の成果と課題	本年度学校経営の重点(短期経営目標)
1 落ち着いた学校、学び合いのある授業により学力を付ける。 2 規範意識を醸成し、思いやりをもち仲間と共に生きる、豊かな人間関係を築く力を育てる。 3 すべての子どもに、未来を展望し、自ら将来を切り拓く力を付ける。 4 自然・人・社会とのつながり、郷土を愛する心を育てる。		○行事や学習など様々な場面で意欲的に活動する姿が見られた。不登校児も無く、多くの子どもたちが伸び伸びと生活できている。 ○今まで島津小学校で大切に指導してきたことが伝統として子どもたちに引き継がれてきている。(反応・関わり・自分事・ATV・BMW) ○学校全体として、教職員も子どもたちも一体となって取組を進めることができた。 △読書活動を高めたり、個別最適な学びで思考を深めたりする授業実践を進めていく。	生き生きと学び、いつでもどこでも児童が輝く楽しい学校～子どもたちに力をつける～ 1 「未来を拓く学校づくり」推進事業をもとに「認知能力と「非認知能力」を一体的に育む教育を推進する。 2 全ての教育活動において短期目標(合言葉)を位置づけ、「島小システム」による学校経営を進める。 3 教職員が安心して気持ちよく働ける職場にするとともに適材適所で校務を分掌させ、相互に関わり合いながら組織的に機能させる。
評価項目	重点目標	具体的方策	成果と課題(自己評価)
学校教育指導の重点、各学園の重点等を基盤として 学校 教育 指導 の 重 点 、 保 幼 小 中 一 貫 教 育 の 諸 計 画 及 び	教育課程 学習指導	・学園で目指す「これだけは!」を基に、育成したい非認知能力の行動指標が達成できるよう取組を進める。 ・基礎基本の徹底を図り、常に「やってみたい」「できた」「わかった」を大切に、意欲を高める授業を行う。 ・自ら考える力を伸ばすために、課題に出会う場面を大切にし、意欲的に疑問や問いを追究する力を育てる。 ・学園の家庭学習の手引きを基に、自分に必要な自主学習の在り方を考えさせながら家庭学習に向かわせる。 ・ICTを活用し、授業改善を進める。	○重点研究を総合的な学習の時間・生活科とし、探究的な学びとなるよう研究を進め実践を積み上げた。 ○△学年を超えて家庭学習の交流をすることで、家庭学習の目的を再認識し、質や量を改善する児童が見られたが、内容や取組方法の工夫が必要。 △非認知能力の中でも「自己調整」「積極的な関与」について育てていく。
	生徒指導	・生徒指導の4つの視点による学級づくりを進め、児童相互及び教職員との好ましい人間関係を育成する。 ・日々の子どもの様子を全教職員で見守り、情報交流を丁寧に行うことで、「いじめ」や「不登校」の芽を逃さない。また、常に起こり得ることを想定しながら危機感をもって教育活動を進める。 ・全ての計画に、短期目標(合言葉)を位置づけ実践する。 ・豊かな人間関係を育むために、異年齢活動を進める。 ・校内体制を整備し、児童の状況把握に努め、SCやSSW等外部機関と連携しながら未然防止を図るとともに、教職員の対応力を向上させるため研修の機会をもつ。	○問題事象等に、素早く丁寧に対応したことで、不登校児童も、重大ないじめ事象もない。学校が安定している。 ○合言葉は、目指す方向性がわかりやすく、取組の活性化に繋がった。 ○チームの取組や掃除で異年齢活動が活発になり児童の繋がりが深まった。 ○心の不安定な児童が見られたが、SCや家庭と連携を進めながら改善した。今後も各機関や家庭と連携し丁寧に指導を続けていく。

健康（体育）・安全	・網野学園「これだけは！」（家庭編）に基づく取組を他校と連携し進める。 ・健康の保持増進と体力の向上を図るとともに、様々な取組を通して粘り強く活動する心を育てる。 ・安全・安心な生活をいとなむための対応力を育成する。	・網野学園「これだけは！」（家庭編）に基づき、PTAに働きかけ、家庭と連携した取組みを進める。 ・当たり前のことが当たり前にできる子どもを育てるために、基本的な生活習慣や日常的な学校生活、家庭学習等の1日の流れの確立を目指して粘り強い声掛けと保護者連携を進める。 ・苦手なことでもお互いに励まし合い粘り強く頑張ったことが「よかった」と実感できる取組を仕組み、自尊感情を高める。 ・日々の生活・活動を通して「安全」について事例を教材化して考えさせ、正しく判断できるようにする。	○お便りや学級懇談会で生活点検の結果やゲーム・SNSに関する内容について啓発・交流することができた。 ○自分の課題に焦点を当てた生活点検を実施し達成感と成就感をもたせた。 △いつでも、どこでも、誰にでも気持ちよく挨拶ができる児童を育てたい。 △基本的な生活習慣に課題のある児童が固定化している。特に、ゲーム・SNS等の改善に向けて継続的な取組を行うとともに家庭との連携を図る。
情報活用能力（ICT活用）	・総合的な学習の時間を中心に探究的な学びを一層重視した授業展開を工夫する。また、全ての教科で情報活用能力を育てることを意識する。 ・タブレットを活用し、子どもたちの能力・適性や興味関心に応じた個別最適な学びと協働的な学びを充実させる。	・ICT等の情報手段を適切に用いて情報を得たり、情報を整理・比較したり、得られた情報をわかりやすく発信・伝達したり、必要に応じて保存・共有したりする学習を行う。また、情報機器の基本的な操作の習得やプログラミング的思考、情報モラル、情報セキュリティについても学ぶ機会を設定する。 ・大きな画面で分かりやすく説明する一斉指導と、個々の習熟度に合わせた問題の解答や制作などを行う個別学習や子ども達同士で教え合い学び合う場面を効果的に設定するため、自分の実践を校内に発信するとともに、研修の機会を増やす。	○総合的な学習の時間を研究とし、新たな領域に一步踏み込み試行錯誤しながら取り組んだ。体験が子どもたちの思考を揺さぶる姿が見られた。 ○△タブレットを活用して授業を行うことが増え、児童も扱い方に慣れてきている。授業改善やより効果的な使い方について更に研修を行う。 ○△市の学力対策会議に全員参加し学びを深めた。今後も研修会に参加する等自己研鑽を行い、授業改善を図る。
特別支援教育	・特別支援学級を中心にした教育活動を全校的に進める。 ・支援を必要としている児童に対して、組織的な対応を進めるとともに、児童理解の力量を高める。	・特別支援学級についての理解教育を年度当初から丁寧に進める。 ・配慮の必要な児童に対して、アセスメント、個別の支援計画、教育支援計画を作成・検討し、組織的な対応を行う。 ・外部の専門機関と連携し、特性についての理解を深めたり、研修を行う中で知見を広げたりする。	○学園で統一した様式でアセスメント等を行い、全教職員で交流することで支援の在り方を確認し、実践できた。 △個に応じた具体的な支援方法について自己研鑽及び研修で学び合うとともに、特別支援教育コーディネーターを中心とした組織体制を確立する。
次年度に向けた改善の方向性	1 第2期「未来を拓く学校づくり」推進事業をもとに、「認知能力」と「非認知能力」を一体的に育む教育を推進する。 2 探究的な学びへと質的転換を図るため、総合的な学習の時間及び生活科を重点研究とし、「主体的・対話的で深い学び」となる具体的な授業実践について更に研究を進め、学力向上を目指す。また、1人1台の端末を活用し子ども達の能力・適性や興味関心に応じた最適な学びと協働的な学びを充実させるとともに、教員のICT活用能力の向上を目指す。 3 外部の専門機関とも連携を図り、組織的・計画的な進行管理のもと教育的ニーズに応じた支援を適切に行う。		

令和5年度学校評価自己評価報告

学校名〔京丹後市立橘小学校〕

学校経営方針(中期経営目標)		前年度の成果と課題		本年度学校経営の重点(短期経営目標)
【教育目標】 「将来に夢と希望をもち、郷土を愛し、知・徳・体の能力を伸ばす児童・生徒の育成を図る教育の推進」 【目指す子ども像】 あ： 明るく元気に進んで学ぶ子 【知】 意欲的に学習に取り組む子ども み： みんななかよく支え合う子 【徳】 規範意識を持ち、仲間と支え合う子どもの：のびのび生き生きやりぬく子 【体】 粘り強く心身を鍛え、やりぬく子ども		○網野学園授業研究会を2月に本校で実施し、「未来を拓く学校づくり」に関わる研究成果を発表できた。 ○「認知能力と非認知能力の一体的な育成」を目指して、算数科を重点教科とした授業研究を深めることができた。 ○本校で育てたい非認知能力について協議し、教職員・児童で共有できる目標を設定することができた。今後、見取りや検証について協議していきたい。 ○組織的な特別支援教育を進めることで、個に応じた指導や合理的配慮により個々の児童や学級の安定が見られた。 △学力診断テスト等の分析や活用について十分な効果が得られず、方法や活用についての見直しとそれを活かした指導の改善に課題が残った。 △時間外勤務時間は、月平均4.5時間の目標を達成できたが、一部教員への負担が大きい状況があった。		【教育活動の目標】 「考えてつながり、最後までやりぬく たちっ子」の育成～目的意識と達成意欲を大切にした教育活動の推進～ 【教育活動の具現化に向けて】 た ちばなを好きになる あ ん心して自己表現できる学校を、みんなでつくる。 知： 知恵を磨く こ の成長を喜び、主体的に学ぶ力をつける。 徳： 場を大切にする。 あ い豊かな人間関係を築く力をつける。 体： なに事もやりぬく。 き り強くゴール(目標達成)を目指す力をつける。 「自立と支援の見極め」「風通しの良い職員室」 「認知能力と非認知能力の一体的な育成」 「働き方改革の推進」「学校・家庭・地域の連携」
評価項目	重点目標	具体的方策		成果と課題(自己評価)
学校教育指導の重点、各学年の重点等を基盤として 保幼小中一貫教育の諸計画及び	教育課程 学習指導	1 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、授業改善を行う。(非認知能力の育成) ・算数科を重点教科とし、研究推進部を中心とした組織的な授業研究を通して、非認知能力を育成する。 ・単元構想シートやギミックシートを活用した授業づくりを行う。 2 学力向上の取組を進める。 ・担任と専科教員、加配等の連携や、外部資源の活用により、個に応じた効果的な指導を行う。		○4回の校内授業研と、2回の学園授業研を通して、教科の指導内容と非認知能力の育成の両立を目指した研究を進めることができた。 ○網野学園共通のギミックシートや、研究推進部提案の振り返りシートの活用により、非認知能力育成のための指導の焦点化や、児童自身の非認知能力の意識を高めることができた。 △非認知能力の向上を、認知能力につながった成果として表れるようにしていく。
	生徒指導	1 豊かな人間性を育てる。 ・道徳の授業や人権学習の充実を図ることで豊かな人間性の基礎を培う。 ・地域とのつながりや外部講師等の活用により多様な人との関わりから豊かな人間性の素地を養う。 2 認め合える集団づくり ・学級経営の充実や、特別活動部、生徒指導部等の連携した取組によって、異年齢集団活動を通じた豊かな関わりを経験させる。 3 教育相談部、生徒指導部等の連携、機能化を図り、いじめ・不登校の未然防止・早期発見・解消を行う。		○改訂された生徒指導提要について校内研修を行い、発達支持的生徒指導についての理解を深めた。 ○地域の行事に参加したり、生活科・総合的な学習の時間での地域学習を積極的に取り入れたりすることで、地域の方との関わりを通して豊かな心の育成に努めた。 ○異年齢集団の活動では、各学年の発達段階に応じた目標をもって参加させ、振り返りを大切にした活動のサイクルによって豊かな人間関係の構築に努めた。 △発達支持的生徒指導の視点をより具体化し、学級経営の中に生かしていく必要がある。

健康（体育）・安全	1 目的意識をもって粘り強く取り組む意識を育てる。	1 主体的な児童の育成 - 児童が挑戦できる場の設定や、目標をもって取り組むための支援と肯定的な評価を大切にしたい取組を進める。 - 振り返りの場を大切に、主体的な姿を価値付けることで次への意欲を高める。 2 健康の維持・体力の向上 - 生徒指導部や養護教諭等が連携し、生活リズムを整える取組を進めるとともに、生活習慣等に課題のある児童や家庭に対して丁寧な支援を行う。 - 体力づくりの取組などを通して、児童が目標達成に向けて最後まで粘り強く取り組む力を付ける。	○生活点検の取組を、非認知能力育成と関連付けて見直し、児童それぞれが目標を設定して自己の生活リズムを意識できるよう工夫した。 ○マラソン大会に向けた休み時間の体力づくりの取組を、熱中症の危険の低い朝の時間に変更し、教育活動としての目的と、安全確保の両面から活動の改善を行った。 ○異年齢集団活動（春の運動会・大縄大会）の取組では、児童による振り返りを大切に、教職員による支援と、児童の主体性を活かした活動のバランスを考えながら取組を進め、教育的効果を高めた。 △児童主体の活動を充実させることによって、自己調整能力の向上につなげていく必要がある。
特別支援教育	1 個に応じた指導と、理解教育を進め、児童が安心して学習できる学校づくりを進める。	1 特別支援コーディネーターを中心とし、特別支援教育指導員の助言も生かした組織的な特別支援教育を進め、個に応じた効果的な指導を行う。 2 全校的な理解教育を充実させ、どの児童も安心して学習できる環境づくりを進める。	○児童個々のアセスメントを丁寧に行い、必要な支援と自立のための活動を特別支援教育部の組織を通して検討、設定することによって、児童に効果的な指導を進めた。 ○人権教育とも合わせて理解教育を進め、全ての児童にとって安心安全な学校となるよう環境づくりに努めた。
情報活用能力（ICT活用）	1 ICTを活用した多様な学習とコミュニケーションの能力を高める教育活動を進める。	- ICTの活用により、児童の興味関心を引き出す授業展開を工夫することで、学力とICT活用能力の向上を目指す。 - ICT活用につながる校内研修を充実させ、教員の活用能力を引き上げる。 - タブレットの持ち帰り学習を効果的に行うため、活用の幅を広げるとともに、児童への情報モラルについての指導を進める。	○ICTの利活用について校内研修を充実させ、夏休みを機にタブレットのオンラインによる持ち帰り学習を全学年で実施できるように取り組んだ。 ○ドリルタイムを使った全校一斉の漢字学習の取組を、プリントとタブレットの日替わりとすることや、隙間の時間を使ってタイピング練習の時間を設定することで、授業でのタブレットを使ったコミュニケーションスキルの向上に取り組んだ。 △校内研修を更に充実させ、教員のICT活用のスキルを向上させると同時に、授業の中での活用の幅を広げていく。
次年度に向けた改善の方向性	- 非認知能力を生かした主体的な学習活動と、目標の設定や振り返りの活用による非認知能力の向上に取り組む - 特別支援教育と人権教育を充実させ、理解教育を進めることで、児童が安心して学べる環境を整える。 - 教職員の人権感覚を高め、人権学習を柱としたより良い人間関係づくりの取組を進める。 - 生徒指導の4つのポイントを大切にしたい主体的な活動の場を生み出せるよう行事・取組を工夫する。 - 校内の重点研究を充実させ、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を進める。 - 基礎的・基本的な内容の定着を図り、学力課題の克服を目指す。		

(別紙様式1)

令和5年度学校評価自己評価報告

学校名〔京丹後市立丹後小学校〕

学校経営方針(中期経営目標)		前年度の成果と課題	本年度学校経営の重点(短期経営目標)
教育目標 (丹後学園共通) 「夢と希望と創造性あふれる豊かな心を持ち、 未来に向けて主体的に生きる子どもの育成」 ＜目指す学校像＞ 1 よく考え学ぶ学校 2 友だちと仲良くする学校 3 最後まで粘り強く努力する学校 4 家庭・地域のつながりを生かした学校		○研究推進部を中心に、京丹後市保幼小中一貫教育授業研究会を1つのチャンスと捉え、全学年で研究授業を行うなど授業改善に向けて全教職員で取り組めた。 ○タブレット持ち帰り学習や、ICT 機器を有効に活用した授業づくりを進めることができた。 △「主体的・対話的で深い学びの授業づくり」を目指して授業研究等に取り組み、一定の成果が得られたが、引き続き取り組んでいく必要がある。 △教育相談部を中心に不登校の未然防止や解消に努力を重ねてきたが、引き続き組織的に取り組む必要がある。	・再配置5年目となる丹後小学校が、安定した学校運営ができるように教職員全員でベクトルを合わせて取り組む。 ・認知能力と非認知能力の両面を見据えた確かな学力の育成を図る。 ・授業に生かす ICT 機器の有効な使い方の研究や、オンラインによるタブレットの持ち帰り学習の充実を図る。
評価項目	重点目標	具体的方策	成果と課題 (自己評価)
諸計画及び各学園の重点、保幼小中一貫教育の 学校教育指導の重点、学習指導	教育課程 学習指導	・「自ら学び、認め合い、高め合う児童の育成」を目指して、教科の指導と生徒指導が一体化させた授業づくりを進める。 ・各教科の授業において、自分の考えの発言や対話、言語活動を重視した指導を行う。 ・タブレットや電子黒板等の ICT 機器の有効な使い方を研究し、効果的に活用した授業づくりを進める。 ・オンラインによるタブレットの持ち帰り学習の充実を図る。	○授業研究部を中心に、教科の指導と生徒指導の実践上の4つの視点を一体化させることの視点を常に取り入れながら、全学年で研究授業を行うなど、確かな学力の育成に向けて全教職員で取り組めた。 ○校内研修等を行い、ICT 機器を有効に活用した授業づくりの研究やオンラインによるタブレット持ち帰り学習を進めることができた。 △引き続き、確かな学力の育成に向けて取組を進める。
	生徒指導	・丹後学園の生活のきまりを守り、教師が児童の良さをまた児童同士がお互いの良さを学級活動や多様な異年齢集団での活動の中で、意識して伝えることで自己肯定感を高め、明るく積極的な態度を促進させる。 ・不登校・いじめの未然防止のために教育相談部を中心にアンテナを高くはり、情報を共有する中で、組織的な対応をチームで行う。	○「安心・安全な学校づくり」を大切にすることを常に発信し、一方的に「させる」のではなく、子供たち自らが作り上げるようにするために、「支える」ことを大切にしている指導を全教職員で進めた。 △教育相談部と生徒指導部を中心に不登校やいじめの未然防止等に努力を重ねてきたが、引き続き組織的に取り組む必要がある。

健康（体育）・安全	・全校的な体力にかかわる取組の充実と積極的な児童への指導を行い、学校を休まない強い体をつくる。 ・困難なことにも粘り強く挑戦していこうとする態度を育成する。	・運動会やマラソン大会等の行事と絡めながら、期間を決め計画的に体力向上の取組を全校で実施する。 ・体力テストの分析を行い、指導に生かす。 ・学級、学校での取組において個々のめざす目標を発達段階に応じて明確にしながら、ねばり強く挑戦する態度を高める。	○中間休みの体力づくりでは、マラソン大会に向けて、中間休みに5分間マラソンに取り組む等、体力の向上を目指した。 ○運動会やマラソン大会、スケート教室、小学校駅伝大会への取組、大縄大会等、感染症対策も行いながら実施することが出来、児童の力をつける取組になった。
危機管理	・3つの安全（生活・交通・災害）を大切にし、安心して安全な学校生活を送らせる。	・登下校時のにこにこカーの運行や、学校支援ボランティアとの連携により安全な登下校につなげる。 ・登下校のみならず、校内外のきまりを守らせ、交通安全を含めた安全指導の徹底を図る。 ・校内の危険箇所点検を行い、適宜、修繕などを行うことで教育環境を整える。 ・感染症の予防対策を徹底し、児童が安心して学校生活が送れるようにする。	○登下校時等に、にこにこカーによる校区内の巡回指導や学校支援ボランティアとの連携を行う事により、交通事故の発生等を抑えることができた。 ○新型コロナウイルス感染症が5類に移行する中で、校内の状況をみながらその都度感染症等の適切な対応を行い、児童が安心して学校生活が送れるように取り組んだ。 △校内の危険箇所の点検を行い修繕に努めたが、塩害による施設の劣化が激しく、修繕が追いつかない状況である。
開かれた学校づくり	・丁寧で分かりやすいタイムリーな情報発信を行う。 ・PTA・地域の関係諸機関等と連携した取組を強化する。 ・地域の人材、学校支援ボランティア等、外部人材の積極的な活用を図る。	・学校便り、学級通信、ホームページ等により学校の取組や様子をタイムリーに積極的に発信する。 ・PTAをはじめ関係諸機関等との連絡を密に取り、協力を得る。 ・地域の人材、学校支援ボランティア等、外部人材の積極的な活用を図り、教育活動の活性化と充実を図る。 ・読み聞かせボランティア・図書館指導員により、読書への興味を高め本好きな児童を増やす。	○学校便り、学級通信、ホームページの発信等により学校の取組や様子をタイムリーに発信する事ができた。 ○PTA本部を中心に、PTA活動を大変積極的に行っていただき、会員や児童にとっても有意義であった。 ○△学校支援ボランティア等、地域人材を積極的に活用し、学習効果をあげることができたが、特に3学期に入って、新型コロナウイルス感染症等の影響で制限された事もあった。
次年度に向けた改善の方向性	・生徒指導の実践上の4つの視点をふまえた「主体的・対話的で、深い学びの授業づくり」をすすめる。 ・児童の主体的な活動を通して、意欲と自己肯定感を高める。 ・非認知能力の研究を本校児童の実態と合わせて行い、児童に付けたい3つの力の育成や授業改善に生かす。		

(別紙様式1)

令和5年度学校評価自己評価報告

学校名〔京丹後市立宇川小学校〕

学校経営方針(中期経営目標)		前年度の成果と課題	本年度学校経営の重点(短期経営目標)
夢と希望と創造性あふれる豊かな心を持ち、未来に向けて主体的に生きる子どもの育成 ○目指す子ども像 (1)言葉で伝え合い、主体的に学ぶ子(知) (2)自分を大切にし、人を思いやれる子(徳) (3)ねばり強く身体を鍛える子(体)		○国語科を重点教科とし、主体的・対話的で深い学びの実現を目指した授業研究を、市の保幼小中一貫教育授業研究会の開催も視野に入れて推進できた。校内のみならず学園全体で協働的に実践をすすめられたことは大きな財産となった。また、例年行なっている学力向上の取組を確実に実施できた。少人数学級の良さを活かした学級経営や教育活動を推進できた △素直で気持ちの優しい児童の育成が進む一方、積極性に欠けたりコミュニケーション能力に課題のある児童も一定数いたりする。今後の課題でもある。 △学力については引き続き大きな課題として取り組む必要がある。個別最適な学びの実現により、誰もがわかる喜びやできる楽しさを味わうことのできる授業改善を追究する。	◇学習指導要領の目指す学力の伸長を目指し、さらに ICT 機器を効果的に活用した授業改善とともに、個別最適な学び・探究的な学習活動の増進に全校体制で取り組み、未来に生きる力の基盤づくりの取組を行う。 ◇家庭学習でのオンラインでのタブレット活用を活性化させる。 ◇子どもたちにとって安全で安心して過ごせる学校運営に努める。(いじめの解消、不登校の未然防止、人間関係、環境面) ◇特別活動や異年齢活動など子どもたちが活躍できる場面において、主体性・積極性を育み、互いを思いあえる楽しい教育活動を推進する。 ◇へき地・小規模校の特性を生かし、地域と連携した特色ある学校づくりを行う。
評価項目	重点目標	具体的方策	成果と課題(自己評価)
学校教育指導の重点、保幼小中一貫教育の諸計画及び各学園の重点等を基盤とし	教育課程 学習指導 1 「できる喜び」「わかる楽しさ」を実感できる授業、主体的・対話的で深い学びを実現する授業を目指し、学力の定着・向上を目指す。 2 少人数であることの特性を生かし、個別最適な学びと協働的な学びの両立を目指す。 3 タブレット端末の活用と探究型学習の基礎を培う。	1 国語科を重点教科とした授業研究を全学級で実施し、モデルカリキュラムに示された“育てたい力”を育成する成果と手法を全ての授業実践に波及させることで、児童一人ひとりの確かな学力を育成するための授業改善を進める。 2 個々の学力課題を丁寧に分析し、児童の困り感に寄り添った指導を推進する。 3 読書活動、家庭学習の質の向上、ドリルタイムの充実などを図り、学力のベースづくりを継続的に行う。 4 家庭学習でのタブレット活用と家庭学習の在り方について研究を進める。	1 全学級において研究授業を実施し、国語科教育の指導研究並びに主体的・対話的な学びへの授業改善の取組を前進させた。学力充実に関する取組とも連携したタブレット端末の利活用や基礎学力の定着・向上を目指した取組を継続して取り組むことができた。(かがやきノート、計算チャレンジ、いつでも持ち帰り可、タイピングスキルアップ等) 2 高学年においては家庭学習への取り組み方の質的転換を図った。やらされる宿題から児童自ら取り組む家庭学習へシフトすることで、児童の家庭学習への意識改革を進めた。

生徒指導	1 自己有用感と自己肯定感の醸成を図り、進んで学校生活に関わろうとする態度を育成する。 2 人権意識の高揚と規範意識の醸成を目指す。 3 個に応じた支援の充実による状況改善を推進する。	1 特別活動や異年齢集団活動を通して、互いを認め合うことのできる望ましい人間関係を構築させる。 2 研修を充実させ、いじめ防止の取組を年間を通じて行うことで、いじめの早期発見・解消と安心できる友達関係を構築させる。 3 誰一人の取り残すことのないよう、個別の状況について分析・理解し、組織的な対応を行う。	1 児童自らが楽しく取り組むことを重んじた指導により、児童会・委員会活動がよりを推進することで、より活発で主体的に活動できる児童が増えた。 2 生徒指導提要の基本研修を実施し、現代の指導課題に合わせた生徒指導の在り方について、改訂生徒指導提要を使った研修を実施できた。 3 いじめ対策委の開催により、いやな思いをしている事象への早期対応ができた。
健康（体育）・安全	1 体力の向上と基本的な生活習慣づくり 2 安全に生活するための知識と判断力を身につけさせる。 3 将来の夢や希望に向かって何事にも粘り強く取り組むことのできるこころとからだを育てる。	1 体育科の授業や体力づくりの取組、外遊びの奨励を行い、健康に過ごせる体力づくりを行い、体力の向上を図る。「げんき貯金」の取組を計画的に行い望ましい生活習慣を身につけさせる。 2 日常の学校生活の中で健康に関する取組を継続して行い、健康に関する知識と判断力を身につけさせる。 3 キャリアパスポートなどの活用で、自分の将来に目を向けさせ、目標に向かって日々努力する大切さに気づかせる。	1 合同体育や休み時間等を使った5分間走、短縄跳びの取組を通して、基礎体力を向上させる取組を計画的に実施できた。 2 バドミントンや特活の外遊び GOGO キャンペーン、計画的な全校遊び等を実施し、全校みんなが楽しく遊びに集うことで明るい学校風土と外遊びや多様な遊びを奨励できた。 3 げんき貯金の取組では、基本的生活習慣の確立を図ると共に学年ごとに成果や課題を保護者に啓発できた。
特別支援教育	1 教育的ニーズや特性に応じた指導・支援を計画的・組織的に推進する。	1 サポート委員会を中心にした組織的で継続的な支援体制と見守り活動を、関係機関との連携を密に取りながら行う。	1 すくすく（特別支援・教育相談・教育支援）部会を開催し、SC・SSW との連携や家庭との懇談など組織的対応を推進した。
特色ある学校づくり	1 へき地小規模校の特性を生かし地域と連携した教育活動を進め、未来を展望できる児童を育成する。	1 総合的な学習の時間や生活科の授業などに地域教材・地域人材などを活用した学習を取り入れる。地域社会との交流や情報発信に努める。	1 アフターコロナとなり、海での遠泳やチーム遠足、地域を学習の場とし地域を学ぶ校外学習やG Tを招聘しての地域学習などを昨年度より多く実施できた。
次年度に向けた改善の方向性	・児童が学習の主体となる授業の質的転換の研究、さらに安心・安全な学校運営により、学力向上や生きる力の育成と児童の主体性や協働性を高め、少人数学級のよさを生かした学習活動とICT活用も取り入れた授業改善を目指す。 ・コミュニケーション能力・非認知能力を高め、自己表現のできる児童を育成する。 ・生徒指導推進上の4つの留意点を教育活動の基盤におき、社会性やコミュニケーション能力の育成を推進する。		

(別紙様式1)

令和5年度学校評価自己評価報告

学校名〔京丹後市立吉野小学校〕

学校経営方針(中期経営目標)		前年度の成果と課題	本年度学校経営の重点(短期経営目標)
1 生徒指導の実践上の視点を生かした授業づくりを推進し、生きる力の確実な習得と、言語能力を高め、課題解決に向けて思考力を育む教育の推進 2 主体的に行動できる力と豊かな人間性を育み、個々が大切にされる心の教育を推進する。 3 学園の保幼小中一貫教育を、校種間における様々な取組等を充実させながら推進する。 4 家庭、地域とつながり、信頼される学校、特色のある学校づくりを推進する。		○年間を通じて生徒指導の3機能を生かした授業づくりを意識し、安定した学級経営を進めた。 ○全学級で研究授業を行うことで、経験の浅い教職員の授業力の向上につながった。 ○ICTを活用した授業は定着してきたが、家庭学で効果的な活用について研究・研修を深める必要がある。 ○全学級研究授業に取り組むことができた。センターの出前講座を3回実施し、授業づくり、ICTの効果的な活用等について学ぶことができた。 △課題が見られる学級等へは関係分掌を中心に組織的な対応をとることができた。	1 児童の小さな変化を全教職員で共有すると共に、生徒指導の実践上の視点を生かした授業を基盤とした学級経営について、具体的な研修を行う。 2 発達課題のある児童が多い実態の中、ICTを効果的に活用し、児童が意欲的に授業に向かえるようにしていく。また、家庭学習での効果的な活用方法についての研究・研修を行う。 3 学校適正配置に向けて小小連携の充実等、弥栄学園保幼小中一貫教育の更なる充実を図る。 4 教育活動について効果的な情報発信を行う。
評価項目	重点目標	具体的方策	成果と課題(自己評価)
学校教育指導の重点、保幼小中一貫教育の諸計画及び各学園の重点等を基盤として	教育課程 学習指導	1 生徒指導の実践上の視点を全ての教育課程に取り込んだ授業改善と学級経営を推進する。 (1) 心理的安心・安全のある学級づくりと授業づくりを通して、児童の学習意欲の向上を図る。 (2) 安定した授業スタイルの定着を図る。 2 個別最適な学び・協働的な学びにつながる授業づくりの実践 (1) ICTを効果的に活用した授業づくりとICTの活用に係る研修の実施 (2) 出前講座の活用(国語)	○年度当初は、個々の学級で落ち着いた雰囲気が見られたが教育相談部、生徒指導部を中心に児童の変化を捉え、全体での情報共有を図り、早期に手立てを打つことで、児童が安心した中で、授業が行えている。 ○「教え込む授業」から「自ら考える授業」「協力して改題に取り組む授業」への改善が校内での授業研究会を通して進んできている。 ○△ICTの効果的な活用について、活用方法、利便性についての紹介を進めることで、授業や家庭学習での活用頻度が増加するなど一定の改善がみられるようになった。
	生徒指導	1 共感的な人間関係の育成 (1) 課題解決に向けて、どうすればよいかを考え合える学級経営を進める。 (2) 自分と他者の言葉で伝えあえる雰囲気のある学級づくりを進める。 2 いじめ等の未然防止や早期発見に努め、人権意識の高揚を図る。 (1) 学校適正配置に向けて好ましい人間関係の育成を図る。 (2) 学校内での情報共有体制を確立し、早期発見に努める(いじめ対策委員会の機能化)	○学級内での対話場面の設定や異年齢活動の意図的な設定により他者を理解する力の育成が進んだ。 ○学校適正配置に向けて、弥栄小学校との交流学習など小小連携を通して、両校児童同士の理解が進んだ。 △児童に寄り添った支援等が十分とは言えず、長期欠席の者を出す結果となったが、該当児童、保護者とのつながりを大切に定期的な情報共有に場を設定し、学校復帰に向けた取組を行っている。

健康（体育）・安全	1 食育の推進・健康な心と体づくりの取組 2 危機管理意識の醸成を図り、学校事故の未然防止に努める	1 年間を通した健康安全の取組を行う。 （１）食育指導と生活習慣の指導 （２）体力づくりの取組 2 教職員の危機管理意識を高め、事故等の未然防止、緊急時の迅速な対応に努める。（校内研修の実施）	○各種感染症の流行期における、注意喚起と感染拡大防止等早期対応により感染拡大を防ぐことができた。 ○コンプライアンスハンドブックを使用しての研修や受傷事故等を教材化した教職員研修や情報共有を図ることで事故等の未然防止を図る事ができた。
(A) 情報活用能力（ICT活用）	1 情報活用能力を向上・充実を図る。 2 情報モラルの育成を図る。	1 情報機器の学習における利便性や効果、活用方法についての研修を行い、教職員のスキルの向上を図る。 2 情報の精査・モラル指導など活用能力の向上に向けた取組を進める。	○△授業における情報機器の活用、家庭学習などタブレット型端末の活用やロイロノートの利活用に係る研修など、学習教具、業務改善に効果的なツールとしての活用が進んだが更に使用スキルの向上が必要である。
(B) 特別支援教育	1 特別な支援が必要な児童の課題・障害に応じた支援や指導方法の充実を図る。 2 家庭や関係機関との連携を推進する。	1 支援の必要な児童の各種資料の作成し、家庭と学校が共通確認のもと、指導を進める。 2 保護者面談を丁寧に行い、本人に合った支援や合理的配慮が行えるように、関係機関も含めた連携を図る。	○支援の必要な児童についての効果的な支援の方法等、組織的に取り組むことができた。また、保護者との面談を丁寧に行い、本人の課題に合った指導をすることができた。 ○支援の必要な児童の各種資料について整理を進める事ができた。
次年度に向けた改善の方向性	・学校適正配置計画により、本年度末で閉校となるが、次年度からの弥栄小学校での教育活動に本校での成果・課題をうまく反映させ本校の児童が不安と混乱なく、新しいスタートが切れるようにしていく。 ・コミュニケーション力に課題があり、自分の思いや考えをうまく伝えられない、発信できない部分の改善を図る為に、何が必要か、どのような授業改善が効果的かについて、更に研究・実践を進める。		

(別紙様式1)

令和5年度学校評価自己評価報告

学校名〔京丹後市立弥栄小学校〕

学校経営方針(中期経営目標)		前年度の成果と課題		本年度学校経営の重点(短期経営目標)
「ふるさとを愛し、主体的に学び、心豊かで、たくましく生き抜く子どもの育成」 ・知識と技を磨き、活用する子 ・自他の良さを知り、共に伸びる子 ・心身をきたえ、何事もやりぬく子		○どの学級もタブレットを活用した授業に取り組み、すべての児童がタブレットの活用に慣れ親しんだ。 ○問題行動に対して各教員の経験値等に基づいた指導がなされがちであったが、アセスメントを行うことで多面的な理解に基づく指導が行われるようになった。 ○感染症対策をすべての行事・活動に反映させることで、健康に関する児童の意識が高まった。 ○児童の内面に働きかける指導やSSW、SC等を活用したりすることで、発達の特長を踏まえた児童理解を行う雰囲気づくり・支援体制の整備を進めた。 △保護者との連携については、学級担任の裁量によるところが大きい。働き方改革の視点から、さらに学級担任を支援するための学校体制を構築していく必要がある。		1 確かな学力の育成 2 発達支持的生徒指導 3 健やかな身体の育成 4 特別支援教育の充実 5 人権意識の高揚
評価項目	重点目標	具体的方策	成果と課題(自己評価)	
学校教育指導の重点、各学級の重点等を基盤として	教育課程 学習指導	1 学力課題に対応した取組の推進 2 各教科等における言語活動の充実 3 学園課題・学校課題克服に向けた保幼小中一貫教育の推進 4 効果的なICT利活用の推進	①学力調査における質問紙調査と教科結果の関連性・学力結果の推移等を分析して焦点化し、効果的な活用方法を検討する。 ②発達段階(低・中・高)に応じた言語活動を充実させる指導を行う。 ③保幼小中一貫教育の接続学年における一貫性・連続性のある指導の推進を図る。 ④児童がICT端末を日常的に活用できる環境づくりと並行してICT端末を効果的に活用した家庭学習(オンライン)の取組の推進を図る。	○接続学年において、特に1年生については、園で培った学びを学校生活に生かす視点を学級経営に反映させることで1年生児童の円滑な生活につながれた。 ○学力検査結果を分析し、課題を中心に教員全体で共通理解を図り、学力補充の取組につなげた。 ○「タブレット活用検討委員会」という専門部を作り、タブレットの活用や持ち帰り学習等を促進させることができた。 △どの学級も単元のまとめ学習には言語活動を取り入れるなど、その充実を図っていたが、「言語活動の充実」に関する保護者アンケートの結果は、他項目と比べて若干低い数値となった。啓発が不足していたものとする。
	生徒指導	1 自己有用感の育成 2 発達支持的生徒指導・不登校やいじめの未然防止、解決に向けた早期発見対応	①発達支持的生徒指導を基盤に子どもの意見等を取り入れた学級経営(特別活動)の推進を図る。 ②日常的に会議や職員室で児童の実態交流を行い、児童の不適応を少しでも早く発見し、問題が複雑かつ困難になる前に、チームによる支援につなげる。 ③保護者面談・家庭訪問等を積極的に行うことを通して直接、間接に信頼関係を積み重ね、問題行動の早期発見・早期対応につなげる。 ④気になる児童については、積極的にアセスメントを行い、なぜそのような状態に至ったのか、児童の示す行動や背景や要因、情報を収集して分析し、明らかにする。	○子どもの意見を積極的に取り入れる異年齢の集団活動を積極的に行うことで、多くの教員が子どもの発達を支える働きかけの重要性を認識することができた。 ○保護者との連携は、学級担任以外の教職員も電話連絡や家庭訪問を積極的に行い、学校体制を強化した。 ○「一人一人を大切にする」をキーワードに掲げ、子どもの内面理解や内面への働きかけが必要とされていることを教育相談部や特別支援教育部から発信し、児童理解を積極的に行う雰囲気づくりや体制整備に取り組み、児童の多様性を尊重する雰囲気が高まった。 △不登校傾向を示している児童に対しての様々な視点や要素を組み合わせた多角的なアセスメントを行い、対応の幅を広げているところである。

	健康（体育）・安全	1 体力づくりの推進 2 健康課題への対応	①自己のめあてをもって「やってみよう」という楽しく前向きな気持ちが生まれる体育授業の推進を図る。 ②新体力テスト結果の分析から本校における課題を把握し、課題となる運動能力を高めるための取組の推進を図る。 ③地元産食材や郷土食に係る学校給食を切り口に、食に関する知識や体験を広げ、食の選択や判断ができる力を育成するための取組の推進を図る。	○体育の時間にタブレットを活用することで、自己の運動技術を改善する機会が増え、運動に対して主体的に取り組める児童が増えた。 ○新体力テスト分析を行い、課題となる運動能力を明確にし、体育の授業に取り入れた。 △給食週間を通して重点的に食育に取り組んだが、学校給食と教科（社会科、生活科、総合的な学習）を組み合わせた実践的なカリキュラムにより、年間を通して食育を推進していく必要がある。
	特別支援教育	1 切れ目ない支援の充実 2 バランスの良い集団指導と個別支援の充実	①個別の指導計画、個別の教育支援計画を活用し、学校と保護者が将来を見据え、協働して児童を支えるための指導・支援を進めるとともに、学級担任以外の教員等と共通理解を図り、その協力を求めるための効果的なツールとして活用を図る。 ②日常的に通常学級担任等と通級指導担当と情報を共有し、通級による指導を通常学級での指導に生かす視点を持つ。 ③生徒指導部と連携し、未然防止の観点から個別支援と集団指導の2つの視点での対応を進めるとともに、発達障害等について考慮すべき事象に関しては、指導により自覚を促すやり方ではなく、きっかけや前後関係も含めて要因を分析し、児童の適切な行動変容へとつなげる。	○特別支援学級に在籍する児童を中心に、個別の指導計画、個別の教育支援計画等も活用しながら保護者に学校での取組や対応を明確に伝えることができた。 ○学級担任と常に情報交換を行い、通級指導教室による指導が学級においても継続されるように連携を図ることができた。 ○児童課題に対して、家庭環境・生育歴等からもアプローチすることにより、児童の多様性を尊重した指導が行われている。 △個別の指導計画、個別の教育支援計画の活用について、すべての教職員が理解を深める時間を確保することができず、けっかてきにそれらのツールは一部の教員のみにとどまってしまった。
	人権教育	教職員の人権意識の高揚	①OJT を活用して子どもや保護者の背景にある社会構造を具体的に捉える中で、教職員としての人権感覚を磨き合う。	○子どもの内面理解や内面への働きかけが必要とされていることを教育相談部や特別支援教育部から発信し、児童理解を積極的に行う雰囲気づくりや体制整備に取り組むことで、児童の課題に対して家庭環境・生育歴等の問題にもアプローチできるようになり、児童の多様性を尊重する指導や取組が現れるようになった。
次年度に向けた改善の方向性		①働きがいがあり、かつ健康的な職場づくりを進める。（時間的な余裕を生み出す） ②日常業務を中心に OJT を意識した教職員の人材育成を推進する。 ③保幼小中一貫教育を活用して不登校の未然防止や予防を意識した学校の取組を進める。		

(別紙様式1)

令和5年度学校評価自己評価報告

学校名〔京丹後市立久美浜小学校〕

学校経営方針(中期経営目標)		前年度の成果と課題	本年度学校経営の重点(短期経営目標)
教育目標【久美浜学園全体】 「ふるさとを愛し 意欲的に学び やさしい心 をもち 根気強く努力する子どもの育成」 目指す子ども像【久美浜学園全体】 (1) 意欲的に質の高い学力を身に付けようとする子ども(知) (2) 自ら正しく判断、行動し、豊かな心を持つ子ども(徳) (3) 心身を鍛え、粘り強く最後まで、協力して取り組む子ども(体) 重点目標【久美浜学園全体】 「意欲的に生活・学習に取り組む子どもの育成」 ～子どもの実態や系統性を踏まえた指導～ 指導の重点『学力の向上』 ①基礎・基本の徹底②主体的に学ぶ力の伸長 ③家庭学習時間の確保 校訓「一生懸命」を意識した教育活動の推進 指導キーワード「ポストコロナを受け【創造と協働】」的な業務推進		○成果 目指す児童像の各学級、事業への浸透や具現化が進んだ。 教職員の強み ・コミュニケーションが取れ、助け合える 働き方の見直し ・下校早める等働き方が見直される。 研究推進の動きとして、児童の主体性が向上した。 組織的な動きとして、運営委員会の意義が大きい。 不登校傾向児童が3年続きゼロで更新された。 ◇改善点 学校業務運営上の改善点 業務推進上、「何のための取組」なのか明確化にさせる。 事業の主体となる手立てを考え、支援する。 取組の途中で交流し分掌の仕事を一人で抱えない。 担当一人に任せない。 校外研修を伝達する。 児童や保護者の事を「話し確認し合う」 早めに計画準備し、近隣で声を掛け合う。 会議や研究会でグループ協議を入れ共通理解を図る。 「学校が楽しい」との回答児童の減少。	目指す児童像【久美浜小学校】 「つながり、たくましい 一生懸命な 久美っ子」 の育成 ～将来の社会的自立へ～ 特色ある学校、を目指す。 ①「主体的・意欲的に学習する児童へ」 ＝「探究的な学び」「主体的な学び」 ・「わかった喜び」を大切にする授業づくり ②「地域とともにある学校」づくり ・子どもの元気を地域に ・学校、社会教育、地域との連携、協働 ・「久美浜を支える人づくり」の取組 ③本物に触れ、出逢う「地域に開かれた教育課程」 ・外部の方の支援、出前授業、本物にふれる体験等 ・ICT(電子黒板、タブレット等)を効果的に活用した授業づくり ④研究推進のテーマ「生き生きと表現し、主体的に学習する子どもを育成する生活科の創造」～自分・人・地域が つながり、かかわる～教育活動 ⑤京都府小学校教育研究会生活科指定校として総合と共に (京丹後市保幼小中一貫教育授業研究会で)授業作りを発信 ・京丹後市小中学校給食研究会、レポート実践校の発信 ・リーディングDXスクール事業の効果的な教育実践
評価項目	重点目標	具体的方策	成果と課題(自己評価)
学校教育指導の重点、保幼小中一貫教育の諸計画 及び各学級の重点等を基盤として	教育課程 学習指導	「主体的・意欲的に学習する児童へ」 ①生活科・総合的な学習の時間の研究推進の動きで「探究的な学び」を通し、児童に思考力判断力表現力を培う学習内容を仕組む。 ②ICT(タブレット)の活用等を関連付けた研究を目指す ③「本物に触れ、出逢う【社会に開かれた教育課程】」 外部の方の支援、出前授業、本物にふれる体験等 ④地域の人的物的資源を有効に活用させていただく。 クラブ活動、授業の外部講師、読書支援ボランティア等	○生活科・総合の研究推進で授業改善を図り教員の実践が大いに進んだ。 ○人的資源の有効活用で「本物に触れる教育」を推進し児童の心に響く実践が進み、子ども達の目の輝きが多く見られ豊かな心を育んだ。
	生徒指導	生徒指導4つの視点を土台とした学級経営 指導の重点化 ～「学び高め合う授業」と「支え認め合う学級」 ①生徒指導の4視点を生かした学級経営と授業作り ②児童の居場所・絆づくり(集団、体験活動) ③不登校傾向、いじめ等を全校一致した組織的指導 ④特性、学習進度に応じた個別最適な学びの場作り	○学園の動きと連動し生徒指導の4視点意識した動きで児童の主体的な児童会活動が一層進んだ。 △保護者、地域との連携によるあいさつを身に付けることができなかった。 △不登校傾向の未然防止に向けより一層家庭と連携していく。

健康（体育）・安全	何事も最後まであきらめずにやり通すたくましい強い心を育てる。	目指す児童「たくましい 久美っ子」につながる具体策 ① 校訓「一生懸命」を意識した教育活動を推進する。掃除を協力してする子どもを育てる。 ・根気強く、一つのことを最後まで協力して行う態度を育てる。 例 朝マラソン、縄跳び、休み時間遊び ②日常生活を当たり前により切る子どもを育てる。 5分前行動や「あいすつこうよ」：生指上の行動の本校キーワード」の具現化を一層図る。 ・基本的な生活習慣、家庭学習、日常的な学校生活等、 ③運動に親しみ、体力の向上を図る。（朝マラソン等） ④家庭と連携し、基本的な生活習慣、望ましい食習慣の育成を図る。	○朝マラソンやマラソン練習、大会からたくましく頑張ろうとしている姿がみられ伝統的な本校の強みを進められた。 ○安心安全な環境作りが進んだ。（事故災害報告なし） △家庭での生活習慣の数値が例年低いため家庭との連携が必要である。
開かれた学校づくり	社会に開かれた教育課程の実現に向けたカリキュラムマネジメントの推進を図り「地域とともに育つ学校」を目指す。	特色ある学校「地域とともにある学校」づくり本物に触れ、出逢う「地域に開かれた教育課程」 ①子どもの元気を地域に発信する ②学校、社会教育、地域との連携、協働（PTA、公民館、民生委員、区 等） ③「久美浜を支える人づくり」の取組 ④情報を関係機関、家庭・地域に適切に提供し信頼される学校づくり HP、便り等 ⑤外部の方の支援、出前授業、本物にふれる体験 等 ・ ICT（電子黒板、タブレット等）を効果的に活用した授業づくり	○研究指定の実践から「地域をテーマ」にしていることで自ずと「地域とともにある学校作り」が年間を通し実践できた。・外部講師の依頼（水源の森調査、米作り、地域調査、保育所との連携、読書ボランティア 他） △引き続き継承する。
特色ある学校づくり	研究推進のテーマ「生き生きと表現し、主体的に学習する子どもを育成する生活科の創造」～自分・人・地域がつながり、かかわる～教育活動 京都府小学校教育研究会生活科指定校として市域・府域・全国へ・（京丹後市保幼小中一貫教育授業研究会で）授業作りの発信 ・京丹後市小中学校給食研究会、レポート実践校の発信・・・ ・リーディングDXスクール事業の効果的な教育実践	①生活科指定初年度として、総合的な学習の時間と共に全学級授業公開により授業力を磨き、探究的な学びの深化を図る。 ②京丹後市保幼小中一貫教育授業研究会で発信 ③リーディングDXスクール事業を有効活用 ④HPの更新を定期的に行う。また、授業参観、PTA会議、懇談会等で積極的に情報の公開を行う。 ⑤新型コロナウイルス感染症にも継続的に配慮し今年度ならではの有機的な実践。「創造と協働」の視点 ⑥児童主体の企画・運営を率先し取り組ませる。 ⑦ICT活用を今まで以上に推進させる。家庭とオンライン、児童朝会、健康教育、保護者アンケート ⑧不登校傾向のゼロ維持のスキルを継続発展	○研究推進の動きにより教員の授業スタイルが変化し、結果子ども達自らがより主体的に課題を解決しようとする動きが活発に見られた。 ○リーディング実践により市域、学園内に広く実践を発信でき指定校の役割を若干果たすことができた。 △今後も家庭との連携を丁寧に進める。 △ICT活用の今まで以上の促進。
次年度に向けた改善の方向性	～令和6年度～ 目指す児童に向けて 私たち教職員は・・・ 重点 生活・総合の研究推進を核に、全ての教育活動において、「つながり、たくましい、久美っ子が主役で」育み、将来の社会的自立を目指します。 1. 子ども主体の授業観へ 教師が「教える」授業から学習者が「学び取る」授業へ 2. 地域・保護者の支えを生かした教育活動（「本物に触れ、出会う教育課程」） 3. 安定した学級経営：生徒指導の4つの視点を生かす 4. 特性を踏まえた支援：個別最適な学び 指導の個別化 + 学習の個性化 5. 斬新で、支え・相談し合える風通しの良い職員室 6. ICT活用をできる学年・できる教科等今まで以上：子ども主体 授業改善 7. 異年齢活動の発展継承で子ども主体の児童会活動：チーム活動 等 8. 校訓「一生懸命」を意識した教育活動		

(別紙様式1)

令和5年度学校評価自己評価報告

学校名〔京丹後市立高龍小学校〕

学校経営方針(中期経営目標)		前年度の成果と課題	本年度学校経営の重点(短期経営目標)
学習・生活に生き生き取り組むたくましい子どもの育成 ― アセスメントを踏まえた系統的な指導 ― 1 主体的に学ぶ力の伸長(授業づくり) 2 集団での学びの質の向上(学級づくり) 3 家庭学習習慣の定着		○重点研究の国語科の授業研究や個別の課題に応じた補充指導等により、児童の見える学力について一定の成果が見られた。 ○児童が落ち着いて学校生活が送れるようになり、話を聞いたり我慢強く課題に向かったりできるようになってきた。 △行為者が特定できず問題事象が連続するケースがあった。不登校児童について継続して働きかけを行っているが、改善につながりにくいケースを残した。	授業づくりと学級づくりを両輪で回し、学級経営の基盤を固める。3つの目ざす子ども像として児童・教職員・保護者への意識づけを図る。 ◇自分なりの考えをもつ子ども ◇言葉を大切に使う子ども ◇ねばり強く取り組む子ども
評価項目	重点目標	具体的方策	成果と課題(自己評価)
学校教育指導の重点、 諸計画及び各学園の重点等を基盤として 学校教育指導の重点、 諸計画及び各学園の重点等を基盤として	教育課程 学習指導 ①言葉を大切にしたい指導を行い言葉の力や粘り強く取り組む力を育てる。 ②個に応じた指導・学力補習体制を整備し、基礎・基本の定着を図る。 ③主体的に学習に向かう力、対話をする力、学習したことを自ら活かせる力を伸ばす。	①国語科を重点とし「言葉の力」を高める授業研究では、『研修を支援する』教師力向上支援事業を活用する。 ②朝ドリル、放課後補習を設定し、全校体制で基礎学力の伸長を図る。また、学習支援ボランティア等を有効に活用する。 ③ICTを有効に活用しながら、課題解決に見通しを持ったりできたことを振り返ったりして、主体性・話し合う力・既習内容を活かす力を伸ばす授業づくりを推進する。	○教師力向上支援事業を活用したことにより、重点研究を積み上げる形で整理しながら進めることができた。 ○放課後や夏休みに複数体制で補習を行い、課題改善に向けた学習指導を行うことができた。 ○書き方、家庭科など実技単元において学習支援ボランティアに入ってもらったことで、個別的なきめ細やかな指導を行うことができた。 △ICTを使うことはできたが、学び方を高めるレベルまではいかなかった。

生徒指導	①自分や友達のよさを認め合い、自己肯定感を高める。 ②友達の名前を正しく呼び、発達段階に応じた「思いやり」の心を育成する。 ③学校生活で支援を必要とする児童へのきめ細かな支援を行う。	①児童の良さががんばりを肯定的に受け止められる学級づくりを進め、一人一人の児童の自己肯定感、学校や学級での安心感につなげる。 ②中期学校目標を設定し、児童に目的や見通しのある学校生活を送らせる。また、「考えて行動することについて児童に問い続ける。 ③正しい言葉、やさしい言葉かけをしたりすることで、児童相互のつながりを深める。 ④不登校児童については、ケースに応じて情報共有と対応を行う。児童や保護者が見通しを持ったり意欲が高まったりするような働きかけを継続する。	○年間を通して、現状の課題を焦点化した目標設定によって、全校的な取組ができたことで、児童の意識が高まった。 ○「3つの児童像」は、児童に対して学期ごとに自己評価させて意識させた。主要な行事における目標にも絡ませることで、つける力が明確にされた指導につながった。 「伝える」「協力」「絆を深める」児童の達成度が高かった。 △不登校に関しては、SC・SSW・麦わらと連携を取りながら進めたが、決定的な方策を仕組むことができず、日常的な対応を続けることしかできなかった。
健康（体育）・安全	①年間を通した体力向上の取組、家庭学習の充実、生活習慣改善の指導・支援を家庭と連携して推進する。	①学園共通の家庭学習がんばり週間等の取組を活用し、家庭学習の習慣化、生活リズムの安定を図る。 ②感染症予防・事故防止については、集団生活のマナーとして必要なことを指導する。	○朝マラソン朝縄跳びは、運動会やマラソン大会とリンクさせたことにより、積極的に取り組む児童が多数だった。 △感染症による学年閉鎖をせざるを得なかった。
(A) 危機管理	①日常的な情報共有を徹底し、早期発見・早期対応を徹底する。	①管理職が積極的に情報発信することで、報告・連絡・相談・確認を教職員に徹底する。気づいたことは情報共有として取り上げ、安心安全を自ら作り出す意識を持たせる。	○素早い報告・連絡ができる体制・意識は、組織として重視されている。 △課題のアセスメントについて、児童・保護者・教員という多角的なとらえ方が弱くなりがちである。
(B) 人権教育	①教職員の人権意識の向上を図り一人一人の児童を大切にした教育活動を推進する。	①日常的に教職員や児童の言動に注意を払い、気づきを投げかける。校内研修等の充実により人権意識の高揚を図る。	○旬間・月間のような集中指導では、目標を意識した行動をとることができる。 △呼び捨て・思いやりのない言葉が少なくはない。
次年度に向けた改善の方向性	I C T利活用によって成り立っていく授業イメージを教職員で共有していく。研修等の設定により落としていく面とボトムアップで授業実践を広げていく面の両面からより確実に迫っていく。「学校として伝えたいこと」について、より適切で迅速な方法で発信していく。地域との連携の在り方について、学園運営協議会や公民館からの情報をいただきながら新たな姿を探っていく。不登校についてS C ・S S Wはもとより、行政との連携を丁寧にとりながら、改善に向けて中期的見通しをもって取り組んでいく。		

(別紙様式1)

令和5年度学校評価自己評価報告

学校名〔京丹後市立かぶと山小学校〕

学校経営方針(中期経営目標)		前年度の成果と課題		本年度学校経営の重点(短期経営目標)
1 久美浜学園教育目標 「ふるさとを愛し、意欲的に学び、やさしい心を持ち、根気強く努力する子どもの育成」 2 めざす児童像 (1) 意欲的に質の高い学力を身につけようとする子 (2) 自ら正しく判断、行動し、豊かな心をもつ子 (3) 心身を鍛え、粘り強く最後まで協力して取り組む子		1 「主体性」を発揮するための土台となる「安心感」を醸成させる。各学級における「安心・安定」「基礎学力」について具体的に取り組み、改善を目指す。 2 昨年度に実践された「かかわり合い」を視点とした教育活動を継続・充実させ、新たな取組を創造しながら、児童の「主体性」の基盤となる「安心感」の醸成を目指す。 3 「不登校」の解消に向けて、①安心感の醸成、②基礎学力の定着、③状況把握と見立ての検討に取り組んでいく。		<u>「安心感の中で失敗しても挑戦できる」学校を目指して</u> 1 「トライ&エラー」できるための安心感を醸成する。 2 正しい価値が通る落ち着いた学級経営を大切にする。 3 教育活動を通して「自分事として捉える」ことを視点とする。「振り返り(評価)」の機会の設定と充実を図る。 4 明確な目標を持ち、具体性・計画性・合意性を意識し、組織や過程を活かした教育活動の推進を目指す。 5 指導観を学び合い、コミュニケーションを大切にする。
評価項目	重点目標	具体的方策		成果と課題(自己評価)
学校教育指導の重点、 各学級の重点等を基盤として 保幼小中一貫教育の諸計画及び	教育課程 学習指導	1 主体的な学びに向けた授業づくり 2 基礎基本の定着を図る取組の充実	(1) 児童が主体性を発揮できる学習課題や単元ゴールを設定した授業づくりを推進する。 (2) 単元を見通して、取得させたい学習内容を明確にした「わかる」授業づくりを推進する。 (3) 「主体的な学び」についての評価研究を推進する。 (1) 放課後の補充学習において、異年齢での教え合い等、学び直しを含め、取組内容の工夫・改善を図る。 (2) 家庭における学習習慣及び生活習慣の確立、家庭学習の内容や取り組み方法の工夫・充実を目指す。	○単元ゴールを目指して既習内容の理解を進め、児童が主体的に取り組めるよう年間を通じて授業づくりを進め、さらには「主体的な学び」の具体的な評価の視点を研究できた。 ○他学年とのつながりと学び直しをねらい、「つながりスタディ」を各学期・週時程に位置付け、年間を通して取り組んだ。 ○各学級のタブレットの活用が浸透しつつあり、学習面・活動面等、様々な場面で活用が見られた。 △安心感を醸成させるための落ち着いた学級経営についての交流・協議を継続し、安心感の中で主体的に学ぶ力を向上させる。 △家庭学習を含め、学習習慣の確立や付けたい力を明確にした取組の検討を行う。
	生徒指導	1 安心と安定のある学級経営の充実 2 望ましい人間関係を築く力の育成 3 「いじめ」「不登校」等の未然防止に向けた日常的な指導及び相談活動の充実	(1) 生徒指導の4視点(自己存在感・共感の人間関係・自己決定の場・安心安全な風土)を活かした学級経営を推進する。 (2) 肯定的評価や価値付けの積み上げにより、お互いの良さやがんばり、失敗を受け止め、認め合える集団づくりを行う。 (1) 様々な異年齢活動や教育活動において、「つながり」を大切な視点とした内容作りを行い、児童主体の取組を通して、価値を見出したり、高学年のリーダー性を発揮させたりして、好ましい人間関係を育成する。 (1) 児童の状況を日常的に把握し、組織体制の中で情報の共有や見立て、方針を確認し取り組んでいく。 (2) 不登校の未然防止に向けて、講師を招聘する等、専門的な観点を踏まえた具体的な取組を推進する。	○きまりを増やすのではなく、児童の判断力を高める指導を大切にしてきた結果、大きな問題事象もなく、全体的に落ち着いた学校生活を送ることができた。 ○児童相互の「つながり」に視点を当てた「ペア掃除」「つながりスタディ」「きょうだい遊び」「チーム給食」等の異年齢活動を行い、互いに成長を喜び合う姿を多く見る事ができた。 △不登校傾向児童の支援・対応について、見立てと取組の工夫(本人と家庭・学校等との関係づくり等)を検討しながら、継続的に取り組む。 △学級経営に係って、「安心感の醸成」に視点を当てた校内研修を行う等、児童が安心できる学級づくりを継続する。

健康（体育）・安全	1 規則正しい生活ができ、健康で安全な生活を送ることができる児童を育成する。	(1) かかわり合いを大切にした体力づくりを行い、主体的で継続した取り組む態度を育む。 (2) SNS講習会や保健指導を年間に位置付け、メディアコントロールの力を身に付けさせ、基本的な生活習慣の確立を目指す。 (3) 登下校の安全に対して、安全ボランティアの方々との連携や定期的な通学班会等により、把握と指導を行う。	○ペア学年での朝マラソンを行い、励まし合いながら取り組み、マラソン大会当日も互いに応援し合う姿が多く見れた。また、見学者0名で参加者全員完走できた。 ○昨年度に引き続き、養護教諭による年長児へのメディアコントロール指導、3・4年生へのSNS講座等、系統的な指導ができた。 ○登校時刻の整理を、安全ボランティア・保護者・バス会社と連携して児童と共に行い、改善につなげることができた。 △通学班やその班長との連携を図り、日常的な把握と指導を継続する。
特別支援教育	1 配慮を要する児童への合理的な配慮を心がけ、適切な支援を充実させる。	(1) 配慮を必要とする児童の状況やその支援のあり方について、継続的に共通理解をしたり校内研修で深めたりする。 (2) 通常学級に在籍する支援を要する児童について、特別支援教育指導員と連携した個に応じた支援を行う。 (3) スクールカウンセラーやまなび生活アドバイザー、市臨床心理士等との外部と連携し、その専門的な見立てをもとに、配慮を要する児童への適切で有効な支援の仕方を探る。 (4) 丁寧で継続的な面談を通して、保護者と支援の方向性や今後の進路についても確認し合い、適切な就学相談を行う。 (5) 保幼小中の接続期において、具体的・有効的な状況把握や支援の継続・充実を図る。	○特別教育充実指導員の配置により、困り感をもつ児童へ細かな支援を行い、その子の意欲につなげることができた。 ○児童の支援に対して、保護者と継続的な面談を行い、具体的な状況や取組を共有し、適切な就学に結びつけることができた。 ○特別支援に係る研修（就学相談の意義・流れ等）や指導（人権教育との関連含む）を行うことで、教職員・児童の特別支援の理解を促進することができた。 △今後も、支援の必要な児童に対して、保護者と支援の方向性や具体的な取組を共有し、共に考える姿勢を継続していく。 △通級指導担当も含め、特別支援教育に係わる外部連携をより深め、多面的に児童を見立て、支援につなげる。
開かれた学校づくり	1 家庭・地域にひらかれ、家庭や地域と協働する学校づくりの推進	(1) 授業参観や行事への参加、小まめな家庭訪問や電話連絡等、保護者との連携を密にする。 (2) 学校・学級だよりやホームページを活用し、学校や児童の様子等、積極的に情報発信し理解を得る。 (3) 学校評価や保護者アンケートを計画的に実施するとともに、行事や取組の感想を活用し、学校改善に活かす。 (4) 地域の人材や資源（高等学校、企業、学校支援ボランティア等）を活用した教科学習等に取り組み、地域の方とのつながりを広げる。	○感染症の拡大はあったが、延期等の対応をしながら、行事や取組を実施することができ、肯定的評価として表れていた。 ○不定期ではあるが95回のホームページの更新を行い、26628件のアクセスがあった。(2/21現在) ○生活科や総合的な学習の時間を中心に、校区内外に出向き、地域教材や人材を活用する機会が増加した。また、各取組や学習活動等でも外部人材を活用することができた。 △外部評価や保護者アンケート等を参考にして、保護者（PTA）と学校と共有しながら改善方を検討していきたい。
次年度に向けた改善の方向性	1 これまでの久美浜学園のキーワードである「主体性」を育む土台づくりのために、「トライ&エラーができるための安心感の醸成」の経営方針を継続させる。そのために、各学級において、「安心・安定した学級経営」「基礎学力の定着」について、方針に係わる視点での校内研修等、具体的に取り組み、一歩ずつの改善を目指す。 2 本年度に実践された「つながり」を視点として教育活動を充実・定着させると共に、その「つながり」を保護者・地域・学園に広げる等、新たな取組を創造しながら、本校の教育活動の充実を目指す。 3 本校の課題である「不登校」の解消に向けて、①「つながり」を通した安心感の醸成、②「基礎学力」の定着、③教職員・児童・保護者との具体的な信頼関係づくり、④継続的な状況把握と具体的な見立ての検討、等に取り組んでいく。		

(別紙様式1)

令和5年度学校評価自己評価報告

学校名〔京丹後市立峰山中学校〕

学校経営方針(中期経営目標)		前年度の成果と課題	本年度学校経営の重点(短期経営目標)
【教育目標】 自己肯定感を持ち、自分の将来を展望し、共に学ぶ生徒の育成 【めざす生徒像】 ・意欲を持って自ら学ぶ生徒 ・思いやりのある生徒 ・進んで心と体を鍛える生徒 【重点課題】(社会的自立につなぐ教育) ・「個別最適な学び」と「協働的な学び」の充実を図り、「主体的・対話的で深い学びの実現」に向けた授業改善の推進と学力の向上 ・「探究的な学び」を通じて課題解決能力をはぐくむ教育を推進 ・つながる力を生かした豊かな人間性の育成と不登校の解消・未然防止		【授業改善と学力の向上】 ○学び合いを軸とする授業を展開することで、「話し合う活動を通じて、自分の考えを深めることができますか？」という問いに、93%の生徒が肯定的に答えるまでになっている。 △「探究的な学び」を大切にする教育活動を推進する中で、課題解決能力のさらなる育成を目指すことが大切である。 【豊かな人間性の育成と不登校の解消・未然防止】 ○不登校出現率の減少を重点として取り組み、3年度2.18%、4年度2.88%と低い値で維持できている。 △しかし、不登校の解消に至らない生徒もあり、社会的自立に向けた組織的な取組の展開が今後も重要である。	1 授業改善と学力の向上 ・「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業づくりを行い、「探究的な学び」を通じて課題解決能力をはぐくむ教育を推進する。 ・学び合いの中で主体性を引き出し、コミュニケーション能力やつながる力など、非認知能力の育成を意識した教育活動の展開を図る。 ・社会的自立につなぐための基礎学力の定着を全生徒に徹底する。 2 豊かな人間性の育成と不登校の解消・未然防止 ・豊かな人間性を育成するために教職員の人権感覚を高め、すべての生徒を大切にする言動の徹底に努める。 ・「つながる力」の育成を意識した教育活動を展開し、将来的孤立の未然防止に努めるとともに、すべての生徒に「居場所」をつくる取組を展開する。
評価項目	重点目標	具体的方策	成果と課題(自己評価)
学校教育指導の重点、諸計画及び各学園の重点等を基盤として	教育課程 学習指導	・「主体的・対話的で深い学び」と「探究的な学び」を実現する授業づくりについて、授業研究会を実施するとともに、月1回の教科部会を定例化し、授業実践力の向上をはかる。 ・学び合いの中で主体性を引き出し、話し合い、考えを深めることなどを通じて、コミュニケーション能力やつながる力などを高める。	○初めて峰山中学校で勤務する教員が多かった中で、目指す授業の姿を共有でき、「協働的な学び」を推進することができた。 ○3学期より、学習指導部会の定例化(週1回実施)を図り、アウトプットを重視する「言語活動の充実」に向けた授業づくりについて、教科部会につなぐことができた。 △「探究的な学び」につながるような振り返りの実施に不十分さを残し、授業の振り返りの工夫やタブレットを活用した家庭学習を推進することで「個別最適な学び」の充実を図る必要がある。
	生徒指導	・学級経営への支援を軸とし、発達支援的な関わりを組織的・計画的に展開する。 ・不登校の解消と未然防止に向け、SCやSSWを含む教育相談体制を確立し、組織的な対応で支援の充実を図る。 ・いじめアンケートの確実な実施とともに早期発見に向けた二者面談を計画的に実施する。	○子ども達をつなぐ関わりでの支援や「傾聴と対話」を基盤とした生徒理解を進める中で、子ども達の関係性も広がりを見せ、3学期に入り生徒間暴力が大きく減少した。 △新規不登校が大きく増加し、5%を超える出現率となった。何とか、別室での支援を丁寧に展開することで、完全不登校に至っていない生徒がほとんどである。

健康（体育）・安全	・保健教育と管理の徹底を図る。 ・安全意識の向上を図り、交通事故や学校事故の減少を図る。 ・部活動の充実と体力の向上を図る。	・「命」や「自他の心身の健康安全」に意識が及ぶ取り組みを展開する。 ・交通安全指導を繰り返し行い、交通事故防止に努める。 ・主体的に部活動に取り組むための指導を進める。	○日々の健康観察と感染防止対策で校内での感染を最小限に食い止め、年間延べ3学級の閉鎖に留めることができた。 △交通事故対策を年間を通じて実施してきたが、自転車での衝突事故が起きる等、強化する必要がある。
(A) 特別支援教育	・支援の必要な生徒への理解を深め、適切に支援するための方策を研修し、実践的指導力を高める。 ・家庭、地域、関係機関との連携を深める。	・個々の生徒の支援方策が多様化する中で、特別支援教育の研修を計画的に実施し、全ての教職員の資質・能力の向上を図る。 ・特別支援教育関係文書3点セット（アセスメントシート・個別的教育支援計画・個別の指導計画）の活用を充実させ、生徒支援を進める。	○個々の生徒のニーズに応じた支援や合理的配慮の充実等、教職員の情報共有を組織的に進め、支援の方向性を全教職員が理解することで、子ども達の安定した学校生活につながっている。 ○手話に視点を当てた活動や地域との連携を図る中で、その輪が広がりボランティアにも発展した。
(B) 人権教育	・人権問題についての理解や認識・実践力を高める。 ・教職員の人権意識の高揚を図るための手立てを組織的に展開する。	・教職員の言動について常に指摘し合える関係を構築し、「傾聴と対話」を大切にしたい、生徒がのびのびと学べる環境作りを進める。 ・「一人ひとりを大切にする」教育活動を展開するための、組織的・計画的な人権学習を実施する。	○教職員の言動について、機会ある毎に振り返り、常に生徒達を一人の人格者として認め、「傾聴と対話」を大切にしたい指導を心がけた結果、生徒達との良好な関係が築けている。 △人権週間・月間に限らず、社会の中で気になる人権に係る話題等、子ども達が考える機会を、組織的に展開できるような取組も大切である。
次年度に向けた改善の方向性	1 不登校傾向生徒に対して、将来の社会的・職業的自立につなぐ視点をしっかり持ち、家庭との連携を大切に支援していく。 2 多様な学びのスタイルを視野に入れながらも、子ども達をつなぐ視点を大切に、「主体的・対話的で深い学び」から「探究的な学び」につながる授業改善を図っていく。 3 家庭学習の状況に不十分さを残す中で、ICTを活用して、将来にわたって学び続ける生徒を育成するための取組を組織的に展開する。		

(別紙様式1)

令和5年度学校評価自己評価報告

学校名〔京丹後市立大宮中学校〕

学校経営方針(中期経営目標)		前年度の成果と課題	本年度学校経営の重点(短期経営目標)
大宮学園教育目標 「自他を尊重し、 自ら学ぶ 子どもの育成」 大宮中学校重点目標 「ふるさとを愛し、夢や希望をもって未来を切り拓く、心豊かでたくましい生徒の育成」 ～子どもたちの「がんばろう」という気持ちを引き出し高める指導を目指す～ 1 夢や希望を持って未来を切り拓く能力と実行力の育成 2 学習意欲を高める授業改善と家庭学習の定着 3 健康な体と豊かな心の教育の充実 4 信頼され、開かれた学校づくり 5 教職員の資質能力の向上 6 大宮学園保幼小中一貫教育の推進		○授業公開や授業研究会で大宮学園作成「授業づくりの視点8」「言語活用カリキュラム」「人権教育カリキュラム」の活用など授業改善を進めた。生徒にも「授業について考えるHR」などの機会を設けた結果、 生徒の「授業はわかりやすい」という肯定的な評価が高まった。 ○人権教育を基盤に生徒指導・特別活動の視点も加えながら、人権意見発表会などの取組を充実させ「 大宮中の生徒は他人の心を大切にし思いやりがある」と多くの生徒が評価 した。 ○生徒指導部会、教育相談部会を中心に、スクールカウンセラー、まなび・生活アドバイザーなどと連携し落ち着いた状況である。いじめ防止対策会議の機能強化や生徒の動きづくりなどにより「 総合的に見て良い学校・信頼できる学校」と多くの生徒・保護者が評価 している。 △キャリア教育の推進や、自ら計画を立てて学習するなど、 自主的・自発的な学習を習慣化 させ、確かな学力を確実に育成する。 △引き続き 魅力ある学校づくり を進め、不登校の 未然防止 や自らの進路を主体的にとらえ 社会的自立を目指せるよう 、家庭と連携し支援を行う。	1 学力の定着 ・「主体的・対話的で深い学び」を実現するための授業改善・授業研究 ・教科の指導と生徒指導の一体化を意識した実践により、 自ら学び、力がついたという実感を高める指導 2 生徒指導の充実、不登校の未然防止と丁寧な支援 3 人権教育を基盤とした指導の展開 4 特別支援教育の充実 ・校内体制の充実と機能化 ・個に応じた指導の充実 5 安心・安全で信頼される学校づくり ・家庭及び地域との相互連携の推進と大宮学園学校運営協議会との協働 ・外部関係機関との連携強化
評価項目	重点目標	具体的方策	成果と課題（自己評価）
諸計画及び各学年の重点等 学校教育指導の重点、保幼小中一貫教育の重点等	教育課程 学習指導 ・小中の接続期(Ⅱ期)の指導方法の研究を通じた授業改善、「言語活用カリキュラム」、「人権教育カリキュラム」等を活用した授業改善・授業研究 ・ICTの効果的な利活用 ・丹後学の研究と推進 ・自主的・自発的な学習の習慣化を目指した家庭との連携(力がついたという実感を高める)	・大宮学園保幼小中一貫教育の重点である「人権教育」と「ことばの力」の育成、特に「言語活用カリキュラム」を活用した確かな学力の育成と「人権教育カリキュラム」を活用した人権意識の醸成を指導の柱として取り組む。 ・校内研修や学園の授業研究を通して工夫・改善を進め、生徒の変容につながる継続した指導を行い、 保護者や生徒自身が力がついたと実感できるよう取り組む。 ・ICTの効果的な利活用により「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させるよう研修を行う。 ・キャリア教育の推進や、自ら計画を立てて学習するなど、 自主的・自発的な学習を習慣化させるとともに、各教科の学びが家庭でも継続するような授業づくり を進め、確かな学力を育成する。	○保護者や生徒自身が力がついたと実感できるよう取り組むことを重視した結果「中学校で学力が上がったと思う」のアンケート項目への肯定的回答が前年度より上昇。生徒+8.9%、保護者+6.2%と、いずれも全アンケート項目中で最も好転した。 ○ICTの利活用等、校内研修や学園の授業研究を通しての工夫・改善、生徒の変容につながる継続した指導により「工夫した方法で理解しやすい授業」「丁寧に教えてくれる」「わかりやすい授業」の授業に関する項目で90%以上の生徒が肯定的に評価した。 △引き続き、キャリア教育の推進や、自ら計画を立てて学習するなど、自主的・自発的な学習を習慣化させるよう、自己調整力にも着目しながら取組を進める。

生徒指導	・不登校の未然防止と早期対応、早期解決 ・組織的な生徒指導・教育相談体制の確立と連携 ・いじめの状況把握と未然防止の徹底、人権感覚の構築 ・大宮学園での連携	・引き続き魅力ある学校づくりを進め、不登校の未然防止や自らの進路を主体的にとらえ社会的自立を目指せるよう、家庭と連携し支援を行う。 ・毎週の生徒指導部会、教育相談部会を中心に、スクールカウンセラー、まなび・生活アドバイザーなどと連携し落ち着いた状況を基盤にしながら、いじめ防止対策会議の機能の強化や生徒の動きづくりなど、いじめ防止に取り組み、さらに「総合的に見て良い学校・信頼できる学校」という生徒・保護者の評価を高める。 ・学園人権・生徒指導・特別活動部会での連携により、効果のある指導・支援等、情報共有に努める。	○毎週の生徒指導・教育相談部会を中心にスクールカウンセラー、まなび・生活アドバイザー等との連携や、いじめ防止対策会議の機能強化、生徒の動きづくり等により「総合的に見て信頼できる学校・良い学校」と保護者93.4%、生徒92.7%が評価。また、人権教育を基盤に生徒指導・特別活動の視点も加えた取組により「他人の心を大切にし思いやりがある」と保護者91.0%、生徒94.4%が評価している。 △引き続き魅力ある学校づくりを進め、不登校の未然防止や自らの進路を主体的にとらえ社会的自立に向け支援する。 △改定生徒指導提要等の趣旨を十分に理解し、あるべき指導・支援について追及していく。
健康（体育）・安全	・安全教育、健康教育の充実 ・部活動の推進	・薬物乱用防止教室や非行防止教室、性の学習、ネットモラル講演会、避難訓練などの機会を設け、危機意識の醸成や自らを守る行動を考えさせるとともに、SNSの取り扱いや「大宮中学校のルール」の見直しなど、さらに生徒に考えさせる機会を設ける。 ・異年齢集団で共通の興味関心や目的意識を持ち活動することの楽しさや喜びを体得させるため、部活動指導を充実させる。	○薬物乱用防止教室や非行防止教室、性の学習、ネットモラル講演会、避難訓練などの機会を設けるとともに、部活動の充実に努めた。 ○今年度も生徒と「大宮中学校のルール」の見直しを行った。 △SNSの取り扱いについては、全校同時に人権学習の一環として特設で学習の機会を設けて指導した。引き続き、知的理解にとどまることなく、人権感覚を高めることにつながるようには必要がある。
開かれた学校づくり	・学園学校運営協議会(学園コミュニティ・スクール)、各関係機関との協働 ・地域の教育資源の教育活動への活用	・保幼小中一貫教育コーディネーター及び地域支援コーディネーターと連携し、大宮学園学校運営協議会との連携、協働を一層進め、さらに地域とともにある学校・学園を目指す。 ・各関係機関との連携を強め、情報共有を丁寧に行い、生徒及びその家庭への支援を組み立てていく。	○「教育目標・方針はわかりやすく説明されている」94.1%、「教育方針は期待に応えるものである」91.6%、「行事や参観日等、気楽に訪問できる」90.9%と肯定的に評価を得ている。 ○大宮学園学校運営協議会やPTAとの挨拶運動や地域パトロールの実施、地域人材による講話等で支援をいただいた。 △「困ったり悩んだら気軽に相談できる」の項目は73.0%（前年度比-6.8%）にとどまり、更なる連携の推進が必要である。
危機管理	・人権尊重の視点に立った指導の展開 ・コンプライアンス遵守の徹底	・教職員の人権意識の醸成を図り、人権教育をすべての指導の基盤にし、教育活動を推進する。 ・人権を大切にしたい指導・支援になっているか機会あるごとに振り返り、危機意識を持った実践を継続する。 ・小さな変化への気づきを大切にし、報告、連絡、相談を徹底する。	○人権を大切にしたい指導・支援になっているか機会あるごとに振り返り、危機意識を持った実践を継続できた。 △さらに小さな変化への気づきを大切にし、生徒・保護者の思いに寄り添った指導・支援を積み上げる。
次年度に向けた改善の方向性	1 キャリア教育の推進、自主的・自発的な学習を習慣化させるよう、自己調整力にも着目しながら取組を進めるとともに、引き続き、生徒の変容につながる継続した指導により、保護者や生徒自身が力がついたと実感できるよう取り組む。 2 人権教育・ことばの力を柱に「人権教育カリキュラム」「言語活用カリキュラム」を活用し人権意識の醸成・確かな学力育成に取り組む。 3 魅力ある学校づくりを進めることにより不登校の未然防止や自らの進路を主体的に捉え、社会的自立を目指せるよう支援する。 4 大宮学園学校運営協議会との連携、協働を一層進め、さらに地域とともにある学校・学園を目指す。		

(別紙様式1)

令和5年度学校評価自己評価報告

学校名〔京丹後市立網野中学校〕

学校経営方針(中期経営目標)		前年度の成果と課題	本年度学校経営の重点(短期経営目標)
将来に夢と希望をもち、郷土を愛し、知・徳・体の能力を伸ばす生徒の育成を図る教育の推進 1 規範意識を醸成し、落ち着いた学校、落ち着いた授業により学力を付ける。 2 未来を展望し、自ら未来を切り拓く力を付ける。 3 思いやりをもち仲間とともに生きる、豊かな人間関係を築く力を育てる。 4 自然・人・社会とつながり、郷土を愛する心を育てる。		○「未来を拓く学校づくり」推進事業1年次を学園として取り組むとともに、5回の授業研究会を通して授業づくり、授業改善を学校・学園で進めた。 ○生徒指導の4つの視点を生かした教育活動の推進及び他者とのつながりの重視、肯定的評価の積み上げ等により、いじめや暴力事象の未然防止や学校生活の安定を図ることができた。 △不登校の解決に向けて、チームでの取組、関係機関と連携した取組を進めたが、さらに組織的に対応する。 △特別な支援を要する生徒が増加する中、保護者との連携を深め、支援の充実を一層図る必要がある。	「ほめて、認めて、他者（社会）とつなぐ指導」の展開「つながろう仲間と つなげよう心を！」を生徒の合言葉に設定し、常につながりを意識させ学校生活を充実させる。 (1) 第2期「未来を拓く学校づくり」推進事業（2年次）の研究を通じた授業づくり及び授業改善 (2) 豊かな人間性の育成、規範意識の醸成 (3) 不登校の未然防止と丁寧な支援、居場所づくり (4) 特別支援教育の充実 (5) 信頼される学校づくり～家庭・地域との連携強化 (6) 網野学園学校運営協議会との協働
評価項目	重点目標	具体的方策	成果と課題（自己評価）
各学園の重点等に基づき、 学校教育指導の重点、保幼小中一貫教育の諸計画及び	教育課程 学習指導	1 授業実践力の向上 2 家庭学習時間の確保と家庭学習の習慣化 3 「未来を拓く学校づくり」推進事業を通じた研究推進 ・言語活動を効果的に位置づけ、「主体的に学ぶ力」や「コミュニケーション能力」等の育成を通して、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を進める。また、タブレットの利活用を進め、授業改善の手段にした実践研究を継続して積み重ねる。 ・学園組織を活用し、系統的に家庭学習の指導を行い、習慣化及びタブレットの効果的な活用を図る。 ・学園で作成した「育てたい非認知能力」の指標に基づき、非認知能力の育成を意識した授業づくり、授業改善を推進していく。	○第2期「未来を拓く学校づくり」推進事業に係る研究実践を通して、学園として「育てたい非認知能力（指標）」を意識した教育活動の推進に努めた。 ○非認知能力の育成に視点を置いてギミックブラッシュアップシートを活用した授業づくり、授業改善に取り組めた。 △さらに日々の授業、家庭学習の中でタブレットの利活用を効果的に進める。 △研究実践を最終年としてまとめ、学校経営に生かす。
	生徒指導	1 組織的な生徒指導体制の確立と規範意識の向上 2 いじめの状況把握と未然防止の徹底、人権意識の醸成 3 不登校の未然防止と早期対応及び解決に向けた組織的な体制づくり ・いじめ対策委員会を定期開催し、実態把握と早期対応、いじめの根絶を徹底する。 ・生徒の状況把握を共有し、教育相談部会で支援の在り方について共通確認し、チームとして生徒に寄り添う指導を展開する。生徒の居場所作りを丁寧に行う。 ・生徒指導の四機能をあらゆる教育活動の中で意識し、教員・生徒相互の取組により自己肯定感や自己有用感を育む教育を展開する。（居場所づくりと絆づくり）	○生徒指導の4つの視点を意識した生徒指導を、全教育活動を通じて組織的に推進していくことに努めた。 ○生徒指導部会や教育相談部会で生徒に係る状況を共通認識し、方向性を確認し、組織的に指導支援を行った。 △早期の実態把握と対応、改善、解消に危機感を持ち、指導や支援にあたる。 △継続して生徒や家庭との信頼関係づくりを丁寧に行っていく。

健康（体育）・安全	1 体力の向上 2 安全に対する意識の高揚と危機回避能力の育成 3 健康教育の充実 4 部活動の推進	・避難訓練、非行防止教室、薬物乱用防止教室等を活用し、自他の生命を守ることの大切さと危機回避能力を育成する。 ・新型コロナ等の感染防止に努め、安全・安心な環境づくりを進める。 ・部活動を通して、異年齢集団での共通の興味関心や目的意識を持ち活動することの楽しさや喜びを体得させる。	○学期に1回、ねらいを明確にした避難訓練を実施し、生徒、教職員の安全に対する意識の高揚を図った。 ○感染症を注視しながら、安全・安心な環境づくりを進めた。 ○非認知能力の育成について部活動でも意識して指導や支援を行うことができた。 △さまざまことを想定した実効性のある避難訓練等を実施し、さらに命を守る意識と危機回避能力の育成を図る。
特別支援教育	1 校内支援体制の機能化 2 個々の生徒や保護者のニーズの把握と支援の充実 3 個々の生徒の発達特性を踏まえた指導方法の工夫改善	・通級指導担当、教科担当、担任、関係機関との連携を強化し、校内教育支援委員会および特別支援教育部会の一層の機能化を図る。 ・生徒及びその保護者との面談を丁寧に行い、保護者の理解を図り、関係機関と連携した支援の継続に努める。 ・通常学級に在籍する支援を要する生徒も含め生徒の実態を把握し、アセスメント票、個別の指導計画、個別の教育支援計画に基づく指導・支援を充実し、有効な手立てを蓄積する。	○生徒及びその保護者との面談を丁寧に行い、保護者の理解を得ながら指導や支援を継続することができた。 ○通常学級に在籍する生徒も含め、支援を要する生徒の実態について共通認識し、指導や支援の充実に努めた。 ○医療機関、支援学校、行政機関との連携を継続してとり、指導や支援につなげた。 △さらに関係機関との連携を進め、生徒の実態や生徒・保護者のニーズにあった教育支援を充実させる。
開かれた学校づくり	1 信頼される学校づくりの推進 2 地域の教育資源の活用 3 各関係機関との連携と協働 4 学園学校運営協議会との協働	・保護者や地域に対して、誠実・迅速・丁寧な対応に努める。 ・たより、HP等を活用して情報発信に努め、積極的に生徒の頑張りがや学校の様子を伝え、地域との連携を深める。 ・各関係機関との連携を強め、生徒及びその家庭への支援を組み立てていく。 ・網野学園学校運営協議会、地域学校協働活動、地域連携による教育活動、PTAとの連携等の機会を通して、本校の教育に対する理解を図るとともに取組の改善を図る。	○ICT（iPadや連絡アプリtetoru等）の利活用を進め、連携の強化や業務改善につなげた。また、本校の生徒の頑張りがや学校の様子の積極的な発信にもつながった。 ○家庭や地域の理解が得られ、コロナ禍前の状況に戻し、総合的な学習の時間の「体験活動」等、教育活動の充実を図ることができた。 ○年間を通した17時下校等、保護者の理解も得ながら働き方改革を意識して改善を進めていくことができた。 △学校評価アンケート、網野学園評価を分析し、今後の学校経営に生かす。 △さらに、保護者や地域に対して、誠実・迅速・丁寧な対応に意識して取り組む。
次年度に向けた改善の方向性	・第2期「未来を拓く学校づくり」推進事業最終年の取組を学園一体で進めるとともに、本校の学校力の向上につなげる。 ・非認知能力の育成を研究の柱にした授業づくり、授業の改善、そして教育活動の推進を図る。 ・各関係諸機関との連携・協働を通して、生徒の自己肯定感の醸成、学校不適応や不登校の未然防止、早期対応、居場所づくりに取り組む。 ・教職員の働き方改革を推進しながらも、教育の質の向上を図る。		

(別紙様式1)

令和5年度学校評価自己評価報告

学校名〔京丹後市立丹後中学校〕

学校経営方針(中期経営目標)		前年度の成果と課題	本年度学校経営の重点(短期経営目標)
○確かな学力の育成とわかる授業づくりのための不断の工夫改善 ○豊かな心と健康な体をはぐくむ教育の充実 ○進路指導の充実 ○信頼される学校づくり ○保幼小中一貫教育の充実の推進による教育活動の充実		「本気で本物を創る」「本気で本物に挑戦する」という合言葉を学校風土として確立させ、落ち着いた学校生活が送れるとともに、学習、部活動、様々な行事等で力を発揮した。仲間を思いやる校風もしっかりしたものとなってきた。さらに、新たな時代に対応できる自己肯定感や自己有用感を高め、目的達成に希望をもって向かい、学校生活で共に協力し、高め合い、積極的に取り組む力をつけさせたい。	開校10年目にあたり、個々の生徒が本物を目指し、生き生きと挑戦する学校にする。 ～生徒と教職員が一丸となり、「本気で本物に挑戦する」を合言葉に進める～ ○生徒が自らの可能性に様々な機会を捉えて挑戦することを促す。 ○それぞれの教育活動(学習・行事・取組等々)のねらいを明確にし、生徒が自覚して行動することで、本物を目指す。
評価項目	重点目標	具体的方策	成果と課題(自己評価)
学校教育指導の重点、各学園の重点等を基盤として	教育課程 学習指導	・全ての教科でタブレットなどICT機器の活用のスキルを高め、生徒指導上の実践上の4つの視点を生かした授業改善を行い、主体的・対話的で深い学びの実現を目指す。 ・発達段階に応じた指導目標に基づき、指導と評価の一体化した取組を、ICT活用の指導を中心に進め、系統性のある一貫した授業づくりを研究する。 ・通年のドリル学習の一層の内容充実を図ることと、授業での学びとタブレットを活用した反転学習(家庭学習)を関連付け、基礎学力の定着を図る。	○タブレット活用では、教科授業に限らず、生徒会の議案書や選挙公報などのペーパーレス化、タブレットの持ち帰り学習など、生徒の自己有用感や共感的態度の育成につながった。 ○中学卒業までの10年間の各発達期の指導目標を学園で共有し、育成する資質能力をはっきりとさせ、授業内でのICT活用による評価材料の蓄積を行うなど、指導と評価の一体化が進んだ。 ○ドリル学習を5教科とし、タブレット内の学習アプリを活用し、基礎基本問題の繰り返しと家庭学習課題とを関連づけ、定着が図れた。 △予習となる学習への働きかけと指導は不足した。
	生徒指導	・業間指導における生徒への寄り添い指導や教育相談月間などを全教職員で丁寧に行い、生徒との信頼関係づくりを進めるとともに、個別最適な学習環境を整備していく。いじめ防止対策委員会を定期的に開催し、いじめ調査の結果等を基に積極的な組織的対応・指導に努める。 ・「丹後学」等を活用した生徒の協働的な活動の場の充実を図り、未来の担い手として「将来の社会的自立」に向けたキャリア教育を進める。	○生徒へ全教職員で業間の会話と指導を日常的に行い、生徒にとっての安心安全な学校生活を生み出している。いじめ防止対策委員会・生徒指導部会・教育相談部会を毎週実施し、指導の方向性を全教員へ発信するなど、学校全体で指導にあたった。学期ごとの全教員による「相談タイム」やいじめアンケート等を通して、状況把握とその指導を丁寧に行い、不登校・いじめの未然防止、早期対応につなげた。 ○学習発表会の開催や生徒総会など異年齢の意見や決意の交流の機会を設定し、生徒の視野を広げる活動を進めた。

健康（体育）・安全	・体を鍛えることで、忍耐力などの心の強さも育て、その力を学習にもつなげる。 ・安全な生活の確立に向けて、丹後学園全体で指導を行う。 ・自分や周りの人の命を守る安全教育を行う。	・新たな価値を生み出すことへの挑戦を続け、体育系・文化系部活動にかかわらず、「辛いときこそ伸びるとき」を合言葉に、豊かな心の育成を図る。 ・丹後学園一貫 PTA・丹後学園運営協議会等との連携を強め、あいさつ運動（NHD）や登下校指導を継続する。 ・生徒の安全、安心な学校生活のために、基本的な感染症予防を徹底し、指導にあたる。	○各部活動の大会、文化的な発表や作品の出展等、限られた時間を大切にしながら取り組む姿勢が生まれてきた。結果、上位入賞を果たす部活や、文化面での入賞も多くあり、成果がみられた。 ○丹後学園 P T A・丹後学園運営協議会等の協力を得て、あいさつ運動（NHD）や登下校指導を計画通り実施できた。子育て教育講演会を行い、子育てに関する学習できる場が設定できた。 △重要な課題として、子どもたちを取りまく SNS に関わる指導があげられる。丹後学園「情報モラル指導モデルカリキュラム」を活用した系統的な指導を充実させていく必要がある。感染症予防対策は概ね達成できたが、基本的な感染症予防対策は継続が必要である。
開かれた学校づくり	・保護者、地域への学校公開等を計画的に行い、地域と共にある学校教育を目指す。 ・学校・家庭・地域との相互の連携を図り、生徒の様子や学園・学校の教育活動を発信していく。 ・地域人材の積極的な活用を行う。	・様々な教育活動の参観を保護者や丹後学園運営協議会の委員など、広く地域の方々へ呼びかけ、いただくご意見や感想を学校経営に活かす。 ・「丹後学」などで丹後を元気にする提言をテーマに探究を進め、地域の取組への積極的な参加を行い、学校だより等の地域回覧・全戸配布や、学校 H P への掲載を通じて、学校教育の充実と地域の活性化の両方を目指した啓発を行う。 ・地域学校協働本部等を活用し、支援ボランティアの支援を積極的に活用する。	△学校や学園の行事や取組の広報について、学校 H P での発信が不足した。しかし、丹後学園運営協議会の委員や保護者には計画どおり案内し、可能な範囲での参観はいただいた。学校での生徒の頑張りを励ましていただける環境づくりが一定できた。 ○2 学年については、地域へ出向いての体験学習を実施した。総合の学習発表会も学年ごとに別日で開催し、探究学習の成果の発信ができた。学校 H P から学校だよりや学園だよりなどでの行事内容の発信に努めることができた。 △学校支援ボランティアの方々に継続して活用できるよう努めていきたい。今年度は読み聞かせが実施できた。全体のボランティア支援の活用は不十分であった。
特別支援教育	・人権教育をベースとして、生徒のそれぞれの特性についての理解を教職員間で共有し、一人一人の特性にあった支援を、全教育活動を通じて行う。 ・丹後学園や関係機関との連携を丁寧に行い、指導の充実を図る。	・配慮を要する生徒の背景を多面的にとらえ、個々の課題に応じた指導・支援を、保幼小中の一貫性・連続性を大切に行う。また、関係機関との連携を積極的に行い、通常学級に在籍する特別に支援を必要とする生徒についても全教職員で課題共有を大切にし、定期的に校内委員会を開催するなど、組織的な支援を行う。 ・丹後学園内の連携や専門的見立てなどをもとに、校内研修や学園研修会などの充実を図る。また、切れ目なく学ぶことができる教育を進め、子どもの自立へ向けた適切な支援により認知能力と非認知能力の一体的な育成を目指す。	○個別の指導計画・教育支援計画を年度当初に作成した。その計画に沿って、自立活動の視点を大切にしながら、個々の課題をすべての教員が共有し、指導や支援を行うことができた。また、日常的に小学校との連携を行い、個々の状況を交流し支援に活かした。また S S W を定期的に活用し、生徒の見立てについて専門的な視点から助言をいただいた。校内スクールカウンセラーからは丹後学園教育相談研修会や校内委員会で講話を実施し、教職員の指導充実に対する学習を深めることができた。 ○夏の丹後学園夏季全体研修会では、大学教授による講演「教師のための非認知能力の育て方」を聴き、教職員の学びの場を設定した。また、個々の生徒の良さや課題を共有し、適切な支援につながる連携ができた。 △関係医療機関等との連携や、校内ケース会議の充実を図るなど、支援の充実のための環境づくりと指導を一層進めていく。
次年度に向けた改善の方向性	・学園共通学習指導の重点「主体的・対話的な深い学び」につながる授業づくりを充実させ、「子どもの主体的な学びの変容」を重点とした研究を進めていく。（教師の授業改善を推進し、子どもの探究的な学びを目指す） ・活発な特別活動を重視し、行事・部活動での子どもの活動を支援できる指導体制を整え、生徒がどんなことにも「挑戦」しようとする意欲と行動力を育成する。 ・生徒ひとりひとりに寄り添う指導を組織的に行い、不安を抱えている生徒や不登校生徒が学校に来やすい環境整備と指導体制を整える。		

(別紙様式1)

令和5年度学校評価自己評価報告

学校名〔京丹後市立弥栄中学校〕

学校経営方針(中期経営目標)		前年度の成果と課題	本年度学校経営の重点(短期経営目標)
1 全教職員で、生徒・保護者との信頼関係を築くとともに、生徒・地域の実態をよくつかみ、学校の活性化に全力を注ぐ。 2 主体的に学び、たくましく心身を鍛え、人権尊重を基に人間性豊かな生徒を育む教育課程の編成と実施に努める。 3 基礎的・基本的内容の指導の徹底と定着を図る授業づくりを進める。 4 知識技能を活用し、自ら考え、判断し、表現する力を育んでいく。 5 未来を拓くために主体的に進路選択ができる能力を育てる。		「未来の担い手育成プログラム」「京丹後市保幼小中一貫教育授業研究会」の取組みによって、授業の中に課題解決型学習を取り入れるなど、指導方法の工夫改善の取組みが進み、自分の考えや思いを伝えることができる生徒が増えた。また、ICT機器の活用や教え合い学習等の取組み等で、生徒の学習意欲や基礎学力の向上が見られた。しかし、学習に対する不安や、家庭環境等の課題から不安定になる等の生徒もいる。個人面談や業間の意図的な生徒との関わりによる信頼関係の構築、SCやSSW等の専門家の助言に基づく適切な対応や指導を継続的に行う必要がある。	1 生徒と接する中での見取りを的確に行い、良い点・課題点を把握・共有し、指導に生かす。 2 生徒の指導・支援について、保護者と密に連携することで、保護者や地域の実態を把握する。 3 教職員の人権意識の高揚を追求し、人権尊重を土台とした生徒指導・支援の充実を図る。 4 確かな単元構想に基づく授業づくりを進め、基礎基本の定着と、主体的・対話的で深い学びが授業・評価・家庭学習の連動のもと推進できるようにする。 5 研修（特に学習指導、生徒指導、学級経営、特別支援教育、人権教育、道徳教育）や実践を通じた学校全体の指導力向上に取り組む。 6 教職員の協力体制を構築し、人材育成を図る。
評価項目	重点目標	具体的方策	成果と課題（自己評価）
学校教育指導の重点、各学園の重点等を基盤として	教育課程 学習指導	・タブレット端末等、ICT機器の効果的な活用 ・各教科における課題解決型学習の推進 ・教え合い学習、ドリル学習実施による基礎基本の定着及び学習に向かう雰囲気醸成 ・学園や校内の目標を踏まえた授業研究会による指導方法の工夫改善	○ELSAなどの有益なアプリを活用した授業改善が進み、各教科における授業研究の機運が醸成された。 ○ドリル学習を日々積み上げたり、教え合い学習で生徒同士の教え合いを仕掛けたりすることで主体的に学習に向かう雰囲気作りができた。 △管理職が各教科の授業を参観し、個別に事後研究会を行うことはしたが、授業改善に直結する研究会の実施が不十分な状況である。課題解決型学習の要素も取り入れながら、生徒がより主体的に学び、学力を定着させるための授業改善を今後も追求していく必要がある。
	生徒指導	・生徒指導部会、いじめ防止対策委員会、教育相談部会等における生徒の実態把握と分析 ・組織的で丁寧な対応につながる指導方針立てと実践 ・教育活動全体、特に個別面談を重視した生徒との信頼関係構築 ・各種アンケートや感想を活用した実態把握と早期発見、早期対応 ・自他が尊重され、安心できる集団づくり	○週に一度ではあったが、部会における実態把握と分析、次の手立ての検討など、十分に協議し、学校全体の取組として反映させることができた。 ○定期の二者面談や日々の個別生徒への語りかけの中で、生徒の理解と指導・支援の言葉かけができ、信頼関係が構築された。 △いじめアンケートで得られた情報に係る指導展開に不十分な点があった。教職員の捉えの精度を高くすることと、組織としての連携を見直す必要がある。

	健康（体育）・安全	・ 基本的生活習慣の確立 ・ 健康・安全教育の推進	・ アンケートや面談による実態把握と保健・体育の指導による体力づくりと基本的生活習慣確立 ・ 保健分野（薬物、性、感染症予防等）及び安全分野（生活安全・交通安全・災害安全）の指導の充実による自他の健康安全に係る自律的態度の育成	○年間を通じて、健康安全や保健に関する指導を充実させることができた。 ○外部講師による講話、外部団体から借用した教具などを用いて効果的な指導が展開できた。 △安全分野に係る指導について、より現実味のある内容として企画できたが、生徒への指導の前に教職員の意識や知識のアップデートを図ることが必要である。
	人権教育	・ 教職員の人権意識の高揚 ・ 一人一人を大切にする教育の推進 ・ 確かな人権感覚を育てる人権学習の推進	・ 人権に関する校内研修における内容面の充実 ・ 生徒一人一人の良さを把握し、適宜伝えることによる包み込まれている感覚の醸成 ・ 人権学習の実施における指導内容の充実及び事前研修の充実	○校内研修において、人権教育に関する情報を教職員間で確認することができ、日々の人権教育の充実につなげることができた。 △人権学習について、生徒の現状も踏まえたものを展開しているが、より生徒が考えを深め自分事として捉えられるように指導内容を充実させる必要がある。
	特別支援教育	・ 特別支援教育に関する専門的な知識と指導法の共有と指導・支援の展開 ・ 特別支援教育に関する組織体制の充実	・ 研修での学び、専門家の助言等の共有と生徒への適切な指導・支援内容の展開 ・ 個々の生徒への適した指導・支援のための特別支援教育コーディネーター及び特別教育支援部と学年の連携体制構築	○支援が必要な生徒に関する情報共有、支援の在り方に係る研修を通し、教職員の学びを深めることができた。 △個々の生徒を適切に見取り、最適で必要な支援を行うための教職員のアセスメント能力を高めるため、さらに校内研修等を充実させる必要がある。
次年度に向けた改善の方向性		1 小規模の生徒数、教職員数の強みを見出し、それを生かすことのできる教育活動を推進する。 2 1園1小1中の学園体制となることを踏まえ、生徒のよりよい人間関係づくりに焦点を当てた生徒指導、特別活動、人権教育、道徳教育の取組を充実させるとともに、学園としての実践研究を推進する。 3 個々の生徒の状況を面談等様々な機会を介して把握し、個別の適切な支援が進められるよう、教職員間の情報共有を確実にを行い、組織的な動きに基づいた生徒の個性と能力の尊重に努める。また、このように取り組める教職員集団を目指した研修を重ね、人材育成に努める。		

(別紙様式1)

令和5年度学校評価自己評価報告

学校名〔京丹後市立久美浜中学校〕

学校経営方針(中期経営目標)		前年度の成果と課題	本年度学校経営の重点(短期経営目標)
＜久美浜学園＞ 指導の重点：学力向上 (1) 基礎・基本の徹底 (2) 主体的に学ぶ力の伸長(授業づくり) (3) 家庭学習時間の確保 ◇規範意識の醸成を基盤とし、当たり前前かがのことが当たり前にできる学校、「命」「今」「仲間」を大切にすする学校を目指す。 ◇久美浜学園保幼小中一貫教育の一層の推進により、指導観について共通理解を図り、系統的、組織的な教育実践を推進する。 1 非認知能力の伸長と、「主体的・対話的で深い学び」を追求した授業の充実による学力の向上 2 好ましい人間関係の構築と自己肯定感・自己有用感の向上 3 不登校の未然防止と不登校(傾向)生徒の改善 4 「久美浜学園学校運営協議会」を核とする地域力と学校力を統合した、地域ぐるみの子育て支援体制の確立 5 アフターコロナにおける「新しい教育の創造」		○主体的に行動でき、活発で自分の言葉で話せる生徒が多く、学習面においても落ち着いた雰囲気に取り組むことができた。 ○学習指導要領の趣旨や生徒指導提要改訂に伴う校則の見直しなどについて、生徒や保護者に丁寧に説明するとともに教員の研修を充実させた。ICTを活用した授業実践も大きく前進し、授業研究会も盛んに行われた。 ○効率的に方針立てするための体制づくりに努め、組織で対応にあたるとともに、要対協をはじめとする関係機関と連携して解決にあたることができた。 ○ジェンダー平等やLGBTQに関する取組や指導を展開し、一人ひとりの生徒に寄り添った人権教育が充実した。 ○地元高等学校との連携を強化し、高校の教員や卒業生による講話や交流事業を充実させたことにより、キャリア教育に関する関心が高まり、近隣公立高等学校への進学率も高まった。 △別室指導が充実し、改善傾向の生徒も増加した一方で、コロナ関連による欠席や出停、不登校生徒など、学校で授業を受けられない生徒が増加し、学習の未定着や二極化など、課題を残した。様々な手法による学習機会の提供の整備が急務である。 △徐々に諸取組を正常化させることができたが、各校園所における実態が異なり、学園としてのまとまりは十分に回復できなかった。	1 教育活動の重点的方針 (1) 認知能力と非認知能力を一体的にはぐくむ授業改善の推進 (2) 地域に貢献できる人材の育成を目指した「久美浜ならではの教育」と「開かれた教育課程」を進めるための戦略的カリキュラムマネジメントの推進 (3) 価値観の変化への対応と多様性へのさらなる寛容性を具現化するための教育活動の精選と新たな生徒指導及び教育相談の充実 2 職務上の重点的指針 (1) 現行学習指導要領の趣旨に沿った授業づくりのための教員の資質向上 ・評価方法や授業展開等における研修の充実 ・「開かれた教育課程」を目指した地域資源や丹後学を活用した授業づくりの推進 (2) 生徒指導提要の趣旨に沿った生徒理解の推進と組織体制の整備 ・発達支持的生徒指導の具体に関する研修の充実新たな不登校生徒へのアプローチとICTの活用 ・校則改定やジェンダーフリー委員会を軸とした取組 (3) 教職員の働き方改革推進及び服務規律の徹底 ・勤務や勤務時間に対する意識改革 ・通信機器や個人情報に係る危機意識の向上 ・高い創造力をもつ教師集団づくり
評価項目	重点目標	具体的方策	成果と課題(自己評価)
学校教育指導の重点、保幼小中一貫教育の諸計画及び各学園の重点等を基盤として	教育課程 学習指導 ◇認知能力と非認知能力を一体的に伸長させる学力向上・授業づくり・ICT活用の取組 (1) 個別指導の充実と学習機会の場の提供 (2) 授業とつなげる家庭学習の工夫	◇文部科学省リーディングDXスクール事業を活用したICT活用の研修充実と学力向上の取組推進 ◇タブレットの持ち帰りによる家庭学習の充実 ◇学習支援加配を主軸とした学力向上の全校展開 ・個別最適学習の推進 ・特支学級・別室生徒を含む学習面の課題をもつ全ての生徒への責任あるフォローアップと進路実現 ・効果性の高い詳細な学力分析と方策の立案、教科を越えた具体的授業改善と授業研究 ◇定期テスト改革推進と定期テストのみに依拠しない単元や定着を重視した評価の場の設定 ・各教科のシラバスと評価方法の提示 ◇グローバル人材の育成と英語力の向上	○学校のデジタル改革を目指した指定事業を活用し、多くの成果発表会、研修会、公開授業等を実施した。ICTを効果的に活用した授業づくりの取組の活性化により、教員一人ひとりの意識と授業力が向上したとともに、生徒の協働的な学びや学力向上の面で大きな成果が見られた。 ○タブレットの常時持ち帰り、「エルサスピーク」などのアプリも充実したことから、授業と家庭学習をICTで効果的に繋ぐことができた。 ○市主催のオンライン留学やチームラボ等にも積極的に参加する生徒が多く、英語習得やグローバル人材育成プログラムに対する興味関心が高い。海外派遣事業にも多く参加する予定。 △今後は、不登校を含むすべての生徒一人ひとりを伸ばすための個別最適な学習の研究や推進を重点的に展開していく必要がある。

生徒指導	◇不登校・不適応傾向生徒に係る課題の解決に向けた取組 (1) 生徒指導の機能化 ・不適応生徒の学習指導の充実 (2) 主体的活動の活性化 ・校則の主体的検討、SDGsの取組のさらなる活性化	◇生徒指導・教育相談・特別支援教育の一体的展開 ◇別室機能のさらなる強化と学習補充の充実 ◇生徒会活動・学級活動の充実と継続 ◇討議・話し合い活動の場の設定 ◇SDGsの取組継続と丹後学・横断的学習の展開	△コロナやインフルエンザ等による欠席や出停、不登校生徒など、教室で授業を受けられない生徒が増加し、学習の定着、二極化に課題を残した。 △アフターコロナにおけるコミュニケーション力の回復が課題。様々な主体的活動の活性化が必要である。 ○SDGsの取組をはじめとする生徒会活動がさらに活性化した。取組は久美浜学園全体に広がり、環境関連フォーラムでの発表等、町外にも積極的に発信することができ、生徒の自信や自己肯定感の高まりに繋がった。
健康（体育）・安全	◇実効性ある危機管理マニュアルの確立、避難訓練等の充実等	◇緊急時対応訓練の実施（土砂災害、火災、不審者、地震） ◇感染防止を含む健康安全に関する自主的な向上意識を高める指導とマニュアルの徹底 ◇健康・安全に関する教育の充実	○学校内での感染防止に努め、予定していた様々な諸取組や行事を実施することができた。 ○危機対応マニュアルを踏まえた火災や地震等の避難訓練を実施するとともに、京丹後警察を招いて不審者対応訓練を実施した。
特別支援教育	◇校内指導体制の機能化 ◇通常学級における特別に支援を要する生徒に対する個に応じた指導の充実 ◇合理的配慮の継続的検討と組織的対応	◇特別支援教育の視点で展開する全教育活動の展開 ◇特支アセスメント・個別の指導計画・個別の支援計画・小中連携資料・教育相談個票の日常的活用と検証、全教員での共有化 ◇支援を要する生徒の把握、有効な手立ての蓄積 ◇担任並びに担当者と本人・保護者との丁寧な懇談 ◇通級指導の実施、保護者・教科担当・担任・関係諸機関との連携の強化	○ユニバーサルデザインと特別支援教育の視点で全教育活動を捉えた実践が進んだ。 ○特別支援教育コーディネーターを中心に、組織で適正な見立てを行い、不適応傾向の生徒の学校での生活環境を整えることにより、改善を図ることができた。 ○よさのうみ支援センターや各病院・クリニックなど、多くの関係機関との継続的連携により、専門家の助言を生かした根拠ある見立てと効果的な指導が可能になった。
開かれた学校づくり	◇キャリア教育の横断的展開と地域連携の強化 ◇学校運営協議会を窓口とした校内教育活動の展開	◇丹後学の充実…丹後学・ふるさと学習・体験学習の一体的展開 ◇学校運営協議会・地域学校協働活動と学校教育活動の実効性ある一体化 ◇学校運営協議会を窓口にした地域人材の活用…講話学習・授業への積極的活用 ◇学校支援ボランティアの積極的活用・拡充 ◇同窓会等と連携したふるさとと母校を愛する心情を育てる取組の推進 ◇地元高等学校との連携共同事業の活性化	○コロナが一定収束し、体験活動や職場体験活動を計画通り実施することができた。 ○キャリア形成の視点で、教科授業や「総合的な学習の時間」、特別活動を関連付けしながら展開し、ふるさとや地域振興、進路や将来について考える機会を多くもつことができた。 ○同窓会との共催により「くみちゅうキャリアフェスティバル 2023」を開催するとともに、遠隔交流事業など緑風高久美浜学舎との共同事業を数多く展開し、地元や地元の学校に対する意識が高まった。
次年度に向けた改善の方向性	◇生徒指導提要における授業づくりの4つの視点『①自己存在感の感受 ②共感的な人間関係の育成 ③自己決定の場の提供 ④安全・安心な風土の醸成』に沿った授業改善を進め、「わかった」「たのしい」と思える学級や授業づくりを進めていく。 ◇増加した学校不登校出現率を改善していくため、学習や人間関係、家庭環境や生活習慣などについて、一人ひとりに対しての丁寧な指導・支援を展開し自立を促していく。 ◇ICTをさらに活用し、個別指導・家庭学習などの充実、学習の場の提供などを促進し、個別最適化された望ましい指導を組織で展開できるよう、環境整備、研修等を充実させる。 ◇学園内の小小間の学力格差是正を支援し、中学校入学時や各期の接続をより円滑に行えるよう、中学校がリーダーシップを取り一体感のある学園経営を行っていく。		